

TEN No.27

Jun-2025

TERADA Fumie

YUUKI Maiko

AYUMURA Syou

NAKAMURA Fumie

TSUSAKA Haru

目

次

蜘蛛の糸

寺田文恵

006

ファミリ―

悠希マイコ

010

西南西よりやや西

鮎村尚

096

環を描く

中村郁恵

156

いずこよりいずこへ

津坂格

172

編集室の窓明り

270

小誌のホームページ

<http://www.tennet.sakura.ne.jp/>



小誌のフォント

表紙「椽」：FC淡古印体

扉 英数字：Segoe Script

作 品：游明朝

文芸同人誌「椽」

第二十七号

蜘蛛の糸

寺田文恵

都会ばかりか、田舎の町にも、外国人観光客が押し寄せるようになっていた。

私の暮らす岩見沢市は人口七万五千人ほどの町なのだが、札幌市に近い豪雪地帯とあって、この冬は雪を面白がる中華系の観光客が、たくさん訪れた。たくさんといっても、いわゆる“聖地”がある訳でもなく、外国人観光客相手の観光名所をアピールしていることもないから、まだおとなしい。たまたま今シーズンには、札幌の雪が少なく、今ひとつ北海道らしさを楽しめなかった観光客の間で、「岩見沢っちゅうところは雪が多いそうだ！ 札幌から一時間足らずで、交通の便もいいらしい」みたいな情報がネットで拡散された。で、通勤通学時間帯以外の日中は、駅周辺で家族連れの賑やかな中国語が飛び交っていた。

仲間うちでは、「こんな時こそ、スキー場とかワイナリーとか既存の施設にお客を集める工夫をすればいいのに」なんぞと勝手なことを言っている。観光客が来るようになってから、慌てて対策を講じるのではなく、文化の異なる相手を取り込むからには、よくよく準備しなければならないといった行政視点の考察はない。所詮ヤジ馬の与太話。

それにしてもこのところの外国人観光客がらみのニュースには、呆れることが多い。線路上で撮影していて列車にはねられた人、名所の写真を撮ろうとし（ていたらしい）、橋から転落した人。折角の旅行で命を落とす事故は、北海道ばかりではないだろうが、紛争国でもない日本で、敢えて危険な行為をして命を落とすこともないだろう。

ニュースといえば美瑛の名所がまた一つ無くなったという報道。白樺並木が伐採されたのである。このところのオーバートーリズムで荒らされ、生活圏を脅かされている住民と、もう手の施しようがないと判断した行政が、納得づくで実行に移した結果だ。

美瑛は、写真家の前田真三さんが自然の美しさを写真で紹介してから俄かに有名になった町。観光客が増えるに従って、町の農業者のみなさんが、“丘のまち”の美しさを維持するため、随分ご苦労されたと聞く。パッチワークのように異種の作物をレイアウトしながら作付けしたり、牧草ロールや、作物を乾燥させるため畑に高く積み上げたニオを整然と並べるなど、農村風景を美しく印象づけるための努力をされているのだ。そうした農地を踏み荒らし、我先に撮影スポットを探し回る輩がここまで増えるとは予想外だっただろう。

日本にも「旅の恥はかき捨て」ということわざがあるし、かつてビートたけしは「赤信号みんなで渡れば怖くない」とも言ったが、大勢になるとこんなにも傍若無人になるのかと呆れるばかり。こんなブームはいつまでも続かないだろうから、しばらく我慢しようね、と言っているうちに、日本の誇る美しい景色や佇まいが失われてゆくのを想像すると、ただただ哀しい。ギリ貧の日本で、目先の利益を追うことに汲々としているうちに、我々は大切なものを見失っていくのかもしれない。昨年、友人らと層雲峡に出かけた。私などは三十年以上ご無沙汰だったろうか。

タモリ氏が食いつきそうな大函小函の柱状節理。名瀑・銀河の滝、流星の滝。その雄大な景色に再会できるものと思いきや、指定の駐車場からは、滝が全く見えないのだ。

売店を訪ね、この場所で間違いはないのかと尋ねると、「昔は目の前に滝が見えたんですがね」との返事。ずっと以前はこの滝のすぐ脇に国道が通っていて、観光バスの車窓から景色が楽しめたのが、少し離れた場所に国道が移り、旧道だったところが駐車場になったとのこと。オマケに滝が落ちる川の岸には大木が生い茂り、目かくしとなって滝が見えなくなってしまったのだという。

滝が見たければ、整備されていない藪をかきわけ、土手を下りて川岸まで行くか、売店裏の遊歩道を登って、高いところから立木越しに眺めるかの二択だそう。我々は遊歩道に向かったが、足場が悪く勾配のきつい小道に、途中でギブアップ。よろよろと降りてきたのだった。

「諦めました」

報告かたがた、売店に戻り、トイレを借りる申し訳に、お菓子を一袋求めた。

「木を伐採してくれれば、前みたいに観光のお客さんが来てくれるんでしょけど、国有地だから勝手なことではできないし……」

「そうですねエ」と相槌を打ったものの、踏み荒らされる平野の観光地を思うと、いつそそのまま人知れず木々に埋もれていくのも一興かと考えさせられる。

ふと芥川龍之介の「蜘蛛の糸」を思い出した。地獄からひとりの悪人を救いだしてやろうと、お釈迦様が一本の蜘蛛の糸を垂らす。悪人はその糸を伝って地獄から浮かび上がろうとするが、下を見ると、あとから大勢の悪人どもが糸にぶら下がってくる。このままでは糸が切れてしまうと恐れた悪人は「この糸は自分だけのものだ」と叫ぶ。それを聞いたお釈迦様は落胆し、糸を離してしまう、という物語。

今この時代、この環境で生きている身がひとことで感想を述べるなら、「人間の真理をついた普遍的な文学作品」だろうか。

とは言え、旅への憧れが私にもあることは否めず、外国語が降り注いでいる観光地を歩くたび、ひたすらモヤモヤしているのである。

ファミリー

悠希マイコ

1

昨夜からの雪で路幅が狭くなっていた。除雪車が通った跡は鋭利なもので削られた影響で道路が光っている。

まだ明けていない薄っすらとした町の中を走る車のライトが、次第に目立たなくなってきた。見上げれば、グレイの空はただそこにあって、何も映し出していなかった。それは僅かに光沢のある薄く透明な布で覆った悲しげで大きなグレイだった。

細い雪が視界に入ってきた。雪の隙間をぬうように、次第に現れた白く濁りながらも光りを放ち始めた太陽は、低い位置で丸い輪郭を覗かせ仄かな乳白色の縁取りを保っている。わたしはその白

へ向かっていた。目を細め、光の帯を辿って手を伸ばせば、この両腕にすっぽりと入る大きさであるのに、どんなに走ってもそこへ辿り着くことのできない少しの悔しさをのみこむ。

なあ、夏。もしも今、一万円あったら、お前、何が欲しい。

一瞬、兄の声が聞こえた気がして、わたしは目を閉じた。

灯油の切れた部屋の中、父の帰りを待つ兄妹は、その夜のごはんが食べられるか、食べられないのかと考えている。暖を取れるのはコタツだけで、小さなわたしはその中へすっぽりと入り込み、うつ伏せになっていた。テレビから流れる音がせめてもの救いで、口を開けるたびにふわっと漂う自分の白い息が、どの辺りまで見えるのだろうか、そんなことも思っている。

そして、兄は、わたしにもう一度、問う。お前、何が欲しい。兄が、しかし側にいるはずがなかった。それはもう三十年以上前の出来事なのだ。

新年の夜明けを特別に想うこともなく軽トラックの助手席に座り、黙ったまま目を開く。

「しかしなあ、なっちゃん。元旦から呼び出されちゃあ、かなわんよね」

隣でハンドルを握る持ち主の声で、わたしは現実引き戻された。

八十四歳の池田社長は小柄な人だけど、実にフットワークが軽くタフで尊敬している。年老いた、という言葉が当てはまらないので、社長の年齢をお客に伝えると誰もが驚く。それでもたまに危ないつかしい運転をするときがあつて、トラックに四つ葉柄のスッテカーをつけたほうがいいと思っているのに、わたしはずっといい出せなかった。

昨夜から近郊の温泉宿で親族と過ごしていた社長は、客からの電話で出勤し、わたしを迎えに来てくれた。仕事依頼は一年中、二十四時間、会社の電話から社長の携帯に転送されて掛かってくる。夜中に呼び出しがあるかもしれないと思っていた連絡に、やっぱり来たかと思い携帯をタップしたのは、新しい年が始まった直後だった。古い車体のラジオはAMしか流れず、かしこまった男の低い声が新年の希望を誇らしげに告げ、年末恒例番組の視聴率予想を語っている。

「仕事はいいけど。いいのか、悪いのか。不景気は相変わらずだ。この一年も、俺たちは忙しくなるだろうよ」

年末年始だからといって、わたしが仕事を断る理由はなかった。三十八歳の独り身のわたしが、ぬくぬくとした暖かい部屋の中で心休まる誰かと過ごす予定がないことを、一番知っていた。

十二月の最後の週が始まってすぐに、暮れから年始までの従業員の予定を確認したとき、わたしは真っ先に「いつでも出られます」と答えていた。他には、六十八歳の吉岡のおじさんと、五十代の飯久保さんが手を挙げた。従業員といっても、他にいるのは吉岡さんの奥さんと、田部さんという七十歳のおじさんだけで、あとは個人の大家から入る退去後の室内掃除や、引き取った品物の手入りを頼む近所のベテラン主婦パートが一人しかない。いよいよ人手が足りないときには、社長がどこからか人を連れてくる。

依頼された部屋の物品搬出処理が、わたしたちの仕事だ。

「一週間前に電話で見積もりした人だけど、まさか今日になるとは。ソファールとテレビ、折りたた

みベッドと言っていたけど。困っているみたいだし、悪いねえ。なっちゃん」

古い団地と閑静な住宅が共存しあう町へ向かっている。冬季オリンピックが開催された年に地下鉄が開通してからは、国際向けに整備された街並を強調する新しい団地が軒並み建ったといわれている。父が大事に持っているオリンピックの記念貨幣は百円で二枚あった。

冬に生まれたから冬馬で、夏に生まれたから夏子だなんて簡単につけられた名前だけれど、そのころはまだ幸せに暮らしていたのだろうか。男親なら誰もが願う、息子への期待を込めて大事に持っていたのだろうか。その息子は今、連絡先も教えずにどこでどう暮らしているのかわからない。ただ、ときおり、ふっと風のごとくわたしの前に現われ、少しの言葉を交わし、また同じように消えてしまう。

「連絡先は教えない」冬馬はいった。「夏のところに、借金取りが来たら嫌だろうし、お前の携帯番号も俺の頭の中だけに記憶しておく。もしも、お前がどこかへ行くことがあったら、社長に行き先だけは残してくれ。いつでもお前を見守っている」

借金取りから逃げていた冬馬が、妹のわたしに見守っているなんていうからおかしくなる。けれども実際、兄のつくった借金はすでに返し終わっているはずだった。いったい、今、兄が何から逃げているのかわたしにはわからない。父さんには迷惑をかけたから、俺は会いにいけないと兄はいう。父が一人で住む家に、人相の悪い男たちが何度も来ていたことを気にしているのだ。縁を切るとさえ父はいった。その兄もまた、別れた一人息子を持っていた。甥の速人（はやと）と最後に会

ったのは、わたしが男に逃げられて抜け殻になっていた頃だったから、もう五歳になっていただろう。兄が離婚してから数年がたち、その間に父は病氣になってしまった。ずっと暮らしていた団地を引き上げて、わたしは入院している父を看ている。その頃はまだ軽度だった認知症が発病してから数回、警察に保護され、そのたびに父を迎えに行った。父はわたしの顔を見て安心した顔を一瞬向けると、「なあんも、夏が来るまでじゃあ、ないのによお」と口を尖らせていたが、自分が帰る家やわたしたちを忘れて行くことの不安や恐怖はあったと思う。今は脳梗塞でそのまま病院の世話になっている父が、最後に自分の意思で向かった先の浜辺で倒れたのは二年前だった。釣りなどと暢気な趣味も持たない人であつたし、家族で海水浴へ行つた記憶すらない。誰もいない秋の海を見たかっただけなのか。その場所にいったい何を求めたのか、今となっては、わたしは知るすべがなかった。わたしが馬鹿みたいに男にのぼせている暇があつたら、もつと父と向き合えばよかったと、今さら考えてもどうしようもない。親類と呼べる人もなかった。父は七十四歳で、内臓だけは頑丈に機能しているから、脳だけが世間から取り残されただけだ。なにも分からなくなった父は、わたしが自分の娘だという認識がなく、ときおり母の雪子だと思つて濁つた声で「ゆーぎざん」と笑うことがあつた。わたしたちを置いて出て行つた母親の名前を呼ばれたときに、父が心の奥で母をずっと求めていたのかもしれないと感じ不思議でならなかった。出て行つた母の行方を捜そうとしなかったのに。それとも、いつか自分の元へ帰ってくると信じていたのか。

母が出て行つてから、家族は途端に貧困の渦に巻き込まれてしまった。それまで母が内職をして

いたといっても、多分、ほんの僅かな賃金だったろうから、父の働きで家族は最低レベルの中でもなんとか暮らしていたと思う。母がいるだけで家の中は明るかった。チラシを折る仕事をしていた母の隣に座り、しりとりをして遊んだ記憶は、いつも時間がわたしを孤独にしたときに思い出す情景だった。エレベーターのない団地の五階にあった狭くて寒い部屋の中で、母がいて、そばで兄が寝ころびマンガ本を読んでいるひと握りの記憶を手繰り寄せるとき、温かな気持ちにさせてくれた。悪いことは続くもので、母が出て行ったあとに、父の働く工場が閉鎖してしまった。父は自動車の整備士だった。なんとか人づてに仕事先を見つけたが、思うほど給料はもらえなかった。未払いの賃金も最後はどうなったのかわからない。わたしが小学校一年生で兄の冬馬が中学一年生だった。当時、中学では給食がなかったから、冬馬は毎朝自分で具のないおにぎりを握り通学していた。高校受験の頃になると、担任の先生が家を訪ねてきたが、父は一度も会うことはなかった。兄が自分で全てを決めるしかなかった。朝夕の新聞配達を始めたのはその頃だ。

困窮していた家の中でどうやって息をしていたのか、わたしはあまりよく覚えていない。ただ、幼いながらも父と兄に我儘をいってはいけないと思っていたし、本当のところは、不満をいう暇がないくらいに、日々、生きることに精一杯だった。

やがて大学への進学を諦めた兄は、夜の街でホストとなり、しばらくすると家を出て行った。小さな頃から「俺は父さんのように真っ黒な爪をして働きたくない」といっていた冬馬だったが、だからって、就職が決まらずにホストになるなんて思っただけで、そのおかげでわたしが高校へ行

くことができたのは事実だ。髪を染め、背の高い華奢な体に身に着けた兄のスーツ姿を、わたしは誇らしげに見つめていたものだ。父が着る油で汚れたつなぎの作業服姿しか見たことがなかったからだ。男がネクタイをすることの意味をいつも考えていたのかもしれない。それまでも、冬馬が高校生になってからは、父と顔を合わせば喧嘩になる日が多くなっていたから、二人の仲は最悪だった。わたしがいるときは、二人の間に割り入ってどうにか収まったが、兄は、父の全てを否定した。母がいなくなったのは「親父のせいだ」と罵声を飛ばすようになったのもその頃だった。

「チャラチャラしやがって、みつともねえ」という言葉は口癖となり、そのたびに諍いがはじまる。父が冬馬の金髪を引っ張ったとき、自分よりもはるかに背の高くなった息子が、「俺はこれで食ってんだ」と拳を振り回した。極めつけは、兄の作った借金の取り立て屋が頻繁に家へ来るようになってからで、ますます父との関係が悪くなり、大喧嘩をしたまま、兄が戻ってくることはなかった。わたしは、兄の、あの時のギラついた黒い眼を時折思い出すことがある。父がとても小さく見えてならなかった。実際、父がもつとしっかりしていれば、こんな生活をしなくてすんだのにと思う気持ちに交差し、どうにもやりきれなかったのは本当だ。家を出ると冬馬から聞いたとき、心の奥底で、ホッとしたのだった。

そして、わたしもまた必死で生きていた。高校を卒業して就職した繊維会社が二年足らずで倒産してから、何かしらの仕事を見つけては働いていた。わたしのことを可愛がってくれていた兄が、いつしか店のついで身動きできなくなり、妹を借金のカタに売ろうとしていたなんて思いたくなくな

ったが、それを今さらどうこうといっても仕方がない。兄が世話になっていたクラブのママに拾われて、ホステスとして働くこととなった。ママのスポンサーは暴力団の親分だったが、誰からも慕われる一本筋の通った人で、わたしのこともずいぶん可愛がってくれた。お客と酒を飲み、楽しい会話をして、気分よく帰っていただくだけで、繊維会社で働いていた給料とは比べ物にならない額の手当てがもらえた。ようやく兄の借金も返し終わった頃に親分が死んでしまい、店は潰れ、やがてママはこの街から消えた。

今、わたしは池田社長に拾ってもらい、この仕事をして暮らしている。

「なあ、夏。もしも今、一万円あったらお前何が欲しい」

母が出て行ってから間もなく、七歳のわたしに、十三歳の冬馬が訊いた。はつきりと覚えている当時のやり取りは、いまだに、いつもわたしの頭の中だけを泳いでいる。

「夏ね、欲しいものない。だから、とっておく」

欲しいものなんて数え切れないほどあった。同級生が夢中になっていたアニメキャラクターが描かれたノートや、香り消しゴムすら持っていなかった。もしも、欲しいもののどれかひとつでも手に入ったら、きつとまた別な何かが欲しくなることを、当時のわたしには、わかっていたのだろうか。本当に欲しいものはお金で買えないのだということも。どんなに父と兄が悪くいっても、わたしは母が欲しかった。たおやかな乳に顔をうずめてぎゅうっと抱きしめてもらいたかった。それが一番欲しかった。わたしが持つ記憶の中の母はとても優しかったのだから。どうして自分だけで

も連れて行ってくれなかったのかと考えても、母を恨むことを思いつかなかった。いつか帰ってくると信じていた。

今、どう生きているのかわからない。大人になってから何度か捜そうと思ったが、どうしてかその氣力がなかったし、相変わらず、わたしは日々の暮らしに精一杯だった。

午前七時。約束の時間。住んでいる気配がない暗く汚いエントランスを通る。かび臭く建物全体が湿っている感じ。メールボックスからはみ出たチラシや郵便物が床に散らばっていて、水を含んだ紙が破れている。共用部分の廊下には、私物があちらこちらに置かれ、といってもゴミ袋とマンガやエロ本を縛った状態で、それらがいつそうこのマンションのレベルの低さを思わせた。

「すみません、朝早くに」

錆びた古い鉄のドアから顔を覗かせた二十代と思われる男は、浮腫んだ顔を向けて頭を下げた。長い髪を掻き分けると、頭皮の脂臭が鼻をついた。わたしはドアにストッパーを掛けて扉を全開し玄関のたたきに立つと、無言のまま長靴を脱いで、持ってきた縦長に折られたブルーシートをくると部屋の中へ向かって転がしていく。ジーパンにエプロン、厚手のフリースがわたしの作業着だ。社長が、「なっちゃんは、ポニーテールが似合う」と褒めてくれるものだから、仕事では肩まであるシャギーの入った栗色の髪を、ひとつ結びにする。

ススキノで働いていた頃は、出勤前、行きつけの美容室に寄りセットしていたものだ。巻き髪に

したり、束ねたり。和服の時は着物に合わせてまとめた。今では年に数回カットするだけで、カラーも自分でしている。

1DKの部屋に、生乾き特有の匂いとオレンジジュースの腐ったような臭いが、混ざり合うことなくところどころで漂っており、マスクを着けていても強烈に鼻につく。暖房の入っていない部屋の中はとても寒くて、薄暗い中でも男の吐く息が白くわかった。このマンションで、一番陽のあたらない北側の部屋。曇りガラスの向こうには隣の建物の影が黒く映っている。

軍手を着け、予め社長から聞いていたソファーに手をかけて軽く浮かせてシートの上に乗せると、ゆっくりと引きながらドアの外で待つ台車に縦にして乗せた。黒い生地から悪臭が頬に触れる。社長も黙ったままベッドを半分に折りたたみ、キャスターの力で玄関へ移動させてからテレビを運ぶ。男はその間、隅っこの方で、ただ、わたしたちの作業を見ていた。玄関を入ってすぐの扉の前を通るたびに、トイレドアの隙間から尿の匂いがした。凍結なのか、水を止められているのかどちらかだろう。床に敷かれたラグマット、窓の長さよりも短いカーテンを外し袋に入れ運ぶ。

「あおう。この布団もいいですか」男が申し訳なさそうにいった。

「ああ、いいよ。追加、五百円になるけど大丈夫かい」

「お願いします」細い声。わたしは腰のベルトに付けている荷紐を引っ張ると、手早くその塊に通した。生温かな感触があった。

台所の棚から取り出した僅かな食器や干からびた菓子袋をゴミ袋へ入れていく。指示されたもの

を玄関の外へ出すと、部屋の中にはくたびれたナイロンバッグが一つとゴミ袋が三つ。そして、男の靴が一足、玄関のたたきにあるだけとなった。

「いーよ、運んで」社長が小声で指示を送ってくる。わたしは領きソファアを乗せた台車を押してエレベーターへと運ぶ。エントランスにソファアを下ろすとまたエレベーターに乗り、廊下に出されたベッドとテレビを、同じくエントランスに置いた。部屋へ戻ると、ちょうど男がお金を払おうとしていたところだった。布団を台車に乗せるとシートを片付け、社長を待つ。部屋は明るくなっていたが、白い息は隠せなかった。

社長が斜め掛けにした黒いバッグの中から領収書とそろばんを取り出す。そろばんは二十センチほどのもので、もう五十年は使っている年季の入ったものだ。電卓も持ち歩いているけれど、使うのを見たことがない。

「なにか、売れるものはなかったですか」

「悪いけど、買い取りできるものはないですね。テレビはアナログだし、ソファアもバネがいかれている。処分費だけです。うちは、お客さんの負担を減らすために、大型ゴミ処理費は市の規定通り軽減方式ですからね」

家電がないことから、すでに買い取り業者に依頼した後だとわかる。

「そうですか。全部で、二万三千八百三十五円と、追加の布団が五百円ですよね」

男は、すらすらと数字をいった。そろばんを弾く音に耳を澄ませる。

「そうだった。本当なら早朝料金かかるのですよ。うちは八時半から五時半までが定時なので。それ以外は割増に。それに今日は元旦で休日出勤になるけど。まあ、割増は取りません。んー、ソファー五百円とベッド五百円、テレビが廃棄料三千八百三十五円、車輦費一万五千円、人工代（にくだい）四千元、追加の布団と全部で。お兄さんの言う通り。二万三千元でいいですよ。そのゴミ袋も一緒に処分してあげます」

「助かった」男はそういつて万札二枚と五千円札を差し出した。

「本当は昨日までにここを引き上げなくちゃいけなかったんです。家賃、半年も滞納しちゃって。保証人とも連絡取れないし。部屋を空にしくちゃ大家さんが裁判するって言うし」

「はい、じゃあこれ、おつりと領収書ね。で、滞納したその家賃、どうしたの」

「部屋の中をすっかり空にして、今すぐに出て行けばいいと言ってくれて」

「そりゃあ、兄さん。大家さんに相当、感謝しなくちゃだめですよ。いまだきそんな大家さん、めったにいませんよ」

「はあ」

「借りる側はさ、最初は何としてでも安く借りたいものだから、家賃交渉して値切ってくるけど、結局、最後こんなことになることが多いですよ。まあ、たいてい、そんな強引な客は、良い客じゃないです。部屋のクレームばかりいつてきたりするし。貸す側もたまつたもんじゃないと思いますわ。自分の持家だと思って大事に暮らしてくれる人は少ないね。ああ、で、これから何処行くの」

「高知に帰ります」

「高知。そりゃあ遠いな。飛行機かい」

「飛行機だなんてとても。どうにかして帰ります。でも、おかげで何か食べられます」

「食べてないの」

「一昨日から。この金だけは取っておこうと思って。裁判なんかあったってどうしようもないし。これ以上、誰かの世話にならないし。仕事クビになって、働くところなくて。もともとバイトだから、何の手当てもないし」

「仕方ねえなあ、お兄さん。正月だっていうのに。そーしたら、ほれ。五千円とっておきな。俺たちの饑別だよ。気をつけて行くんだよ。帰る場所があるのなら、それが一番さ」

黒く節くれだったごつい指に挟まれた今受け取ったばかりの紙幣が、白くて薄い掌へと移っていく。

「いいんですか？ あああ。ありがとうございます」

今にも泣きそうな男の声だった。慈悲が人をだめにするのをわたしは十分知っていた。社長だって誰よりもわかつているはずだ。

部屋の大家や不動産管理会社からの仕事ではない限り、こんなことは数えられないほどあった。個人の客はたいてい金がないか夜逃げだったし、あとで振り込みますといって、すでに数カ月も過ぎている客もいる。そんなお客の荷物の引き取りや処分、生活用品や家電買い取りの仕事をやって

いるのがわたしたちだ。実際、買い取りできる品物は無いに等しい。買い取ったとしても、それを綺麗に加工しなければ売りものにならないからだ。その手間を計算すると、結局値段はつけられない。「ご恩は忘れません」といつても、無事に目的地についたとか、あの時は助かりましたとか、連絡をくれた人がいただろうか。

わたしたちの利益は車輛代の一万五千円と人工代四千元となる。この四千元がわたしの手当てだ。処分量や労働時間でそれは異なるが、簡単な仕事だと三千から四千元。買い取ったものや引き取った中に運良く値段がつけられた商品は、手直しをして倉庫の入り口に展示して売っている。近所の住人や通りすがりの親子が覗いていく。よく売れるのが自転車で、その次はおもちゃ類、事務用の机や椅子だ。それ以外の品物の大半は海を渡ってどこかの国へと流れている。

大型ゴミ処分にかかる廃棄料は市で決められた料金だから、右から左となる。規律を守らなければ引き受けてもらえないので、清掃工場へ運ぶ際ルールを守らず出入り禁止になったり、警察に通報される業者は数知れない。顔見知りとなった工場の従業員は「池田さんとのゴミは安心だ」とお墨付きを貰っていて、それが誇りでもあった。

倉庫に運び込まれた細かなゴミの仕分けは、想像できないほど長くかかる作業だったが、たった一時間程度の現場が、一日に何件も入ると結構いいお金になるものだ。

「お疲れさん。でもさ、なっちゃん。俺たちはこれで食べているんだわ。今年はススキノの店も、あと数百は倒れるよ。忙しくなるさ」

社長の言葉はいつもの中する。

確かに昨年の秋頃から不景気の影が街を覆い始めていた。真っ先に打撃を受けるのは小さな飲食店で、その撤退の備品引き取りの仕事は毎月多くなっている。煌びやかなススキノの灯りがあと数百は消えてしまうのか。かつて、わたしが夢中で生きていた街だ。

車に乗った途端に社長の携帯が鳴る。仕事依頼だった。車は東へと向きを変える。

「あの若いアンちゃん、泳ぐ場所を間違えたんだなあ。最後まであきらめずに泳ぎ切らなきゃ。俺らは、それを繋げる手伝いをして、ご飯食べさせてもらっているのさ」

社長がたまに使う言葉にわたしは黙って頷いた。

正月の病院は静かだった。父のベッドは四人部屋の窓際で、陽の光が低く入り込んでいた。眉毛がぶら下がるくらい伸びている隣のおじいちゃんに年始の挨拶をしたが、聞こえていなかったかもしれない。

見舞い客にすれ違うこともなかった。患者の半分以上が外泊しているとすれ違った顔馴染みの看護師がいつていた。それでも食堂室に貼っているメニュー表には、大晦日に父が好物の蕎麦と今日の昼食には小さな餅の入った雑煮のイラストが記されていた。父のベッドの側には、わたしが来ることをわかっていてそのままお椀が置かれていた。

餅を食べられない父のために細かく調理された具沢山の雑煮で、そのつゆをスプーンで口元へと

持っていくと、実に美味しそうにびちゃびちゃと音をたて、齒の生えていない赤ん坊みたいにその汁を吸った。

首にガーゼタオルを巻いた父の顔を見て、変形した左側の口からこぼれる涎を拭き、洗濯物を整理すると、わたしのすることは何もなかった。ただ、そうして小一時間を病室で過ごし、ナースステーションに挨拶をして帰ってくることを一日おきにしていた。

病院からの帰り道、適当に野菜と肉を買ってきた。コンビニにも生鮮食品が並んでいるのはありがた。この二年住んでいる十畳ほどのワンルームがわたしの部屋だ。三万円の古い木造のアパートだが、西向きで日当たりがいい。二階への階段は外にむき出しでひどく錆つき、いつか崩れ落ちるのではないかと毎日想像しながら上がっている。玄関を入れて手前の台所スペースが四畳でトイレと風呂、奥に続く和室が六畳で長方形のタイプだ。右にある押入れ、反対側の壁にシングルベッド。出窓の下小さな棚。中央に置いた楕円テーブル。前に住んでいたマンションとは大違いだったけれど、わたしにはこの部屋のほうが合っている。

ススキノで働き始めて数カ月後、父と一緒に住んでいた団地を出てからは、三回、引越をした。最後は家賃の高いマンションに住むことができた。その頃、父の存在を忘れたようになっていたわたしは、給料日になると父を思い出し、短い電話をかけるだけで繋がっているのだと思ひ込んでいた。父が一人で細々と暮らし、生きていることを確認するためだった。わたしが夜の街で働いていることを知っていても、どんな暮らしをしていたのか父には伝えていなかった。けれど、娘が元氣

でいればそれでもいいと思つていたはずだと、勝手に思っている。父はわたしの近況を細かく訊いてこなかった。

高層マンションの眺めは実によかった。ススキノの街は見渡せるし、西のバルコニーからは遠くまで続く山並みが圧巻だった。大倉山の灯りがジャンプ台の道を浮かび上がらせて素敵だったし、南方は藻岩山にある仏舍利塔が確認できた。白い革張りのソファや毛足の長いラグマット、そして、艶のよい家具はすべてお客からの贈り物だったが、わたしがいつも座るのは白いソファーではなかった。ラグマットの上に尻を沈ませてテーブルに肘を付き、煙草を吸うほうが落ち着いた。

そんなわたしは夜の街で失敗し、落ちぶれて、今、ここに住んでいる。夜の街で失敗した理由はたくさんある。兄の借金を一緒に返済していたこと。ホストに夢中になってしまったこと。客の売り掛けが増えたこと。店が潰れたことなどだ。まったく、よくある話。

一口コンロだけのキッチンでわたしが作れるものは、鍋一つでできる炒め物ものくらいしかなかった。せっかく宗太朗がくるのだからとテーブルの上に卓上コンロをセットし、小さな土鍋をのせる。正月からわたしに会いに来てくれるその気持ちだけで十分だった。はたして宗太朗が、どんな理由を作つて外出するのか、そちらのほうが気になった。

「夏子。明けておめでとう」

宗太朗の、男にしては高くて細い声は、わたしの奥にすぐに届く。この声に何度救われたことだろう。普段のスーツ姿とは違う、生活感を漂わせた服装を、わたしは見えないふりをした。チェック

のシャツを羽織り、ビンテージのジーンズが似合う背の高い男は、優雅だった。首に回した両手で、宗太郎の普段は綺麗にセットされていて見慣れないサラサラとした髪をなでて口づけをせがむと、その優しい舌はわたしに絡まり、左右に舐め回まわす。

両手に袋をぶら下げてやってきた宗太郎の土産の中にわたしが好きな蟹の足が見えた。

「鶏の水炊きにしたの。宗ちゃん、好きでしょう」

「ああ。夏子の作ったものは何でも好きさ」

酒と煙草で潰れたわたしの掠れた声は、宗太郎の声と交わることはなかった。四十歳で響（ひびき）宗太郎という名の通り育ちのよさが際立つ彼は、建築設計を仕事としていた。祖父の代から続いている会社でその身を守られている彼とわたしとは、いくら不景気だからといっても、全てが違っていた。

宗太郎はわたしがススキノの店にいた頃にずっと通ってくれていたお客だった。当時の住宅産業は景気がよくて、宗太郎は、接待はもちろんプライベートでもわたしに会いに店へ来てくれた。頻繁に食事をした同伴はありがたい上客の一人だった。わたしが若いホストに夢中になっていることを知っていても、宗太郎は何もいかなかった。ススキノといっても狭い街なのだから、そんなことはすぐに誰かの耳に入り噂になる。

夜の街で働く馬鹿な女に興味があっただけなのかもしれないし、彼に妻子があることで、けっして深い関係にならずに遊べるわたしは、ちょうどよい女だったのかもしれない。

店が潰れて、気がつけばわたしのまわりには誰もいなくなっていました。友達と呼べる誰かと何かを相談したりすることをわたしはちっとも思いつかなかった。実際、そういう種類の誰かがいたかと問われれば、いなかったのだ。

稼げないホステスに何の未練もなくなったのか、若い男もわたしのマンションから消えていた。男の名前は七海（ななみ）涼（りょう）といった。

その後のわたしを心配してくれたのが宗太朗だった。涼と違って、はらはらしたり、わくわくしたりすることはなくても、彼のそばにいと安らいだ。宗太朗の妻がどんな女で、子どもが幾つなのかわたしは訊かなかったし、彼も余計な話はしなかった。いつかどこかで宗太朗が子どもと手をつなぎ歩いているのを目撃したって、知らないふりをするのが簡単にできると思っているし、特別、驚いたり、悲しんだりすることもないだろう。水商売にとことん身を染めた女にはそんなことは常識の範囲内だ。

ボン酢を加えた紅葉おろしに、鶏肉をくぐらせて実に美味しそうに頬を動かす宗太朗は、持参した白ワインをわたしのグラスにも注いでくれる。タラバは甘みがあり塩味もちょうどよく美味しかった。軽く絞ったレモンの香りが小さな部屋に広がり満足した。考えてみれば昼ごはんを食べていなかったことに気付く。

こうして湯気が立つ鍋を囲み、シャレーの深みある歌声が流れて好きな男に見つめられる。これでいいのだとわたしは思う。

「何が欲しい」と宗太朗はいつもわたしに問う。

「何もいらないうわ」と答えるのがっかりした顔をわたしへ向けた。実際、欲しいものは何もなかった。ブランドの洋服や高価な時計、バッグやジュエリーも。それぞれひとつだけあれば充分だ。それらを身に着けて、わたしがいったい何処へ行くのだ。毎日ゴミの処理をして金を稼ぎ水底で辛うじて息をし、いつまでたっても表に顔を出せない暮らしを送っているというのに。

今のわたしの持ち物は、自分の働いた金で買った必要なものだけで充分だった。過去のは全て金に換えてしまったのだから。

「仕事だったのだろう」

宗太朗の声は美しく響く。

「うん。朝から三件。でもお昼過ぎには父さんの病院に行けたわ」

今日のわたしの日当は一万円だった。明日も明後日も仕事は絶えず入っている。その間の空いた時間に小さな部屋の清掃も入っていた。

こうして宗太朗に会う前には必ず風呂に入って体を綺麗にし、薄く化粧もする。仕事柄といっても、特別、体に異臭がついているとは自分では思っていないが、どうしても気になった。もしかしたら、宗太朗は気がついていないのに黙っているのかもしれないなどと、いつも考えてしまう。

動くたびに感じる、先ほど洗ったばかりの自分の髪から清潔で甘い香りを確認して、わたしはやつと微笑んだ。

「今の仕事、いつまで続けるの。違う仕事を探せばいくらだってあるし。真剣に探すのだったら紹介できる会社はあるよ。考えてみたら」

宗太朗が心配していることはただひとつ。

まともな仕事をして欲しいと思っている。そうじゃなきゃ、わたしとこうしてつきあっている自分自身と向き合えないし、宗太朗のあからさまにしない底に潜んでいる男としてのプライド。もしくはわたしがまったく答えを求めない愛か。違う。そう思おうとしているのは意固地になっているわたしの方だ。宗太朗が大きな心を持ち、男らしくて、ちっぽけなプライドなんて底に潜んでいないことをわたしは充分知っている。それでも仕事への誇りは携わった者にしか感じないものだから、わたしが宗太朗にどんなに説明しても今の仕事をわかってはもらえないだろう。

「社長には恩があるし、このまま働かせてもらおうと思っているの」

冬馬の借金の返済が終わった頃、アフターがない日は、店の女の子たちとホストクラブへ流れた。涼はまだ新人だった。奨学金で大学を出たくせにホストになったなんて親にいけないと語ったものだ。華奢な体に光沢のある黒のスーツ。金髪に片耳のピアス。細い指。安物の腕時計。何がわたしを駆り立てたのか。今考えてもわからない。「いつか成功してみせる」と語った涼のキラついた目。それだけが惹かれた理由だったのかもしれない。

「わたしが涼をトップにさせてあげるわ」

いつしか涼の働く店に通い続けていた。ホストにとってホステスはいい客だ。風俗の女なら上客

だろう。涼の腕時計がダイヤモンド入りとなり、わたしが買い与えた下着を身につけるようになるまで、時間は掛からなかった。

ある日、その月の売り上げがトップになったと涼から連絡が入ったときには、それまでに感じたことのない達成感が、わたしの体中に貼り付いた気がした。全身の毛穴がぱっくりと開いたあの瞬間、希望とか、夢とか、言葉の素敵さを感じられたのは、その時が初めてだったかもしれない。それは、ホステスとして働き、何度も売り上げ一位に君臨しても感じたことのない悦びだった。誰かのために何かをする嬉しさだった。その夜から涼は本当にわたしだけの男となった。二十三歳の若い男は、愛していると何度も言って、年上の馬鹿な女を喜ばせてくれたものだ。例え、若さゆえの限らない性欲を、わたし以外の誰かにぶつけていたとしても、それは仕方がないと思っていたし、夜の街で彼の名前がはびこるたびに優越感に浸るほうがずっと勝っていた。

「わたしがあの子を育てたのよ」と自慢していたくらいだった。涼がわたしのマンションに移り住んできても彼から生活費を貰うことはしなかったし、ホステスを辞めてもそれは変わらなかった。「ゆかりママ、どうしているのかな」

宗太朗が遠い目をする。

何もかも輝いて見えたのは、ススキノだからこそだ。宗太朗を中心に、ゆかりママとわたしは美味い酒を飲み、束の間、楽しい時間を過ごすことができた。店の中央にある大きな花器に飾られた色とりどりの花は眩い光を浴びていて、その輝きは永遠に続くと思われた。

「元気にしていると思う。ママにはお世話になったし大好きだった」

「僕もさ。あの人は本当に気の利く人だったよ」

ススキノ祭りが終わる頃、ママから店の閉店を告げられた。ママの愛人が亡くなってから数カ月後のことだった。店は居抜きで売却されてすぐに誰かのものとなった。わたしの客が付けを払わず立て替えた金は、月給のひと月分にもなっていた。新しいオーナーはホステスごと引き受けると条件を提示してきて、何人かはそのまま店に残ったが、わたしはママと一緒に辞めることにした。同棲していた涼との生活をゆっくりと楽しむ時間が欲しかったこともある。復活したいと思っても、夜の街で酒を飲み続け、売り上げトップに君臨していたわたしを欲しがる店は、すぐに見つかる自信もあった。あの頃は涼との生活だけを考えていたかった。全ては涼のため。涼への想いを確実に自分のため。昼下がりにはベッドの中で甘い時間を過ごし、中島公園を散歩する。夕食を手作りして涼と向かい合い食事をする。出勤していく涼の支度を手伝い、玄関で見送ると、十五階の北側のバルコニーに立ち、ポツポツと灯りはじめていく街のネオンを背負って歩いていく彼の姿を、煙草を吸いながらみつめていた。高い家賃を払い続け、若い男を食わせながら、少しばかりの蓄えを切り崩し、変わらずに彼の店へ通い投資した。やがて、金がなくなってくると、頻繁に店へ遊びに行くことができなくなっていた。ついで吞んでくるのはプライドが許さなかったから、金目のものを売るしかなかった。時計やバッグを処分することが続くと、涼が部屋へ帰ってこない日が目立ってきた。

「ナツコはね、線は細いし背も高くないけど、胸もお尻も弾力があって、襟足が綺麗だから着物が似合うわ」と、ゆかりママから譲り受けた着物や帯、反物も、その頃すでに手元には残っていないかった。

そしてある日、とうとう本当に涼はわたしの前から姿を消してしまった。わずかな荷物も一緒に消えていた。店も辞めて何処へ行ったのか噂だけが行き交ったが、どれも本当じゃなかった。捜す金も残っていなかった。

なにより、わたしは涼の本名を知らなかった。

「年末、取引先の建築会社が潰れたよ。春に竣工するはずだった客の家はストップさ。引継ぎ先を模索中」

仕事の話をもったにしない宗太朗が、がっかりした感情をわたしに向けた。

「宗ちゃんの設計だったの」

「ああ。若い夫婦なのだけど五人家族だね」

家族という言葉が好きではなかった。わたしはそれに答えず、ふにやふにやと宗太朗の側に寄り添い肩をさすった。宗太朗が湯気の上がる土鍋の火を消すとわたしはベッドの上に乗せられた。だぶついたニットをはぐられるとブラジャーを着けていないそのままの乳房を掴まれる。何度もそれを掴み持ち硬く尖った乳首に唇が吸い付き始めた。血液が下半身へ向かっていく。

「宗ちゃん早く、触って」

ジーンズを下ろされたわたしの太腿が白く浮かび上がる。ショーツの上からくぼみを確かめ、それをなぞる宗太朗の指が上下に何度も往復した。次第に湿ってくる布地が自分でもわかって恥ずかしくなる。その脇から宗太朗はゆっくりと二本の指を潜りこませると、沸きあがった液の音がとろんと鳴った。

「可愛い夏子」

上気した宗太朗の顔をわたしはみつめた。ああ。宗太朗が息を漏らし体にしがみついてきた。両足首は宗太朗に掴まれ、おもいきり開かれた。器用な指がわたしの内へ入ってくる。優しく動く。そして激しく動く。濡れた指を、宗太朗が自分の口の中へ入れて味わう。何度も繰り返したあとに、今度はさらに奥へとその長い指たちが入ってきて未知の壁を突いてくる。全ての体液がそこへ集中しているような感覚を覚えた。途端に喉の奥が広がり達してしまう。

「宗ちゃんが、はやく……れない……から、よお」

声が途切れて囁く。言葉を綺麗に並べられないほどに息が荒くて恥ずかしい。

「夏子はすぐにいってしまふのだから」

宗太朗が誇らしげにいうと、痙攣しているわたしの両脚の付根をめがけて、すうーっと硬いものが入ってくる。それは実にスムーズに。すでに敏感になってしまったわたしのその奥は、宗太朗の感触、たったそれだけで再び痙攣してしまう。

宗太朗の腰が大きく揺れた。わたしはその動きについていきたいと思う。一緒に向こうへ行くの

だ。

2

トタン屋根が貼られたプレハブ倉庫。むき出しの蛍光管と裸電球がふたつ。所狭しく置かれた引取り品。奥の作業場で吉岡さん夫妻が冷蔵庫を磨いている。奥さんはツヨさんといって足腰が弱く荷物を運べないので、ここで作業をしながら倉庫の管理も任されている。飯久保さんとわたしは、昨日引き取りしたゴミ袋の中身を分別する作業を朝からしていた。小さな折りたたみ椅子に座り背中を丸めているので、立ち上がるときには、腰に気を遣う。分別する袋は全部で五十、いや、百袋はあるだろうか。やっても、やってもまだ半分も終わっていない。この作業は永遠に続くと思われる。

干からびた揚げ物やシャンプーの容器、調味料が入ったままの油で汚れた瓶や雑誌、汚物が付いた下着、黒いソックスの中から現れる使用済みの生理ナプキン。ジュースの空き缶の中にねじ込まれた煙草の吸殻が、どれも同じ袋に押し込まれているものだから、それらを一つ取り出しては違う袋へ入れて行く。ゴム手袋はベタベタだし、マスクをしていても腐った臭いに慣れることはない。

不用品の引き取りや遺品整理をするときには、大抵、その部屋で仕分け、さらなる分別作業もあるが、早く片付けて欲しいという依頼主が増えていくし、次の仕事が入っていることもあるから、時間がないときはこうして一旦倉庫まで運び分けてから清掃工場へ持っていく。住人が適当に袋へ

放り込んだゴミ、これが一番厄介だった。家財道具の処理も大変で、食器棚は扉についた釘などを全てはずし、はまっているガラス、板、ネジで分けなければ工場で受け付けてもらえない。依頼に応じて町内会にあるお寺でお焚き上げも行っている。池田商店が創業してからの長い付き合いの僧侶の息子もまた坊さんとなった。置き去りにされる仏壇もあったので、そういうときは取りまとめてお寺に願う。遺品の焚き上げもひっきりなしだと聞く。

池田商店と同様な会社は、ここ数年で確実に増えていた。コロナが落ち着いてからは、わたしたちの仕事は引っぱりだこだと社長はいう。大きな組織になると、メディアへの宣伝にも力を入れている。従業員を何十人も抱え、制服の背中には会社のロゴが入っている。実際、そんな映画も話題になったはずだ。

「だけどさ、なっちゃん。俺たちは、これでいいのさ。小さな仕事も大きなのもみんなやって。明瞭会計でお客さんに信頼してもらっている」

午後から、田部さんは社長とトラックに乗って出かけていた。吉岡さんはトラックの運転が出来るから、大きな仕事になれば飯久保さんとペアを組み作業をする。今日は家電の買取りだけで、冷蔵庫と洗濯機、乾燥機を運ぶ程度で、その後は遺品整理の部屋の見積もりが一件入っているだけだったから、わたしじゃなくて田部さんを連れて行った。小太りで背の低い田部さんは、社長の後をちょこちょこついて歩くのが好きだった。社長も「田部ちゃん」と呼んで可愛がっている。見積もりは、引き取り手のない事故があった部屋だといっていた。事故は自殺があった部屋のことだ、

わたしはまだその仕事をしたことがなかった。遺体の引き取り手がないなんてめったにないこともあったが、社長がわたしを連れて行くことをしなかった。そのうちわたしも現場へ行くこともあるだろう。

それにしても、丸出し柱を囲む四方の壁全てにかけられている傘の数は数百本あるだろう。わたしがここで仕事を始めてから少しずつ分けてきた。出入り口右側からビニール傘、子供用の傘、女性用、男性用、ブランド傘で見事に囲まれていた。どれも十分に手入れが施され壊れていないものだった。傘だけを買うに来るリサイクル業者は「わざわざ一本ごと開いて点検しなくとも、池田さんところは、安心だ」とお墨付きをもらっている。

「なっちゃんが来てから、ブランド物が区別されてよかった」と社長はいってくれた。

そりゃあそうだとわたしは思う。ネオン街で働き、男たちにちやほやされて貰った贈り物の数々は、どれもブランド品だった。偽物の良し悪しさえも、それらを瞬時に目利きできる術を身につけていた。違う客に同じバッグをお願いして、片方をショップで買い取ってもらうことなど日常茶飯事だった。売った金はホストクラブに流れ、七海涼へと渡る。この繰り返し。人はいいが金のない客が来てついで飲まれ、わたしが肩代わりしたお金は結局、回収できなかった。その頃から世の中の経済状況が悪くなったのが原因だろう。一番に皺寄せがくるのが繁華街だから、それは敏感に伝わってきた。空のタクシーばかりが目にとまり、「先生」と呼ばれるお客が減ってからは、道内の経営者が椅子を埋めてくれるようになった。

池田社長の一軒家を挟み、左がこの倉庫、右が二階建てのプレハブ住居だ。その一階は車庫になっており、引き取った自転車がある。細い道路を挟んだ向かい側の空き地は駐車場で、池田商店と書かれたおんぼろの軽トラックと、二トン、四トントラック、あとの数台は月極駐車場として近所の住人に貸していた。住居の二階にあがったことはないが、共同のトイレと風呂、六畳ほどの部屋が三つあって、飯久保さんと吉岡さん夫婦、そして田部さんの四人が住む。

通いで来ているパートが数人いるが、基本的に一人の主婦が毎日来ている。たまに荷物を引き取ったあとに大家さんから掃除を頼まれることがあって、そういうときに中心に動いてくれるのが滝波さんだ。近所の奥さんを二人くらい連れて行き掃除をする。一回三千円から四千円だから、やりたい人はたくさんいるのだ。忙しくて人手が足りないときは、わたしも掃除の手伝いをする。

学歴もキャリアも無い主婦が仕事を見つけるのは相当困難だと滝波さんという。何件ものアルバイトをかけもちしている人が多く、この仕事はみんなやりたがっているらしい。社長も状況を知っているから、倉庫まで来なくてもできる仕事があれば、滝波さんを通して数人に頼んでいる。例えば、銅線のばらし。ビニールテープに包まれたケーブルの中は細い銅線の集まりで、それをバラバラにして、一本にする作業だ。この銅線を種類ごと、キロ単位で社長が買い取り、専門の業者へ売るのだった。これもまた大変な作業だが、いいお金になるから、専属にやっている主婦は一カ月に数万も稼ぐ。家で出来る内職は探せばいくらでもあるように思うが、意外と出回っておらず、こうして口コミですぐに人は集まった。

三時のお茶の時間に、社長の奥さんが運んでくれた緑茶をいただく。中央に置かれた古い縦長の灯油ストーブからオレンジに燃える火を囲み、わたしたちはつかの間、短い会話を交わす。社長の奥さんも本当にいい人で、物静かでよく気の利く人だ。子どものいない社長夫妻は池田商店の将来をいつも心配している。池田商店というより、ここで働くわたしたちのことを心配しているのかもしれない。親類とは付き合いがあってもこの仕事を引き継ぐ人はいないという。奥さんは、町内の独居老人や生活保護で暮らす人のお世話をしている。生存確認と、相談を受けアドバイスをするだけのボランティアだ。最近は孤独死が増えていて、地域の民生委員からの連絡などでそれほど時間がたたないうちに発見される。それをふせぐために、近所の人に声をかける静かな活動をしている。「社長と奥さんに足を向けて寝られません」

突然、飯久保さんが奥さんに頭を下げたものだから驚いた。ここへ来たときは別人の血色のよい表情には、心なしか笑顔もある。人と目を合わせることもなかった五十歳の飯久保さんの成長がうかがえた。当時は、誰とも交わらずにいわれたことだけをこなしていた。

彼に最初に会ったのは、去年の夏、社長と中央区のマンションで荷物の引取りが終わり、それらを荷台に乗せている作業中のことだった。アーケードが切れた狸小路、西側の外れは、昔ながらの長屋が連なった、古くて小さな店が点在している場所であり、若者向けに多国籍の酒場や、洒落た洋服店が増え始めている辺りでもあった。酒屋の仕込みの頃にはまだ早い午前中。その日は朝から強い陽射しがあつて、トラックのエアコンが壊れているのではないかと社長と話していた。積み込

んだ荷物にブルーシートを被せると、わたしは荷台から慎重に地面へ足を伸ばして降りた。角に建つ、蕎麦屋のビルからかえしつゆのよい香りがうろうろと漂ってきていた。

ああ、蕎麦も最近食べていないなと思ったとき、小路の脇から黒いカタマリが現れ、ぶつかりそうになった。驚いて声も出ない。カタマリは何も見えていないようで微かにわたしの腕に接触した。一瞬の悪寒を感じ背中に冷たい汗が流れたのを覚えている。よくみるとそのカタマリが人間であつて、生きて動いていることを確認した。

黒いカタマリには、夜の街を酔っぱらつて気持ちよく歩いている頃にはたくさんすれ違った。例え肩が触れようとも何も感じない、路上に敷いたダンボールで寝そべっていたとしても、そこには誰も存在していない、視界に入つていても全く無のはずだった。しかし、今は少し違う。そういう身なりの、いわゆる、わけありの人間をすぐに見つけ出すことができる。

夏なのに着ているものは冬の黒いコートで、汚れて変色してしまった長靴を履き、ふらふらとしていた。軒下に置かれた水色の大きなゴミ箱の蓋をあけて中を覗きだした、そのとき。

「ねえ、あんた」

社長が近づくと男はとっさに両腕を額の上で交差し身構えた。

「大丈夫だ、殴ったりしないよ。あんた、出身どこさ」

わたしは次の現場まであと一時間しかないことに焦っていた。荷台には朝から引き取った荷物がすでに山積み状態であり、シートの掛け直しをやつとの思いでしたばかりで、この後、大型ゴミを

清掃工場で降ろして行かなければという状況だった。

しかたなく、わたしは助手席のドアを開けて先に乗り込み、窓から外の様子をみていた。車内の温度は信じられないほど上昇していて、額や首筋から汗が吹き出てきた。

社長がトラックへ戻ってくると、黒いカタマリもその後をついて、のそのそと歩いてくるではないか。これが飯久保さんとの出会いだった。飯久保さんを真ん中に挟み、次の現場へ向かったが、彼から漂う異臭がわたしの鼻について離れなかった。トラックの中で冷えたコーラと、社長のおにぎりを一つ食べた飯久保さんは、そのまま次の現場でひよろひよろしながら台車を押し、荷物の搬出を手伝った。一緒に倉庫に戻り、そのまま隣のプレハブに住み始めた。

あとでわかったことだが、彼は稚内の出身で、函館の仕事をクビになり会社の寮を追われ、あてもなく歩いていたら札幌に着き、半年もしないうちに金が底をついたらしい。故郷には年老いた両親がいるが、この十年は帰っていないといった。

「そういうば、コート着ていましたよね。あの日はとても暑かったですよ」

わたしの質問に飯久保さんは俯く。

「知っていますか。ずっと食べていないと寒いんですよ。夏でも震えていました。いやーひどいんです。なんでも食い物に見えてくるし、頭の中、おかしくなっていました。社長に会っていませんでしたら死んでいました。おにぎりの味、忘れられません。ありがたい。本当に、ありがたい」

飯久保さんが手を合わせて擦った。「みんな、同じださ」といった吉岡さんは、年中被っている

野球帽に手を掛けてツヨさんを見つめる。微笑むツヨさんの真っ白な髪が上下した。

「あのときね、海苔なしだったの。ほら、ものすごく暑い日だったものだから、ただの塩にぎり。梅干だったかしらね。飯久保さんも食べるってわかっていたら、美味しい鮭むすびを握ったのね」

社長の奥さんが冗談をいう。奥さんの髪もまた白髪だったが、艶があった。

「飯久保さんの気持ち、わかるよ。私も本当に酷い暮らしだったから。百円の金も無くて、息子の運動会の写真、買えなかったこともあったし。子どもが小さいときは本当に苦しかった。あたし一人なら、どうにでもできたのだろうけど。とにかく、息子たちにはちゃんと学校出してもらわなきゃ。塩舐めてでも働いた金は仕送りする。雇ってもらってありがたいですよ」

滝波さんのぎょろりとした大きな瞳が下を向いた。

ここにいる人はみんな社長に恩がある。実際わたしも社長に拾ってもらったのだから、飯久保さんと同じだ。家賃が払えなくなつて、マンションの荷物の引き取りをしてくれる業者を探し、たまに池田商店に依頼したのがきっかけだった。見積もりに来た社長と涙ながらに世間話をして、行く当てのないわたしに「落ち着くまでうちで仕事しなよ」といつてくれたことが救いだったのだ。

涙ながらの世間話は、わたしの生い立ちではなく、社長がこれまで生きてきた波瀾万丈な日々であつて、その話で泣いたのは社長ではなく、わたしのほうだった。落ち着くまでといっておきながら、わたしはもう三年もここで働いている。

非通知で電話をかけてくるのは冬馬しかいなかった。相変わらずこちらの予定も尋ねずに、いきなり待ち合わせ場所をいつてくる。兄から連絡があったのは一カ月ぶりだった。

「家においで」といったが、案の定、冬馬は断り、「夏んちのそばの店で」と言う。兄がわたしの部屋へ来たことは一度もなかった。

古くて狭くおまけに汚いと、三拍子揃った焼鳥屋がわたしのアパートの近所にあった。ガタガタと渋い音の引き戸を開けると、炭の煙がいっぺんに押し寄せてくる。奥のテーブル席で入口に背を向け、冬馬は座っていた。先客はカウンターに座って手酌酒を注いでいる、年老いたぱっとしない男が一人だけだった。ぱっとしない、というのは、一度見ただけでは覚えられないくらい特徴のない男のことで、夜の仕事で教わった、人を見分ける術は、今ではかなり衰えているなどわたしは感じていた。それは、ゆかりママに叩き込まれた、得意科目でもあったはずだったのに。

けれども、そんなことを思う自分がとても滑稽だ。実際、わたしは、理解していると思っていたはずの涼に捨てられてしまったのだから。

「いらっしやい」と元氣のない店主がわたしへ声をかけると、冬馬が振り返ってニヤリと笑った。

「おう、夏、元氣そうだな」

わたしは冬馬の斜向かいに座ると、生ビールを頼んだ。テーブルの上には通しの小鉢が二つあって、冬馬は焼酎のお湯割を飲んでいた。

「兄ちゃんもね」

前にあったときと何も変わらない兄の姿を確認しながら、わたしはいった。

ここ数年着ている、わたしが買った黒のダウンジャケットは、隣の椅子の背もたれにかけてある。ホストをしていた頃の冬馬とはまったくの別人で、艶のない髪は伸びてパサつき、夏に日焼けした顔はところどころシミと化している。視力が悪いわけでもないのに安いダテめがねを掛け、たまに慣れた手つきで鼻の頭につけているフレームを直すものだから可笑しい。ふっと笑うときにだけ少年期の顔となった。

昔の写真といっても数枚しかない中に、四人で写ったものが二枚あって、それはわたしが幼稚園に入った頃のものだった。あとは赤ん坊だった冬馬と、わたしを抱いた母の写真が数枚。母が出て行く前の正月の写真。どれも近所のおばさんが撮ってくれたものだ。せめてその写真でわたしは母の顔を覚えていた気になっている。目の前の冬馬のちよつと垂れ気味な瞳が母に似ていることや、笑ったときに出来るわたしの右側のえくぼが、それらの写真の中で同じく存在していることを確認するとき、自分がどこから生れ出てきたのかを何度も何度も、それはもう、何度も感じることをできた。

二つの小鉢はほうれん草のおひたしで、冬馬の方には鰹節の一片が微かに残っていた。手前を見れば、わたしの小鉢に倍の鰹節がかかっている。再びニヤリと笑った冬馬が唯一食べられないのが鰹節だった。

母がいなくなつてからのある日、おにぎりの具になるものはないかと探していたときに、台所の棚の下を覗きみつけた鰹節の缶は、そのときの冬馬にとって輝いて見えたと思う。丸い筒の蓋を空けた途端に、「う、うわーっ」と奇声を発し飛び上がり、その勢いで尻もちをつき、慌てて水道の蛇口を捻っているのを、わたしは後ろから見ていた。「夏は見るな」顔を歪めて冬馬は叫んだ。鰹節には、小さな虫がうじゃうじゃと沸いていた。それ以来、まったく食べられない。

「兄ちゃん、仕事どうなの」

「ぼちぼちだ。正月も迎えられたし。大晦日は銭湯行って、新しいパンツもはいたしな」

大晦日は体を綺麗にしてから新しい下着をつけ新年を迎えるという折居家唯一の決まりごとは、冬馬がかたくなにこだわっていた。母が冬馬にそう教えたのだろうと思う。金もないのにそれだけは年に一度、必ず冬馬が用意してくれた。やがてわたしが下着を自分で買い始めたのはいつだったろうか。

「兄ちゃんのいいつけ守って、新しいパンツはいたよ」

わたしも同じくおどけて言くと、冬馬はうんうんと頷いて満足そうに目を細めた。

「仕事はどうだ。社長に迷惑かけてねえか」

「大丈夫よ」

冬馬は、わたしの知らないところで池田社長に連絡を取っている。妹が世話になつていふという兄心か。それとも社長の紹介で仕事をもらっているからなのか。冬は除雪作業、夏場は土建の仕事

をしていた。

「そういえば、隣に住んでいた佐々木のおばちゃん、わかるでしょう。年末、父さんに会いにきてくれてね。病院にいたときだったから、タイミグよかったの。おばちゃん、ちっとも変わってなかった。ベラベラ一人で喋ってた」

隣に住んでいた佐々木家は、わたしたち兄妹をとてゝ氣に掛けてくれて、おばさんには本當にお世話になった。その家の娘はわたしの三歳年上で、季節の変わり目になるとお下がりをもらっていた。中学の制服はそのお姉ちゃんのもので、ブラウスや、かばんのはてまで譲り受けることができたから助かった。父はあの春、わたしが中学生になることをわかつていたのだろうか。隣のおばさんに相談をしに行った冬馬の背中が、とても頼もしく見えたものだ。

「そうか。今度会ったら礼を言わなきゃな。オヤジは、どうだ」

「変わらない、あのまま。病院、来てよ。どうせ父さんはなーんにも解からないのよ。佐々木のおばちゃんのことともわからなかった。わたしのことだって」

「そうか。うん。頼むわ」

わかっている。冬馬は父さんには会いに来ない。わたしが面倒を見ると決めたのだから、それでいい。グラスを持つ冬馬の指先を見つめた。

「父さんのように、爪が真っ黒になるような仕事は絶対にしたくない」といつていた兄の爪もまた、黒かった。

冬馬は焼酎をちびちび飲みながら、焼けたばかりの熱い串を頬張った。ここのモツ串は美味しかった。一本九十円の串に下から鳥皮、玉葱、レバー、ハツ、砂肝、キンカン、その間に小肉を挟み、上は肩肉が刺さっている。塩味と齒ごたえが絶妙なバランスで、噛むごとに口の中でうま味が溢れてくる。

「アイツとまだ続いているのか」

「宗ちゃんね。うん」

一度だけ、冬馬は宗太朗に会っていた。まだススキノのクラブで働いていたときで、店が終わり宗太朗と入った鮨屋で出くわしたのだ。冬馬は後輩を二人連れカウンターの奥を陣取り大声で笑い食べていた。安っぽい兄と宗太朗とを比較して、冬馬の存在が恥ずかしかった。その頃宗太朗とは特別な関係ではなかったが、いつそうなってもよいくらいの親密さはあった。「おう、夏」妹の存在に気付いた兄は、わたしへの遠慮も宗太朗への気遣いもなく、ずけずけと間に入り込んできた。仕方なく宗太朗に兄を紹介したその後も、わたしは冬馬の話題を避けていた。

「宗、ちゃんって、そろそろ真剣に考えろよ。長く付き合っているのに、どうにもならないならさ」

「どうにかなるなんて考えてないもん。いいの、わたしのことは。ちゃんとやっているのだから。宗ちゃんには、別に何も望んでないし」

「馬鹿だなあ、お前。向こうは所詮、妻子持ちじゃねえか。そんなことやっていたら、ババアにな

「つちまうぞ」

「今のままで十分。それより兄ちゃんだよ。養育費、ちゃんと渡しているの」

「おう」

そういつて冬馬は笑った。

わたしは知っている。兄が優しい男だってことを。そして息子を愛していることも。冬馬の過ごした十代を振り返るときに限り、彼が自分の兄だということに誇りを感じることができた。当時は特別感じなかったこと、例えば、冬馬がスキー遠足で軍手を着けていったことや自分で握ったおにぎりをチラシに包んでいったこと、遠足のリュックがなくて泣いていたわたしに、幼稚園で使っていたお道具袋に背負い紐を縫い付けてくれたことを思い出すとき、兄がちゃんと生きてくれたことに感謝し、そのことを誇りに感じた。冬馬が朝夕の新聞配達を始めたのをきっかけに、少しずつだ人が並み以下ではあったけれど何とか生活し、学校で使うものくらいは買うことができた。けれど、冬馬は中学も高校も修学旅行に参加できなかった。

酒も飲めない父はいつも寡黙で、叱られた記憶はなかったけれど、何もわかっていなかった。わたしたち、子どもの存在を。

世間から逃げているのか、自分から関わりたくないのか、ただ与えられた仕事をし、わずかな金を運んでくるだけの人。何が楽しみで毎日を生きていたのか全くわからない。

今。こうして顔を合わせても、兄妹で昔話をしたことは一度もなかった。お世話になった近所の

おばさんの思い出話をして笑っても、わたしたち自身の話をしたことがない。今ではもう笑い話だと済ませるものではなかった。あの頃をそれぞれに思い出してはいても、口に出してしまえば悲しく惨めになることを、わたしたちは痛いほど知っているのだ。正面にいた冬馬の、シャツの釦を縫いつけた黒い糸が気になった。他の釦は白なのに、よりにもよって、一番上だけが黒でくくつてある。そんなどうしようもない兄が、わたしは好きだなと思った。

3

分譲マンションのエントランスは広くて豪華だった。大理石でできた艶のある床、観葉植物や棚に置かれた美術品と造花を飾った大きな花器がバランスの悪さを感じさせたが、革張りの応接セツトが二組あり、高級感があった。

飯久保さんと田部さんがそれぞれ台車を転がし、吉岡さんは手にしたダンボールを広げ、共用部分の柱の角下からメートルぐらいの部分を開き、その後を社長がテープで留めていく。荷物の搬出時、共用部分に傷をつけるのを防ぐため、引越し業者と同様で養生する。滝波さんとわたしは両手に荷物を持ち無言で後に行く。荷物の中には大量のゴミ袋と自分たちの着替えが入っていた。

「ああ、池田さん。きっちり、養生頼みますよ。何かあったら大変だから」

マンションの管理員が社長に駆け寄ってきた。

「お世話になります。大丈夫ですよ、しっかりやっていますから。管理員さんに迷惑掛けるような

「へマはしませんよ」

社長が柱に貼ったダンボールを指さす。

「この人たちが煩いから。私も説明するのに困りますよ。夕方までに終わってもらって、最後は一緒に共用部見て回ります」

「はいはい、よろしく頼みます」

養生シートで覆われたエレベーターは十三階を目指した。玄関扉の前には立派な門構えがあり、社長がその錠の取手をくると回す。

「ここを着たほうがいいなあ」と社長が小声で言った。

わたしたちは頷くと雨具の上下を着けた。フードも被り、室内用の作業靴に使い捨てシューズカバーを付ける。マスクも二重にした。ゴム手袋はいつもより厚くて質の良いものを社長が用意してくれた。社長が預かったカードキーを玄関扉に差し込む。ドア付近の小粒ほどの丸い穴に緑のランプが点滅した。扉を吉岡さんが抑えているうちに、社長が手を合わせてから中へと入っていく。飯久保さん、滝波さん、田部さん、そしてわたしが同じように続いた。

玄関に入った途端、吐きそうになった。先ほど通り抜けたあの豪華なエントランスや、この部屋が十三階だということが全て嘘なのではないか、違う空間に閉じ込められてしまったのではないかと嫌な感じが襲ってきたからだ。それは、誰かがこの部屋で亡くなったことが理由ではなかった。ゴミで積まれた部屋を何度も見てきたけれど、そのゴミの種類が尋常ではないことの衝撃だった。

た。身震いしたわたしは、田部さんが飄々と歩いていくその足跡についてゴミの上を踏み進んだ。

社長と飯久保さんが、馴れた手つきで部屋中の窓を開けていく。なかへ進んでいくと、僅かに確認できたテーブルの上に、吉岡さんが会社の倉庫にいつも置いているお香のセットを取り出し、持ってきた線香に火をつけて手を合わせた。滝波さんもそれに続き、わたしを見た。二人と同様に手を合わせたが、頭の中は無だった。

線香が、しかし漂うことはなく、開け放たれた窓から入る二月の寒気が行ったり来たりした。それでも部屋の中には、まるで必要としない生ぬるい暖かさがあって、それがわたしの鼻につく嫌な感じをいっそう苛立たせた。

打ち合わせはできていた。この部屋の住人は三十代の独身男性で、リビングから続く和室で服毒死した。連絡の取れなくなった勤め先から親に連絡が入り、二週間後に発見されたという内容で、葬儀が終わった母親から片付けの依頼が入った。社長と田部さんは4LDKの壁に画鋏で貼られた全てのものを外し、部屋中に散乱している汚物を処理していくこと。吉岡さんと飯久保さんは、家電製品と家具、大きな荷物をトラックに積み込むこと。わたしと滝波さんは台所まわりの物をゴミ袋に分別と衣類を袋に入れること。

亡くなったと思われる和室の隅の方にだけ、二枚分の黒染みた畳が見えていた。ゴミの高さはだいたい二十センチ程度で、それはどの部屋も同じようだった。十日前に仕事をした部屋はワンルームだったけど、ゴミの高さが五十センチほどあったから、この部屋のほうが量はそうでもないのか

もしれない。

事前に部屋の様子は社長から聞いていたはずで、事故のあった部屋だからといって避けていたわけではなかったから、心構えはできていた。

「最期を片付けてあげるのさ」社長がよく使う言葉には重みがあった。わたしがいつも尊敬しているその言葉を、部屋を踏み入れてからの数分の間に、もう何度も頭に浮かべ続けていた。けれど、どうだろう。わたしの口をすっぱりと隠した、大きく頑丈なマスクは何の役にも立っていなかった。人間が住んでいた部屋とは思えない、この、臭い。未知だった異臭。獣と魚の内臓が腐り混ざった臭い。わたしまでもが死んでしまうのではないかと思わせるほどの酷臭。

汚物と死んだ人間の腐乱していく臭いが混ざると、これほどまでに酷いものなのだろうか。排尿と干からびた便の塊が、新聞やエロ本の隙間に入り込んでいて、そこら中にあると思われた。おまけに、方々に散乱しているペットボトルには尿が入っている。

この部屋の見積もりをした後、会社に戻ってきた社長が、「あんな家初めてだ」といていた、自慰行為後だと思われるティッシュがそこら中に散乱している。部屋中の匂いは、排尿や便、遺体痕の臭いとともに、ここから放つものがきついものかもしれない。なかった。

田部さんが淡々と使用済みのティッシュやトイレットペーパーを、黄色いゴミ袋へ入れていく。社長は壁中に貼られた写真を剥がしている。すべてむき出しになった女性器で、雑誌の切り抜きだった、生写真であったりバラバラだ。明らかに成人ではないとわかるものまである。

部屋中のペットボトルをトイレへ運ぶと全部で二十三本あった。滝波さんはそのキャップを開けては便器の中へ流し込み、わたしはひたすらレバーを上げて水を出した。突然、わたしは吐き気を感じ、台所のシンクへ向かい走り出し、低く唸った。水道のレバーを思い切り下げると、朝食べたばかりの消化していないハムの一片が、シンクの淵に張り付いて離れない。事故部屋を数回経験している滝波さんが、背中を摩ってくれ、目をぎよろぎよろさせてわたしを見た。

「大丈夫」

ただ頷く。

口を開けば、この悪臭が胃の中にまでも入り込んできそうだった。排水溝の中に流し込む醤油や、腐ったドレッシング液の匂いがせめてもの救いだったが、冷蔵庫に入っていた、同型十個のタッパ―に一体何が入っているのかと、滝波さんがそつと蓋を開けると、女性器のポラロイド写真だったから驚いた。それからの数時間は、黙々と単調な作業を繰り返した。わたしも滝波さんも、それぞれ二回ずつ、嘔吐した。

「昼だよ」

社長がみんなにコンビニのおにぎりとお茶を持ってきて、外の広いルーフバルコニーへと移動したが、何も食べたくなって、黙ったまま温かいお茶だけを口にした。いつもなら、吉岡さんのつまらない冗談に苦笑したり、社長の昔話を聞いて和んだりしているところだが、今日は違った。

外の気温はますます低く、吐く息すらも凍りそうだった。寒さで指に挟んだフィルター感覚もないくらいなのに、それでもわたしと滝波さんは煙草を吸った。彼女の吐いた煙が風の向きでわたしの顔にそのままかかってきたけれど、何の匂いも感じなかった。

二十分ほど休憩してから、作業は再開された。夕方までに部屋の中を空にしなければならなかったし、わたしたちの搬出が終わったあとには、部屋の消臭をする次の業者や内装の見積もりが入ると聞いていた。

午後からは全員でゴミの分別、仕分けとその袋の搬出だった。午前中に一度清掃工場へ向かい荷物を降ろしてきた軽トラックと2トン車は、隙間が見えないほどのゴミ袋で埋もれていた。社長は散乱したゴミの中から次々と重要な書類を探し出していた。マンシヨンの権利証や契約書、貯金通帳、印鑑ケースだ。小銭やお札も方々から出てきて、ビニール袋に入れていく。遺族へ引き渡すためダンボールに詰め込んだそれらは、数冊のアルバムや子どもたちのスナップ写真などを入れると、すぐに一杯になった。

そうして、わたしたちは特別な会話をしないまま、予定通り仕事は終了したのだった。

シャワーのコックを捻って熱い湯に打たれる。洗濯機に放り込んだ作業着は、二回目の洗いを始めていた。仕事を終えて帰宅したわたしは、あの臭いを忘れていなかった。作業着の上に被っていた雨具は上下とも処分してきた。なのに、そのビニールを突き抜けて、服にはどっぴりとあの臭い

が付いていた。髪を丁寧に洗い、洗顔し、固めのボディタオルでごしごしと体を洗っていく。泡立ったボディソープはローズマリーの香りのはずが、今夜はその香りをまったく感じない。トリートメント中に歯磨きをする。先ほどまで気になっていた口の中の渴きが、少しだけ解消された気になった。

「大丈夫かい、なっちゃん。俺らがやらなきゃ。俺たちの仕事だものね。亡くなった人、小学校の教師だったって。ちょっとびっくりしたけどね、いろんな人いるよなあ。先生の泳ぐ場所、何処だったのだろうね」

帰りの車内で話していた社長の言葉を思い出した。壁中に貼られた女性器の写真。性癖は計り知れない。約束の時間、空になった部屋へ来た先生の母親は、社長に厚い封筒を手渡した。

「ありがとうございます」と母親は何度もいった。

「はいはい、こちらこそ、ありがとうございます」と社長もいつて頭を下げた。

「もう、こんなことになってどうしたらいいのか」

母親の涙は、息子を想う愛なのだろうか。

靴を履き変えようとしたそのとき、突然、線香の残り香が玄関へ向かってきた気配があつて、わたしはゆっくりと振り返った。

そこにはしかし、白くなった壁があるだけだった。

テーブルの上に置かれた二万円。食べられなかったおにぎり。確認できないでいた携帯の着信履歴

歴。宗太郎からのラインも来ていた。非通知の着信一件、これは冬馬だろう。今日の仕事の内容を宗太郎には伝えていないし報告するつもりもなかった。考えてみれば、わたしが宗太郎に話していないことはたくさんあった。例えば、かつては大工だった吉岡さん夫婦の、四十歳も過ぎた一人息子が刑務所の中にいて刑期が終わるのを待っていること。田部さんが、幼い頃、親に捨てられて本当の名前や誕生日がわからないとかそんなことを、あえて伝える必要はなかった。これまでだって、わたしは仕事の内容を彼に詳しく説明してこなかった。頭の良い彼のことだから、大よその見当はついているのに、気を遣って問わないのかもしれない。今日の仕事の内容を報告すれば、宗太郎はきっと悲しむだろう。彼の美しい声を失望のため息に変えなくなかった。それに。そんなことをいってしまえば、なおさら、早く仕事を辞めるように強くいつてくるだろう。

『仕事終わったかな』

『お疲れ様。今夜 会えたらいいね』

『たまには外で食事しようか』

宗太郎の言葉はいつでも優しい。わたしの返信は決まっている。今夜は宗太郎に会えない。わたしと宗太郎とを繋いだラインの返信。部屋の中、ベッド脇の小さなスタンドのオレンジの灯りがぼんやりとそこにあった。わたしは独りこうしてここにいる。それが一番いいのだと思った。

三月に入って、池田商店の忙しさはピークを迎えていた。年間を通してみれば、商売をしている

店の撤退が一番多いのが四月と十月じゃないかと特に感じる。一般の引き取りは三月末から六月にかけて忙しくなる。引越しシーズンでもあって、それが重なると外にいる日が続き、倉庫作業もフル回転で、滝波さんが近所の主婦を集めて仕分けを手伝ってもらっていた。

わたしはこの数日、社長と一緒に仕事をしている。忙しいが単発な仕事ばかりだった。冷蔵庫とテレビだけの引き取りが多かったこともある。最近、わたしが領収書を渡す役割が増えてきた。見積もり以外の処分品が出てくるため、それに伴って、金額が変わってくるし、細かな宛名をすらすらと書けない社長の視力低下が理由だった。

今日は、夜逃げしてしまったワンルールの処分だった。依頼主は管理会社なので、支払いは確実だからありがたい。池田商店は即日現金払いの仕事しか受けないから、作業が終了すると、空になった部屋を依頼主に確認してもらい料金を受け取る。

かつて、わたしが住んでいたマンションと同じ一角にあるススキノの細長い賃貸マンションは、新しくエントランスもお洒落だ。女性が一人で住んでいた部屋は、家具と呼べるものではなくて、逃げる前に必要なものは持って出たと思われた。

キッチン周りの食器や鍋が数個と、小さなテーブル、風呂場にあるシャンプーの類や洗面台の小物。コンビニ弁当の空、ストローが刺さったままの牛乳パックが床の上に三十個くらい並べられている。転がった食べかけの菓子パンの袋が数個。袋に印刷された賞味期限は、昨年の七月だった。みかんが床の上にひとつあってそれを拾い上げようとする、べったりとくっついて動かない。底

が腐っていてカビが生えたその周りに白い綿がついている。腰につけたバッグから作業用のヘラを取り出し、みかんを床から慎重に剥がす。ペランダに枯れて凍ったままの大きな鉢が二つ。これは土と枯れた枝に分けなければいけない。窓のサイズに合っていない丈の短いカーテン。下駄箱にあった踵が剥がれたロングブーツ一足。

子どもが飼育するような安っぽい小さな水槽には、高さ三センチほどの汚水があって、小石が敷き詰められている。何が入っているのかとよくよく見れば、小さなミドリガメだった。ゆすつてみるとちゃんと生きていて、のそのそと動き出した。

「亀は冬眠するからね」社長が水槽籠を覗くわたしをみて声をかける。

部屋に置き去りにされたペットを見たのは猫が一度で、そのときは社長が近所の獣医に診察してもらった後、病院経由で誰かに引き取られたと聞いていた。

「社長、亀ってどうするのですか」

「とりあえず持っていくさ。生き物は困るよね、本当に」

クローゼットにダンボールが四箱。

「なっちゃん、この箱もそのまま積み込むか、衣類だろうから。ああ、色々入っているなあ」

「いいですよ。わたしが分けます」

箱の中には、手帳や輪ゴムで括った名刺の束が二つ。浴衣、派手な赤い下着、ローション、黒のSMコスチューム、それにまつわる黒革の鞭、バイブレーターが三種類、猿轡、麻縄だった。風俗

店で勤めていたのだろうか。それとも好きな男の趣味だったのかもしれない。置いて行ったのなら、仕事は辞めたのか若しくは、もう、その男とは別れてしまったのかなどと考えてみる。

こんなふうに想像することが最近、多くなっていた。仕事を始めた頃は、与えられた作業をこなしていただけたが、最近では、かつて住んでいた部屋の主がどんな生活をしていたのか、手にとるようにわかった。その人の性格までを想像してしまう。

名刺の束が気になって、ばらばらと捲ってみる。どれもホストの名刺だとわかった。百枚近くあるだろう。ふと、その束をばらしてみた。床の上でトランプを混ぜるようにぐるぐると掌を回してみる。齒の浮くような源氏名が連なり、見ていると面白い。同じ名刺が何枚もある。カラーの顔写真入りのものが大半だった。

そしてわたしは見つけた。

それはひょっとしたら予感していたかもしれない名前だった。

『七海涼』

写真入りではなかった。店もアドレスもわたしの知らないものだった。わたしの元からいなくなったあとに勤めた店なのか、知り合う前の店だったのか。それともまったくの別人か。ここに住んでいた女は涼を買ったのだろうか、ただそのことだけを思いながら、散らばった名刺を掬い上げ、袋の中へ放り込んだ。

仕事が終わリトラックに乗り込むと、社長が話し始める。移動している少しの間、わたしは社長の昔話を聞くのが好きだった。最近のことは忘れてしまふけれど、昔のことは、はつきりとした記憶があった。それは、社長がかつて関わった全ての人間のフルネームや、生い立ち、背格好、当時の会話内容、それに携わるその時々天気や時間だった。それらはあまりにも鮮明で、いつもわたしを驚かせた。

「知らないと思うけど、北海道で銀行がだめになったときがあつてね。不良債権抱えて大変だなんて雑誌に載ってしまった。噂話が本当になるんだもの、たまげたよ。あの時も忙しかった。消費税も変わったし。でも、まさかと思つたよ。銀行が倒れちゃうなんてさ。その一カ月前だったかな。机とか椅子とか引き取りしたよ。支店もたくさんあつたしね。その仕事が終わつてから、はつとしたのさ。まさかとは思つたけど、ひよつとしたら銀行、危ないのになつて。そのちよつと前は世の中馬鹿みたいに景気がよくて、ススキノは平日の夜だって人が溢れて、本当に賑やかだった。なつちゃんには、想像つかないだろうけど」

北海道の田舎町で生まれた社長は、十五歳で札幌の金物店へ就職。住み込みで働き始めた。

「その頃の中島公園の辺りは大きな木が鬱蒼と生茂つていて、不気味だったから怖くて通りたくなかつたね。淀んだ大きな川が流れていたよ。なつちゃんのアパートの辺りも川だったなあ」

社長が時々見せる寂しげな表情を見ると、わたしは質問しないことを心がけた。

「仕事をして、金をもらうのはいいけど、何もしてないのに金をもらうのは納得いかなかった。

今で言えば、口止め料みたいなものだ。まじめが一番。汚い金を手にしたら、俺はどうしていたかな。早死にして地獄行きだったかな。苦しんで死んでいくだろうさ。たとえ、同じ病気にかかったとしても、最後の最期まで辛いままあの世にいくよ。そういう人、いっぱい見てきた。人が喜んでくれることをしようと思ったのが、この仕事を始めたきっかけなもの」

社長がここで商売をはじめて六十年だ。

二十歳を過ぎ金物店を辞めてから、一人で、新聞と鉄くずを中心に集め始めたという。ただで集めた不用物をお金に換えて、それが仕事になっていくのは面白かった。道内各地を回って売れるものを探し、拾い集め続けた。

兄弟は、姉と弟、妹が生きているだけとなった。それでも、甥や姪、その子どもたちと孫、親類は相当数いて、すべて把握できないほど方々にいるらしい。札幌に住んでいる数人の親族とは、年に数回会う程度だ。年末の温泉も、これが最後だろうと参加したにもかかわらず、早朝から仕事が入ってしまった。

「うちは小作人だったから、朝から晩まで妹を背負って草むしりしたよ。あの時代はみんなそうだったから辛いとは思わなかった。でもね、背中が痒いのさ。妹のおしっこがおむつから漏れてくるもんだからね。それにしても、初めて札幌へ来たときは本当に心細かった。兄弟がたくさんいたから仕方ないよな。食べるので精一杯だもの。何が悲しいって、お母ちゃんと離れることだけが一番辛かった。汽車の中で泣いたもね」

わたしのこれまでの状況は、社長にはだいたい話している。母親が家出をしてその後、音信不通になっていること。おまけに兄は社長に紹介してもらった仕事で毎日を生きている。けれども、わたしには、母について、自分の感情をどのような言葉で伝えたらよいのか、その方法がわからなかった。確かに母がいなくなってわたしは悲しかったはずだった。それでも泣きわめいて父や兄にすがりついた記憶はなかった。

4

ゆかりママから連絡が来たのは、作業が終わった夕方だった。

「ナツコ、久しぶりね。携帯の番号、変わっていませんか」

クラブで働いていたときのわたしの名刺には、片仮名でナツコと印刷されていたことを思い出した。夜の街で仕事をしていて、「なつこ」と名前を呼ばれると、本名なのに頭の中では「ナツコ」と呼ばれているイメージがわたしにはあった。

それなら、宗太朗はどうだろう。宗太朗は「夏子」と呼ぶ。昔の若い男は「ナツコ」だろうか。

相変わらずパワーが漲っている、けれども相手を和ませる優しい口調が、あの頃と変わらないママに安心した。どこかで元気に生きているだろうと思っていたものの、あれだけお世話になっていたのに、自分から連絡を取ることもしていなかった。抜け殻になった姿を、ママへ伝えることができなかったからかもしれないし、もしかしたら、彼女の方もそうかもしれないと思っていた節があ

った。

地元の函館に戻り、繁華街でまた店を出しているとゆかりママはいった。今はクラブとはまったく違って、「小さな喫茶店みたいなものの」と彼女は電話の向こうで笑う。無性にママに会いたくなったわたしは「来週、函館へ行くわ」といつていた。

愛した人を亡くし、悲しみを背負って生きているママは懂れだった。ヤクザの愛人を貫き、店を手放し、いつしかこの街から消えた彼女の潔い生き方を、真似できない。

忙しい時期に休みを貰うことはためらったが、社長は快く「いいよ」といつてくれた。それよりも宗太朗だ。この週末、函館へ行くことを伝えると、「僕も一緒に行くよ」という。

わたしは宗太朗からそんな言葉をまったく望んでいなかった。宗太朗の大切な週末を欲しいと思ったことは一度もなかった。彼にはただ、健康でそこにいて欲しいだけだった。正月の元旦から会いに来てくれたことにも驚いたけれど、いったいどんな理由をつけて外へ出てきたのかわたしは尋ねなかった。宗太朗が、どういう言葉でやり取りをするのかと想像することは、わたしにはとても面倒な作業に感じていた。

「僕もゆかりママに会いたいし。夏子と旅ができる。そうだ電車で行こう。長万部で、かにめしを食べよう。夜は温泉。うん、決めた」

喜ぶ彼の様子を見て、自分も嬉しいと思っているのかよくわからなかった。

年に数回、会社の行事や、多分、プライベートで旅行している宗太朗は、海外へ出かけたときに

は、いつもわたしに土産を買ってきてくれる。それはバッグや洋服で、箱に入ったままの靴もある。旅行、だなんて高校の修学旅行以来だった。できることなら行きたくはなかったその学校行事は、楽しかったのかさえ覚えていない。あの時、冬馬に渡された五千円の小遣いを、わたしはほとんど使わずに帰ってきたことだけは、はっきりと覚えている。八つ橋をつまんだ冬馬が「なんじゃこれ」といって、光沢のある紫のネクタイで口元を拭おうとしたものだから、二人で笑ったことだけだ。

冬馬が行くことのできなかった修学旅行という面倒な行事に、せめて妹だけはこの兄の想いを、わたしは仕方なく受け取った。その頃はもう、わたしも毎日アルバイトをしていたから、自分の必要とする物は買うことができていたし、米びつの底から粒をかき集めて、あと何合炊けるかと、確認しなくても毎日ごはんを食べることができていたのに、思い出となるはずの情景がまるで浮かんでこなかった。記憶の隅を剥がしても、何も残っていないことに、冬馬に申し訳なかった。

「楽しみだね、夏子」

宗太朗の優しい指が動き出す。甘い時間が欲しいのにわたしは自分を責めている。

冬馬は旅行というものを知っているのだろうか。父はどうだろう。わたしは笑ってしまう。知るはずがなかった。わたしたちには必要のないことだったのだから。どうしてもと望み、欲しているものでもなかった。それに。宗太朗は何といつて家を空けるのだろうか。

久しぶりに訪れた札幌駅はすっかり違う顔を見せていた。人の流れや、この騒がしい感じは、嫌いじゃないとわたしは思う。

宗太朗とは電車の中で待ち合わせした。それがわたしの希望だった。

「朝、迎えに行くよ」といつてくれた宗太朗に「電車の中で待ち合わせなんて素敵じゃない」と喜んでわたしの笑顔は、完璧だったと思う。万が一、誰かに目撃されたらと思うと不安でたまらなかったのだ。浮かれた二人に限って脇が甘くなるのは、ただならぬ恋にはつきものだ。

「夏子」

宗太朗の美しい声が背中から聞こえる。

「座席で待ち合わせね」といつておきながら、わたしは結局、ホームで宗太朗に声を掛けられた。慣れない乗り物や手順に、少し緊張している後ろ姿を見破られたのかなと恥ずかしさもあったが、宗太朗が辺りを気にもせず、ニコニコと近づいてくる姿を確認すると、無性に心地よくてたまらなかった。三月だというのに朝から吹雪だったが、革ジャンパーにジーンズ姿の宗太朗は素敵だった。足元のワラビーブーツは黒で、それを履く宗太朗を見たのは初めてだった。

「夏子、綺麗だよ」

耳元で囁かれたわたしは、思わず辺りを見渡す。午前中から宗太朗と二人で歩くことなど今までなかったことに戸惑っている。昨夜は寝るまで着ていく服を考えていた。押入れに掛かったわずかな衣類を一枚ずつ手にしながら、二日分のコーディネートを考えるのは楽しかったが、少し不安で

もあった。宗太朗とつり合うだろうかなどとあらゆる状況を想像したからだ。車内では座ったままだから、皺にならない生地ワンピースを選んだ。トレンチコートと歩きやすい踵の低いロングブーツ。宗太朗に貰った黒のバッグ。実にシンプルだ。天気予報によると、二日目は寒いようだったので、ブラウスとカーディガン、細身のジーンズにしようと決めてきた。髪は久しぶりに毛先を巻いてみた。チークはいつもよりちょっと濃かったかもしれない。

「窓際に座ったらいいよ」

車内のアナウンスが出発の合図を送ってくると、早速、手にしていた袋から缶ビールを取り出す宗太朗と静かに乾杯する。

ゆっくりと動き出した電車音が、こんなにも気持ちを高ぶらせるものなのかとわたしは思い、流れ去る窓の景色からしばらく目を離せなかった。

吹雪の空は街を離れるごとに晴れていく。次第に建物が消え、海原が目に見え込んでくると、それは空に同化して青く見えた。実際は深いグレイだったかもしれないが、わたしにはやはり海は青くて大きなものを感じた。

長万部で、予約してくれたかにめしが届けられた。

「ここを通るときは、これを食べなくちゃね」そういつて、頬張る宗太朗が好きだなとわたしは思う。この無邪気な表情に、うっとりする自分がいた。不自由も無く生きてきたのだろう彼の人生を、素直に羨ましくも感じるのだった。

しばらくすると、バッグの中で、携帯の振動が聞こえて手にとると、非通知で電話が掛かっている。「冬馬かな」わたしが呟くと、「早くでたほうがいい」と宗太郎がいつてくれたので、席を立った。

「おお、夏子。何してる」冬馬の声。

「かにめし食べた」

「そうか。かにめしって。今、どこだ」

「電車。函館へ行くの。ゆかりママから連絡があって、会いに行くところ」

「ふーん。アイツとか」

「うん。宗ちゃんと」

「ゆかりは函館にいるのか。よろしく伝えてくれ。夏子、あんまり浮かれるな、いいな」

「わかってるって。兄ちゃんにもお土産買ってきてあげるからね」

「そんなもん、いらん。じゃあな」

冬馬は一方的に電話を切った。

まったく相変わらずだ。せっかくの気分も冬馬のせいで現実に戻されて急に落ち着かない。

「浮かれるな」という兄の言葉に、わたしはしかし、まったくその通りだと思った。

函館駅は賑わっていた。異国へ来たのかと思うほど、あちらこちらで大きなキャリアバッグを引

く人が歩いている。タクシー乗り場では数台が客待ちをしていた。

「運転手さん、これから立待ち岬へ行って、金森倉庫へ。日が暮れる前に函館山に登り、夜景を見たら湯の川ホテルへのコース、二人で一万円、どうだろうか」

宗太朗がとても慣れたふうに交渉をしている。彼が希望するそのコースがいったいどれほどの距離なのかわからなかった。

六十台後半と思われる白髪混じりの運転手は、慣れた手つきで電卓を叩き始める。すると、「オツケイだよ。お客さん」と親指を立てて返してくる。

札幌ではまだ雪があるのに、ここは春の陽気で、どこにもその白い破片を見つけられなかった。風は、しかしとても冷たくて、立待ち岬へ着いたときに特に感じた。途中、窓の外を指さしてガイドを惜しまない訛りのある運転手と、わたしの好きな声を持つ宗太朗は、競って観光案内をしてくれ、その掛け合いが可笑しくて三人で笑った。スピーカーから流れてくる音楽はお気に入りCDらしく、時折、運転手の鼻歌が混じった。古臭い昭和の唄ばかりでどれもわたしの世代ではなかったが、どこかで聴いたことのあるメロディは、この街の感じによく合い、何故だろうか一度も見たことのない景色であるのに、どうしようもなく懐かしい場所に来ている気持ちになった。

レンガ造りの倉庫街へ着き車を降りると、小一時間を過ごした。わたしは池田商店へ渡すお土産ばかりに気を取られていた。田部さん、吉岡さん夫妻、社長夫妻。そして、冬馬。父には何を買っていいこう。

「お土産は明日、市場で買おう。ああ、ここでハンバーガーを食べようか。美味しいよ」

宗太朗の道案内は実にスムーズで、押し付ける感じでもなく、わたしはただそれについていけばよかった。

居心地のよさは今まで感じたことのないもので、わたしは自分を見失いそうになり焦ってしまう。それは絡まる温かな宗太朗の手だったり、肩を抱かれた時に互いを気遣う歩調だったり、わたしの携帯で撮った数枚の写真の中の二人を想像する時だった。

函館山のレストランはガラス張りとなっている。店内はまだ明るく数組しかいなかったが、外の展望台と土産売り場は観光客で溢れていた。窓際中央の席に座ったわたしたちは、グラスワインとチーズの盛り合わせを頼む。ウェイターが運んでくれた水の入ったグラスの底が赤く輝いている。宗太朗のグラスは青く光った。それは薄い藍色の店内でもとても綺麗に目立った。よくよく見るとコースターに仕掛けがあるようだ。目に付く全てが新鮮に映る。

外はやがてオレンジの夕暮れに染まってきていた。湾で挟まれた古びた街に、ぽつぽつと灯りが点きはじめる。それは顔を上げるたびに増えていき、いつしか繋がっていった。

息を呑む、という表現が一番いい。

かつてわたしが毎日見ていたススキノの灯りよりも遥かに煌くものだった。左右に佇む漆黒の海と、輝く街。動く灯りは道路を走る車のライトだろう。空には銀色の星。贅沢だ。

自分が持つことの出来なかったキラキラしたものばかりだ。欲しかったすべてのものがこの中に

見えた。おはじきやガラス玉、香りのついた消しゴム。アイドルの下敷き。ピンクに染まった花柄模様の裁縫セット。すべてがあふれている。

今なら、その全てがわたしのこの手の中にすなりと入ってくる錯覚にとらわれた。

温泉街の老舗のホテルは、玄関入り口前に太くて大きな松が三本あって、暖簾の下では三人の和服女性が出迎えてくれた。長い廊下を歩き、通された部屋は広く、手前に畳部屋、奥には洒落た内装に包まれたツインベッド、ガラス張りになっている手前の内風呂と外には露天風呂がある。ゆかりママの店へは、夕飯後に行く予定だった。

「一緒に入ろう」

宗太朗は座る間もなく、次々と服を脱ぎ捨てながら、窓の外へ向かっていく。わたしも裸になり続けた。ひんやりとした外気に触れ湯に浸かると、全身の毛穴が開いた。湯の滑らかさが体を温めはじめた。実に適温で気持ちがいい。さらりとした湯は舐めてみると塩気があった。

仄かな明かりの中、どこまでも続く海を感じ、怖いくらい波の音がリピートする。宗太朗は「我慢できない」と、背中から抱きしめてきた。宗太朗の太腿の上に座ったわたしは、硬くなった彼の先に触れ、その場所へ、静かに腰を沈めていく。三度、壁に当たる音が鳴った。彼が収まったわたしの奥は、隙間から入り込んだ湯が混ざり、熱くなる。檜の浴槽の端に捕まるわたしの左脇から、宗太朗の左手が伸びてそれに重なった。背中に彼の硬くなった乳首を感じ、首を捻ってくちづけを

せがむと、宗太朗の舌が絡まる。優しい右手が腰の後ろから迫ってきて、その指がわたしの敏感なところへとゆっくりと這い始めた。すでにわたしの奥へ入っている宗太朗に加え、指も静かに入ってくるのだった。きつくて、きつくてたまらないのに微かな勢いがあつた。我慢できずにわたしがゆっくりと腰を回すと、するつと出て行く宗太朗の指が恋しかった。

もう、このまま死んでもいいなあ。そんなことを考えてしまう。

激しい波がぶつかるこの海に投げ出された気分は消えず、波の音に怯えながら、それでもわたしは泳いでいた。海を照らす細い光の帯がずうっと遠くまで続いているのがわかった。果たしてその向こうまで泳いでいけるのだろうか。喉から息が漏れると宗太朗もまた、同時に果てた。

「ナツコ！　いらっしゃい、会いたかったわ」

笑顔で迎えてくれママに、わたしはぎゅっと抱きしめられた。ぷくりとした彼女の背中をわたしは摩った。

「響さん、お久しぶりです。来てくれて本当に嬉しいわ」

和服を優雅に着こなすママは、数年前とちつとも変わっていないかった。愛用していた香水が漂っている。品のある甘い香りだ。まとめた髪は清楚で、濃いグレイの帯は着物の柄を引き立たせていた。

カウンターの中には三十代くらいのバーテンと、若い女の子が二人いるだけの、小さな店だった。

客は一組で、スーツを着た中年男性が三人。

わたしと宗太朗は並んでカウンタ―に座った。ビロードの低い椅子はゆったりとしている。宗太朗は、「ドンペリをママにプレゼントする」と早速、注文した。二十二時を過ぎて、一組いた客が帰ると、宗太朗が女の子に鮎を頼み届けさせ、それを皆でつまみながら呑み続けた。女の子たちが上がるとバーテンもいなかった。残った三人でボックス席へ移ると、昔話に花が咲く。

「ススキノのときは、本当にお世話になって感謝しています。お仕事、相変わらずお忙しくて何よりですね。雑誌、読みました。特集で組まれていましたね」

「あはは。あの記事ね、僕の力ではありませんから。いや、それにしてもママが函館出身だったとは知らなかったですね」

雑誌に会社の記事が載っていたことなど知らなかったわたしは、独り、取り残された気分になる。「違う仕事に就くように、ママから夏子へいつてくれませんか。紹介できる会社ならあるんですよ」

「確かに今の仕事はあの頃のイメージと、かけ離れていますものね。心配する響さんのお気持ち、わかりますけど。ナツコが決めることです。もう少し見守るということでしょうか」

わたしのイメージとは一体なんだろうと思う。

「響さん、携帯、鳴っていますよ」

会話は続いたけれど、その間に二度、店の外へ出た宗太朗の様子が気になっていた。これまでも、

時間に関係なく仕事の電話は掛かってきていたから、最初は特に感じなかった。しかし、さすがに二回目に電話を受け席に戻ってきたときの宗太朗の顔色の悪さに、何かが起きたのだと直感した。

「夏子」

宗太朗のそのあとの言葉が続かなかった。

「いいの。すぐに帰っていいのよ。わたしなら大丈夫だから」

宗太朗の表情が申し訳なさで溢れている。こんな顔を見たのは初めてだった。何かとてもよくないことが起きたのだとわたしは思った。

それからの時間はあつという間で、ママが手配した知り合いのタクシーを呼び、宗太朗は静かに函館を出発した。

「夏子をお願いします」

実に落ち着いた様子で車に乗り込む宗太朗は、わたしへの配慮で一杯だった。こうしてタクシーに乗った男をママと見送ると、まるでススキノの夜の街に立っているあの感覚を一瞬、蘇らせた。

店に戻ってからのはなんだか気が抜けてしまい、ブーツを脱いでそのままソファに足を投げ出し座った。

深夜に函館を出て札幌に着くのは何時なのだろうか、タクシー代はいったい幾らになるのだろうか、とそんなことが頭の中を巡っていた。

「ナツコ、あなた大丈夫。響さんのこと」

わたしは頷く。

「なら、いいのよ。ナツコがしっかりしていればそれで」

「ありがとう、ママ。心配してくれて」

「響さんの会社、お父様が現役でいらっしゃるけれど、そのうち彼が代表になるのでしょう。私ね、ナツコには幸せな結婚をして欲しいの」

「結婚なんて。今は生きることに関一杯で」

「あなたのこと、真剣だと思うけど」

「ありがたいと思っている。でもね、ママ。彼には何も望んでいないの。これ以上何か望んだら、死んでしまうかもって怖くなるの。自覚ない、っていわれれば、そうなのだけど」

「ナツコの思うように生きたいわ。ただこれだけは言っておく。会えなくなるときがきたときは、黙って受け入れる余裕を作っておくことよ」

ママが愛した男も家庭のある人だった。死んだらそれっきり。何も残らないことを知っているからこその言葉なのだろう。

「あつ、冬馬がママによろしくとっていました」

冬馬とママは同い年だった。

「元気にしているならいいけど」

「住んでいる場所教えないの。電話も一方的な非通知で」

「そんな。まさか、また逃げているってわけじゃないでしょう。ナツコも知っているでしょう。奥さんの真希ちゃん、大（だい）さんとの若衆の女だったこと」

大さんは、ママのパートナーで組の親分だった。かつてはわたしもずいぶんとお世話になった。彼がお店に訪れると、席についた女の子に必ず小遣いを渡してくれたものだ。

「それは解決しているはずで」

「お互い好きで一緒になったのに。私、生まれた子が冬馬の子なのか心配だったわ。あの頃、ひよっとしたら自分の子じゃないかと真希ちゃんを捜していた男がいたでしょう」

五年前。「結婚した」と冬馬が言ったのには驚いた。入籍だけのものだったが、確かにあの頃、束の間、兄は幸せだったはずだ。

キャバクラに勤めていた真希ちゃんと初めて会った日、わたしは、自分よりも二歳若い彼女が、義姉になることに多少の不安があった。金色に染めた長い髪と、瞬きをするたびにバツバツタと音が鳴るようなマツエクをした彼女の、華奢な身体にやけに目立つコロンと飛び出た腹を見たからだ。

「赤ちゃんがいるの」と微笑む真希ちゃんの側で、兄もまた、同じように微笑んでいた。

「大さんが生きていたら、きつとうまく解決してくれたと思う」

「でも結局、すぐ離婚したのよ。どうして別れたのかわからなかった。わたしは、冬馬が真希ちゃんに愛想つかれて捨てられたのだと思って」

「冬馬のことだから誰にも迷惑掛けたくないのね。ナツコにも心配掛けたくないのよ。今、組のことはよく知らないから私は何の役にも立てないかもしれない。力がなくてごめんね。でも、何かあったら連絡するわ。互いを想って別れたってことも考えられるし」

「養育費は渡している」と笑っていた冬馬を思い出す。よりを戻せばヤクザに追われるということか。互いを想う形だけの離婚だったのか。

なんてことだとわたしは思う。生きてきた今日まで、冬馬に心休まる時がいったい何日あったのかと、わたしは兄を想った。

「そういえば、これ」

ママがテーブルに置いた経済誌。

「さっきの雑誌の話だけど。ナツコも知っていると置いていたのよ、悪かったわ。響さんの記事はもちろんだけどね。実は、偶然、涼のことも載っていたの、それにも驚いたの」

宗太朗が教えてくれなかった訳がわかった。表紙の見出しは若き経営者特集と太文字がしっかりと書かれ、よくよく目を凝らしてみると表紙の隅に、まぎれもなく涼の顔があったのだった。

「これって」

「文字通り、若き経営者よ。立ち上げた飲食店が注目されているみたい。写真見て本当にびっくりしたわ。本名、知らなかったから。ナツコがあの子を捜していたことを思い出した」

わたしは雑誌を手にすることなく、表紙ばかりを見つめていた。

「どんな感じ」

「飲食チェーン店の経営者で、立ち飲みバーとラーメン店が軌道に乗って、今度は回転寿司店ですって。故郷が釧路で、仕入れは地元の漁港からなんてことが書いてあったわ。あとは、経歴かしら。あの子、いい大学出ていたのね。資本金はホストで貯めたお金って。でも、それだけじゃお店は成り立たないわ。いいスポンサーを見つけたのでしょうね」

「ふーん」

わたしは気のない音を出してしまった。涼は釧路の出身だったのか。わたしが集めたブランドのバッグはバーのグラスとなり、時計はラーメンの丼に、店に落とし続けた札束は鮎屋のカウンターに化けたのかもしれない。いつか仕事で行った、夜逃げした女の金も入っているのかなと思うと可笑しかった。昔の男と今の男の仕事振りが、同じ雑誌に掲載されたなんて皮肉なものだ。

夕方の函館駅構内のキオスク前でわたしは立ち止まる。昨夜、ゆかりママから差し出された雑誌が平積みになっていた。

腕を伸ばし、隣のファッション誌とペットボトルのお茶を買う。成功したならそれでいいじゃないか。わたしがいまさらそれを読んだからといって、どうなるわけでもない。涼の本名を知ったところで、何かが変わるわけでもなかった。あの頃はあれでよかった。やがて終わりが来る夜の街では、あの生き方しか知らなかった。わたしが知り得た、誰かのために生きる喜び、それだけで充分

だったのだから。こうして、宗太郎を想う充実感があるのは、それを知ったからこそ、だ。

それよりも。今、宗太郎が、どうしているのかわたしの心配はそれしかなかった。自分から連絡はできないから、待つしかない。来たときと同じ、窓際の席に座り外を見つめた。空っぽの隣席に脱いだコートと二つの鞆を置き、お茶を一口飲んでみる。なんだろう。悲しい理由があるわけでもないのに、わたしは悲しかった。

連休を貰ったのは初めてだったから、倉庫に入るのが照れくさかったが、スツールの剥げた丸椅子に座ると、わたしの場所がここにあることに安心する。前歯が欠けた口を大きく開けて笑う田部さんを見つめ、この二日間、贅沢をしてしまった自分を責めた。それでも、手にしたお土産を、一人一人に渡すこの嬉しい気持ちは不思議な感じで、今までになかったなとわたしは思う。

吉岡さん夫婦には冬馬と同じイカの塩辛。田部さん、飯久保さんは甘いものが好きだから滝波さんと同じ、函館の銘菓となりテレビで紹介されていたチーズケーキ、そして社長夫妻には松前漬のセット。三時のお茶の時間におやつとなるようにイカ煎餅も買って来た。函館へ行くことは伝えていなかったから誰もが驚いていた。

「函館はどんなだった」と飯久保さんが質問してきて、かつて彼がその土地で働いていたことを今頃になって思い出していた。冬馬に「浮かれるな」といわれたのに。

「立待ち岬と函館駅周辺しか行かなかった」と応え、「ああ、私は、七飯のほうだったから」

とぼそりという。

「ところでね、なっちゃん。お父さん、耳が遠くなってきたでしょう。腰の痛みもね、なかなか取れなくて。マッサージしてもらっているのだけど」

わたしとお揃いの紫色のフリースを着て、社長のことをお父さんと呼ぶ奥さんは、子どもができなかった自分の体について申し訳ないと前に話してくれたことがあった。

「昨日はだいぶ良くなって痛みも引いてきたから、そのうち治るさ。しばらくは運転、吉岡さんに頼むわ。見積もりは、なっちゃんとやってもらおうと思って。補聴器つけても聞こえづらくなったし。この転送用の携帯、なっちゃんと飯久保さん、交代で持ってもらおうかなって考えている。どうだろうか。実はさ、この話は前から出ていて、それがいいとみんなの意見が一致しているんだ」社長の話に皆が頷いている。

わたしは突然の話に戸惑っていた。

「そう思う。ずっとここで仕事させてもらっているけど、あたしは、近所の主婦を束ねるだけで精一杯だし。持病もあるし」と滝波さんが大きな目をぎよるぎよるさせた。

「社長のようにな、品物を一つ一つ、出せるかな」とわたしが呟くと、「大丈夫だ。慣れだもの。最初は一緒に行くから」

すぐには断れなかった。断る理由もわたしにはなかった。ここにいる皆が本当にそう思ってくれるのなら、出来るかもしれない。社長の教えを守ってこの仕事を続けていけるかもしれない。そん

なことを考えていた。

病院へ行くと、父の病棟を担当するわたしと同年代の看護師長から声を掛けられた。

「折居さん。お父さん、今朝から微熱があつて点滴しています」

夕方の病院は患者の家族が面会にきているので人が多い。隣のおじいちゃんのお嫁さんと孫も来ていた。お嫁さんはいつも上品なスーツを着ている。中学生くらいの女の子はスポーツをしているように、短い髪がとてもよく似合っていてボーイッシュだ。

わたしは二人に挨拶した後、父の枕に巻いたタオルと、病院着の首周りに挟んだガーゼタオルを交換し、持ってきた紙袋に入れた。

特別なものは何も入っていないことを知っているのに、ベッド横の小さな棚を開けてなんとなく見てから、また閉める。棚の上にはティッシュボックスと、湯飲み、ストロー、スプーンのセット、そしてボランティアから贈られた、千代紙で折られた鶴が一羽置かれている。枕のベッド柵にも、折り紙で作られた赤とピンクの花が飾ってあった。ご飯を食べないのならわたしのすることは何もなかった。

父はずっと寝ていて目を覚ます気配もない。いつもならわたしが勝手に独り言を喋り、理解しているのかいないのかわからないけれど、ときどき、「ううー」とか「あーあー」と相槌を打つ。

隣のベッドの間に垂れているカーテンが半分開いていて、その向こうからお嫁さんがひょいと顔

を覗かせ、体を斜めにしたのがわかった。

「折居さん、忘れるところだった。さっき、男の人が来ていましたよ」

「ああ、そうですか。何か、言っていましたか」

わたしも体を斜めにしてそれに答える。

何かの間違いだろう。父に会いに来る人なんかいるはずがない。

「お父さんは寝ていたので、伝えますよって声をかけたんですけど。何も言わずにすぐに出ていってしまつて。髪がちよつと長い感じの。あつ、眼鏡かけていました」

冬馬しかいなかった。あれほど病院には行かないといっていたくせに。

わたしは函館土産の個包装になったチーズケーキを二つだけ棚の中に入れて、残りの三つを隣の女の子へ渡すと、ナースステーションに挨拶をして病院を後にした。

携帯を何度も確認するが、冬馬からの連絡はなかった。こちらが連絡を取りたいと思うときに限って、何も言っていない。本当にだめな兄だ。いつ会えるかわからないので、冬馬の塩辛はそのまま冷凍庫に保存している。

考えてみればわたしは、自分のための何かを買ってくるのを忘れていた。急に帰ってしまった宗太郎にだって何か土産があれば良かったのに。ちっとも思いつかなかった。ただ、わたしの部屋の押入れには、温泉宿に残された宗太郎の小さな鞆が一つ、ある。特別なものは入っていないから預かってくれと頼まれた。彼の私物がわたしの部屋の中にあるというただそれだけのことなのに、帰

るたび、そこに間違いなく鞆があることを確認した。

函館での夜は、ゆかりママと話しが尽きなかった。朝方、宿へ戻ったわたしは、朝食を断りチェックアウトぎりぎりまで広いベッドで寝ていた。支払いは宗太朗が済ませていたのでカードキーをフロントへ戻すだけだった。湯の川から路面電車に乗り函館駅へ向かった。「お土産は市場で買おう」といった宗太朗の計画通りに、ゆつくりと市場を歩き、威勢のいい店員に声をかけられながら茹で上がった蟹の試食をした。疲れて古い喫茶店に入ると、張り詰めていた緊張感から解き放たれたように、わたしは瓶ビールを頼み、煙草を吸った。

今夜、宗太朗がどんな感じで、会いに来てくれるのか朝からずっと不安だった。彼から連絡が入ったのは、函館から戻って一週間過ぎた昨日の夜で、わたしが初めて見積もりを取った日だった。

お客の指定で夕方からと言われて出向いた先は、古い平屋の戸建て住宅で3LDKの部屋だった。ご主人が他界したあと、十年間、一人暮らしをしていたけれど、施設へ移ることにしたという。わたしたちの前に見積もりに来た、他業者の若い男が言うには、引き取り処分代は三十万以上かかる、と説明されたらしい。

社長の後ろについて、複写になった見積書に記入していく。冷蔵庫180リットル、リサイクル法五千六百円。応接セット三人掛け、椅子、五脚。机、書棚、ベランダ鉢六個、風呂小物、洗面小物、隙間。この隙間というのは収納スペースに置かれているさまざまな物の一式のこと。鉢に入った土は、社長の家の庭、もしくは駐車場の隅に捨てればいい。雑誌十キロ、この中には雑誌も入る。

テーブル、衣類一式、鏡台、整理たんす、ベッド、組布団一式、作業費、処分費、人工代五人、軽トラック一台、2トン一台。池田商店の見積りは実に細かい。記入後に電卓を叩き、上から順番に計算していく。合計すると十三万となった。最後に宛名を書き依頼主に渡すとびっくりしていた。

「安くて助かりました。この家売って入所するお金を払うと、あとは年金しかないから」と頭を下げられた。やはりこの仕事が好きだなあとわたしは思う。

久しぶりに部屋へきた宗太朗はやつれていて、どんな言葉をかけたらいいのかわからなかった。窪んだ目に疲れが見えた。待ち望んでいた、と言ったら大袈裟だが、会いたい気持ちは強くあった。宗太朗に何も望んでいないといいながら、結局、好きな男に会いたい想いはあるのだと、わたしは彼の頬を両手で包んだ。静かに微笑んだ宗太朗の目が充血していて、起きてはならないことが彼の身に起こったのだろうと感じる。

「この間は、突然、悪かった」

「いいの」

それがわたしの精一杯だ。

「家族が急病で。でも、もう大丈夫だから」

家族って誰なのとわたしは訊かなかった。一度口にしてしまえば、知らなくてもいい質問が次々と出てきそうだった。わたしに対して、『家族』と言うしかなかった宗太朗もまた、苦しいのだと

感じた。自分の身を削られるほどのことといえば、彼の分身しか考えられなかった。

「これからもう少し検査があるけれど。たった四歳の息子が頑張っている」

宗太朗のはっきりとした表情をわたしは見てしまった。これまで彼が子どもの話などしたことがなかったし、それがこの関係を繋いでいるわたしたちの暗黙のルールだった。

「ごめん、夏子。落ち着いたら、ちゃんと話そう。これからの夏子の仕事のことも。僕にできるだけのことをさせて欲しい」

「仕事」

「このままじゃ、やっぱりよくないだろう。汚い部屋を片付けていると思ったら、やりきれないよ」

今、彼の手から繋がる先に、わたしの姿がそこになかった。もっと別の誰かへとそれは確実に繋がっており、入る隙もない。ああ、そうか。これが現実なのだ。

5

パジャマの柔らかな布が乳首に触れるだけで痛みを感じた早朝。外はまだ暗かった。携帯に設定しているアラームをオフにした。ストーブのスイッチを押し、キッチンで湯を沸かす。

そういうえば、確かに夢を見ていた。どんな夢だったのか思い出そうとしても、何も浮かんでこない。

先ほど感じた痛みをもう一度確認しようと、腕を曲げ内側の肉で自分の乳房をそっと持ち上げてみる。やはり乳首だけに激痛が走った。不安な気持ちに一瞬、囚われる。先日、久しぶりに宗太郎が会いに来たとき、帰って行く後ろ姿を見送ったときにもそれは感じていた。もしかしたらこれが最後かもしれないと思い、アパートの階段で宗太郎の姿が見えなくなるまで立っていたときだ。

毎朝そうするように、ゆっくりと珈琲をおとす。マグカップに注いだ香りはいい匂いだ。煙草に火をつけ深く吸った。美味しく感じない。それは昨日から突然やってきた。何年も吸い続けた同じ銘柄の煙草であるのに違和感が残った。微熱があるような体のだるさも気になる。

何故か落ち着かないわたしは、テーブルに置いた携帯に視線を移した。すると途端にそれは鳴る。「なっちゃん、これから迎えに行くから、すぐだよ」慌てた社長の声だった。

社長の軽トラックに乗り込むと、奥さんも一緒だった。

「なっちゃん。落ち着いて聞いてね。お兄さんがね」奥さんが言う。

「殺されたの」

それは本当に真っ先に思ったことだった。

住宅地の狭い小路は車がすれ違うのもやつとの、くねくねとした道だった。ドンつまりの奥に古いアパートがある。建物に囲まれた雪の解けていない手前の空き地には、小型のパトカーと救急車が止まり物々しい。昔の下宿にありがちな建物の出入り口の古い扉を開けると、すぐに階段があつ

た。社長の後に続きわたしも急勾配の階段を上っていく。二階を通り過ぎ三階の廊下に出ると、頭に紫のスクーフを巻いた年配女性が、わたしたちに気がついて手をこまねいた。

「大家さん、すみませんね」

社長が小太りの女に声をかける。

「ああー池田さん、私一人じゃどうもできなくて」

大家が立っている扉の前に社長が駆け寄ると、その気配で開いたドアから警察官が顔を出した。社長の後にわたしも続く。部屋は六畳ほどのワンルームで窓が一つ。中央にコタツがちらりとみえて、その周りを人が囲み、もう一人の警察官が何かメモを取っているのがわかった。

「妹さんです」と社長がいった。

狭い空間にいる全員の目がわたしへと向いた。

「妹さんですね。お兄さんか、確認、できますか」頷くわたしの手を社長が取った。

コタツの回りを囲んでいた人が立位置をずらしていくと、白衣を着た初老の男性が正座している。冬馬はいた。下半身をコタツに入れたまま、仰向けの姿勢で寝ている。薄緑の作業ジャンパーを着ている。

「兄ちゃん」

わたしは立ったまま声をかける。

「残念ですが、お亡くなりになっています。心不全と思われ」

「兄ちゃん」

もう一度声をかけてみたが返事はなかった。

「四、五時間前でしよう。詳しく調べればわかると思いますが」男がいった。

わたしは膝をつき、冬馬の顔を撫でてみた。冷たくはなかったし、髭も伸びている。

「事件性はないですね」

見上げた先にいる警察官がメモを取りながらいった。

「なっちゃん、どうする。病院で診てもらうかい」

社長の言葉に首を振るのが精一杯で、みんな何をいつているのかよくわからない。

「身内は、妹さんしかいないから」

社長がわたしの代わりに話してくれていた。

それからわたしたちは廊下に出され、部屋の中では警察が何かやっていて、その間、社長がいろいろな所へ電話をかけていた。わたしは奥さんと大家と、壁に背をもたれて座っていた。

「ちょうど、私の家の窓から、折居さんちの窓が見えてね」と大家が話し始めた。

家賃と水道料の集金で何度か訪ねたけれど会えず、また来るからと紙に記しドアに挟んだというのが、昨夜のことだった。

「今朝、チャイム鳴らしたけど、返事がないものだから。鍵もかかっていないし。声をかけて中へ入ったら、折居さんがテレビを付けたままこたつで寝ていてね。妹さんがいるなんてこと、知らない

かったものだから」

大家が、社長の奥さんに説明しているのをわたしは見ていた。

「テールの上にさ、私が挟んだ手紙と、いつも家賃を入れている封筒がちゃんとあったの」

冬馬の部屋の契約書に記された緊急連絡先は大家の知人、社長の電話番号だった。

やがて、社長が手配してくれた葬儀屋がやってきて、冬馬はそのまま車に乗せられて行ってしまった。

真希ちゃんと連絡が取れたのは、通夜が終わったあとだった。通夜といっても、家族葬とも呼べない小さなものだったが、馴染みのお坊さん親子が心をこめてお経を唱えてくれた。ささやかな祭壇に並べられたわずかな白い花も、なにもかも社長夫妻が知り合いの葬儀屋と相談し整えてくれた。集まってくれたのは池田商店の人たちと、かつて隣に住んでいた佐々木のおばさん、函館からゆかりママも駆けつけてくれた。ママは焼香すると鼻の頭を真っ赤にしながわたりを抱きしめてくれた。知らない顔もあった。最近、冬馬と一緒に仕事をしていた五十代の男とその妻だった。

駆けつけてきた真希ちゃんと会うのは二年ぶり、だろうか。長く金色だった髪は、短く黒色に変わっていた。借り物なのか、サイズの大きな黒のワンピースは華奢な彼女をなおさら小さく感じさせた。ずいぶん大きくなった速人は、臉をこすりながら、母親と一緒に棺の前で手を合わせたのだった。

よく晴れた四月の空は穏やかにそこにあった。薄いグレイの煙が出ている。冬馬の煙が空へと昇っていくのをわたしたちは見守っていた。火葬場には、わたしと社長夫妻、そして真希ちゃんと速人が参列した。五歳になった甥は、白いシャツと黒い半ズボンのスーツを着ていたが、運動靴だけが青かった。その靴と、空を見比べながらわたしは、真希ちゃんの手を握った。

「真希ちゃん、最後に冬馬に会ったのはいつ」

「半月前。三人で入園式に着る速人の洋服を買いに行ったの。今着ている、あれ。冬馬ね、すごく嬉しそうだった。なっちゃんが、函館へ行っている日だった」

三人で買い物をしている様子が、わたしには見えた。冬馬は、速人の靴を買い忘れたのだと思うと、兄のそういうところは相変わらずだと可笑しくなる。怯えながら生きていても、愛する人が冬馬にはいたではないか。こうして無邪気にくるくると走りまわるわたしの甥は、兄にそっくりだった。

「速人は冬馬に似ているね」

「まさか、なっちゃんまで、速人が昔の男の子どもだって思っているんじゃないわよね。冬馬に初めて会った頃、あたし、色々あったし馬鹿だけどそれくらいわかるわ。あのチンピラ男のせいで、冬馬と一旦、離れるしかなかったの。けどあの男も、違う女と結婚したって聞いたし。そろそろまた三人で暮らせると思っていた矢先だった。ほんと、あと、もう少しだったのに」

真希ちゃんがぼろぼろと涙をこぼした。

光沢のある白い布で包まれた冬馬の骨壺がわたしの部屋にある。遺影は速人を抱いた写真を引き延ばしたものだ。小さな棚にそれはある。

冬馬が死んで四日目の朝、わたしは社長と飯久保さんの三人でアパートにいた。最期を片付けなければならなかった。大家さんは、「初七日が過ぎてからで」といつてくれたが、そんなにお世話になれないと思った。ひとりで充分なくらいだったが、社長と飯久保さんもついてきてくれた。

薄い壁の小さな部屋だった。玄関たたきのすぐ横にトイレと風呂が一緒になった極小のユニットバスが付いていた。手洗いたちと思われる襟元がくたびれた下着のシャツと靴下、トランクが針金ハンガーに干してあり、シャツの裾から生乾きの匂いがした。コタツの上には、空になったグラスがひとつと、コンビニのレシートで、印刷された文字を読んでみる。ショウチュウ980円、スルメイカ105円、ロールパン158円。日付は冬馬が死んだ前日だった。床にそのまま置かれたアナログテレビ。台所の僅かな小物、手のついていない五個入りのロールパン。ダンボールに入ったままの衣類。鴨居に掛けられたハンガーには、クリーニングのタグが付いたままの背広があったが、他には何もなかった。

「なっちゃん、これ、裁縫箱だ」

社長が、押し入れの整理をしているわたしにいった。台所の下棚から出てきた裁縫箱。それと一緒に雑誌が一冊。その雑誌には見覚えがあった。

「それ、ひょっとしたら大事なものかもしれんよ」飯久保さんが丁寧に詰めてくれる。

掃除をし、部屋を出たわたしの手に残ったのは、小さなダンボールが一つだけだった。

焼酎のお湯割を二つ作って、遺影の前にグラスを一つ置き、線香をつけた。塩辛を小鉢にいれて供える。ダンボールからテーブルに取り出した財布、ライター、真希ちゃんと速人の写真。

水色の裁縫セット。裏には『五年一組 折居冬馬』と書かれた名前に二重線を引き、折居夏子と訂正されている。それは冬馬の幼い字であり、わたしも小学生から高校まで使った。

蓋を開けてみると、黒い糸がついたままの針が一本、母の作った針山に刺さっていた。上の小道具仕切りを外す。半端な刺繍セットの袋、チラシに包まれた貯金通帳一通、印鑑、保険証書一通。タータンチェックの定期入れ。それは、わたしがはじめてのバイト代で冬馬へプレゼントしたものだ。透明なフィルムの中に、父と兄、わたしが写った写真が入っていた。よく似た写真は持っている。ただ、ちよつと違うのは、わたしが持っているのは父ではなく母が写った三人のものだった。冬馬が死んだ日の朝から、ずっと吸っていなかった煙草に火をつけようと思ったが、やめて、また箱へ戻す。乳首に触れてみると、変わらない痛みがあった。

ナースステーションに顔を出したわたしに、看護師長が丁寧に頭を下げてくれた。

「折居さん、大変でしたね。お父さん大丈夫ですよ。変わりありませんからね」

冬馬のことがあって、しばらく病院へ行けないことを連絡していたからだった。

病室に入ると父は寝ていて、見舞客もなく静かだった。ベッドとの間のカーテンは珍しく足もとまで引かれており、丸椅子に座ると父しか見えなかった。タオルを交換し、汚れたものを袋に詰めてから、わたしは布バッグから雑誌を取り出した。それは函館へ行ったときにゆかりママから教えてもらったものと同じだった。どうして冬馬が持っていたのだろうか。経済紙を読むような兄ではなかった。宗太朗か、もしくは涼が出ているとわたしに知らせたかったのか。飯久保さんが見つけたときにいていた「ひょっとしたら大事なもの」なのか。

ぱらぱらと捲ってみる。涼のページは冒頭だったが、読んだ形跡は感じられなかった。折り目も無かった。ちょうど、真ん中のページに目がとまったのは、宗太朗の会社の名前が太字で載っていたためで、わたしはそれもやりすぎした。

最後から数ページ手前だけは、しかし、きっちりと上端が三角に折られている。小料理店の特集で、両開き二ページに渡って十人の女将の顔写真と、店の紹介記事が四角い線で区切られ掲載されていた。冬馬の知っている顔でもあったのかとゆっくりと、上から順番に見て行く。

中央の顔写真にわたしの目は止まった。

『おでん 雪』

わたしが持つポケットフィルムに収まった僅かな写真のその中で微笑む母の顔を思い浮かべる。まさか、母なのかと、もう一度目を凝らして記憶を探る。冬馬はこれを見つけて折り目をつけたの

かもしれない。いつかわたしに知らせるつもりだったのだろうか。

タータンチェックの定期入れを手にし、父の顔に近づけてみる。

「父さん、この定期入れね、わたしが冬馬にプレゼントしたんだよ」

写真を父に見せようとゆつくりと取り出した。母が出て行く前の冬の頃だったと思う。他にも何か入っていて、それは小さくたたまれた紙だった。裁縫セットに書かれた変わらない兄の字で、『夏子へ』と記されている。開けてみると中から便箋が現れ、それに包まれて一万円札がでてきた。色の濃い聖徳太子紙幣だ。

冬馬へ

ごめんね冬馬。ごめんね。夏を頼みます。

困ったことがあったら、連絡ください。

住所は書かれていた。電話番号まであるではないか。やや右肩上がりの字をしている。はたして、これが母の字なのか。

「冬馬が死んだよ」

目を閉じたままの父に声をかけた。問いかけに父が反応するわけがなかった。わたしは持っていた定期入れを握り締める。冬馬がこたつで寝ていて、火葬場で骨になり、真希ちゃんがぼろぼろと

涙をこぼしていてもわたしはそれが現実ではない気がしていた。広げた札はくしゃくしゃだった。母が皺だらけの紙幣を送ってきたのか、それとも兄が握りしめた痕跡なのか。

「ねえ父さん。今、一万円あったら何欲しい」

幼い兄妹のやり取りをわたしは思い出し、喉がちぎれるのではないかと思うくらいに、力が入った。腹の底からでてくる叫びを押し殺す。

「うー」

突然、父は目を開けて唸り始め、わなわなと震え、握ったままの左手を上げようとする。ベッドが軋んで諤諤と鳴った。布団を掛け直し父の手を握り摩ると、落ち着いてすぐに静かになり、眉間に寄せた皺も、やがて消えた。

握ったその手は少し浮腫んで厚ぼったく、節々が柔らかい。

「俺は父さんのように真つ黒な爪をして働きたくない」といつていた冬馬の亡骸を綺麗にするとき、胸の上で組ませた指の爪をもっと磨いてあげればよかったとわたしは思った。今わたしが握っている父の指は、白く艶があつた。爪は切り揃えられ、もはや、昔の父の手ではなかった。

「父さん、わかるの。兄ちゃんね、死んじゃったんだよー」

「あーあ、ゆーぎざん」

父の口から唾液が溢れた。タオルで拭きとると、陽の光がようやく父の表情を緩めた。わたしの喉はますます震え出した。アパートで冬馬に声を掛けたときも、通夜の席で速人に会ったときも、

火葬場の煙が昇っていくときも一滴さえもでなかったのに。

視線の先にある父の顔がぼやけている。父は、わたしの涙の底にいた。父が泳ぐ場所はここだったのかとわたしは思う。はたして母が泳ぐ場所は父の元ではなかったのだろうか。

涎のついたタオルでわたしは自分の顔も拭いながら、母を捜してみようかと思っていた。あの雑誌に書かれていた住所に行けばいいだけだ。いつだって行けるのだ。かつて、わたしが働いていたあの街の隅で、見つけてくれるのを待っているのかもしれない。

父に「また来るね」と声をかけたが眠っていた。瞼の淵に一筋の涙の跡があって、それは光のせいで白く乾いていた。

病院を出ると、春の夕暮れが目に飛び込んできて、眩しくて目を細める。冬馬が死んでまだ数日なのに季節を感じる余裕があった。雨の上がった色付く町並みを素直に喜べる自分に驚いてもいた。歩く先の舗装がところどころ陥没し、小さな水溜りができ光っている。近づいてそれを見つめると、その水の底にわたしがいた。

深呼吸して腹に手を当てる。ここで確かに泳いでいる小さな命の存在を、母に教えてあげたいと突然に思う。今、すべてが愛おしい。愛おしくて心地よいこの場所でこの子と共に泳いでいくのだ。携帯のマナーモードを解除した途端、着信音が響く。

「はい、池田商店です」繋がっていくだろう言葉に力が入った。

西南西よりやや西

鮎村 尚

やげん堀の缶が、スマホのバイブでブルルと震える。

ライトノベルの「魔界境域シリーズ」のスマホケースを開くと、液晶画面に未読のラインが浮かぶ。

「舞、誰から？」

「恵理ちゃん。熱が下がらないから、初詣来れないって」

寝込んだウサギのスタンプを送ってきた恵理ちゃんは、小学校からの友だちだ。明日の午後、深大寺のバス停で待ち合わせをしているものの、クリスマスに引いた風邪は、大晦日までには治らなかった。

「そば待機」とメッセージとスタンプを送る。紅白やアニソンの話題が行き交い、カラフルなデコ文字の「良い年を」を最後に、スマホカバーの留め金をパチンと止めた。

竹の衝立で仕切られた、四人掛けのテーブルは、蕎麦つゆと同じ色だ。

木目調のそれは数ミリ間隔で年輪が刻まれ、角の細かい傷には甘めのだしが染み込んでいるようだ。

去年の晦日は深大寺門前にあるこの店で、母と年越し蕎麦を買った。今年は西川くんと三人で、早めの夕食を食べている。

黒い箸入れの横で、黄色い花がひっそりと咲いている。シンプルな花瓶に生けられた花は、冬枯れの庭の中で、唯一蕾を開いた蠟梅（ろうばい）だ。

「この花、蠟梅って言うんだよ。倫子さんから教えてもらったんだ」

「小さい花なのに、良い香りね」

蠟梅と聞いて、老いた梅だと思っていた中学三年のわたしは、この店で働く倫子さんから、ひどい言い方だね、と豪快に笑い飛ばされた。

「花びらがロウソクみたいだから、蠟梅って名付けられたんだよ。江戸時代に中国から日本にやって来たんだって」

倫子さんから聞いた話を、わたしはそのまま得意げに説明をした。母が蠟梅の匂いを深く吸い込んでいる。隣に座る西川くんが、細い蠟梅の小枝を触った。

「舞ちゃん、蠟梅は花だけではなく、枝からも良い匂いがするんだよ」

ムカつく。

そんな話、聞いてないから。

喉まで出掛かった言葉を、わたしはコップの水と一緒に飲み込んだ。軽く相槌を打ちながらも、視線は鈴なりに咲く蠟梅の花に向いたままだ。

西川くんは母のカレシだ。来年の三月、わたしが中学を卒業すると同時に、二人は結婚する。三十八歳の母は、老人ホームでヘルパーとして働き、三歳年下の西川くんは、福祉用具メーカーに勤務している。

蕎麦を待ちながら、蠟梅の花びらを触ってみた。

指先につるりとした厚みが残る。風に揺られてヒラヒラと散る花とは違った存在感が、そこにあった。浮草模様のすりガラスから夕日が漏れ、蠟梅の花びらを透かす。花の中心は葡萄色に染まっている。

スマホが再びラインの通知を伝えた。

カバーを開くと、放送部の柏木の名前があった。西川くんに向けられていた棘が、すーっと気持ち良く抜けていく。

柏木のラインのアイコンは、ONAIRの文字が白抜きで光っている。

メッセージは「紅白待機」と至ってシンプルだ。常に学年五位以内の成績をキープしている柏木

は、わたしがラインのやり取りをしている、数少ない男子の一人だ。

蕾がほころんだ蠟梅の写真のあとに、「深大寺そば待機」と送る。既読から一秒後に届いた「早い！」のメッセージが続いて、うさが唇の端をあげてシニカルに笑っている。

恵理ちゃんと柏木は、ラインのやり取りがだらしなく続かないところが楽だ。

クラスの花子のライングループは、みんな終わるタイミングを掴めずにいる。スクールカースト上位の、テニス部の長谷川さんの「おやすみ」の四文字を、わたしたちはいつも心待ちにしている。柏木の「良い年を」の四文字はシンプルな字体で、わたしも彼にはデコ文字はいっさい使わなかった。あと数時間後に新年のメッセージを送ろう。手を振るうさぎのスタンプを確認し、そつとラインを閉じた。

店内のテレビでは、アナウンサーが初詣客の混雑予想を伝えている。上野のアメ横の雑踏や、初詣客専用の深夜バスのお知らせに、年末の慌ただしさが押し寄せてくる。

数時間後には、参道から深大寺通りまで初詣の参拝客で溢れるだろう。今年は2LDKの団地で、紅白とアニソンライブを観ながら、一人で新年を迎えることになる。

なぜなら、これから母が老人ホームの夜勤に入るからだ。十四年間生きてきて、初めての経験だ。母のいない寂しさよりも、恵理ちゃんや柏木より、ほんの少し大人になった気分だ。一人年越しフェスと名付けてしまったほどだ。

明日、いつものようにチーズトーストをかじりながら、テレビで浅草寺の中継を見ている頃、夜

勤明けの母が帰って来る。昼にお節とお雑煮を食べ、初詣に行き、我が家にもようやく正月が訪れる。二日は恵理ちゃんと池袋のアニメイトへ行く予定だ。それまでに風邪は治るのだろうか。

母の会社は大晦日から三が日までの出勤者に、特別手当として五千円支給するという。

「特別手当が入ったら、赤坂でランチビュッフェしようね」

趣味は食べ歩き之母に連れられて、わたしはネットで紹介されたビュッフェやカフェにいつも付き合われている。

「絢さん、俺も連れて行ってよ」

西川くんのナチュラルすぎる笑顔に、わたしは口をつぐんだ。

はじめて西川くんの名前が登場した日を、わたしは覚えてはいない。母の好きなゴマだれの冷やし中華が夕食に出た時か、パーラーで横に倒れるミルフィーユをフォークで抑えていた時だろうか。いつの間にか、わたしたちの食べ歩きは、二人用のテーブルから四人用のテーブルに通されるようになった。

「舞ちゃん、ビュッフェのケーキ、全種類制覇しようね」

「絶対無理！　ありえない。わたしはダイエット中だよ」

西川くんは親子の会話に自然と入り込んでくる。これが彼の処世術なのだろうか。友好的で、飾らないところが余計、大人の余裕を見せつける。

「舞は全然太ってないじゃない。だいたい今の子は痩せすぎなのよ」

ホテルのランチビッフェは、九割が女性客であふれている。四人用のテーブルで、西川くんはパンケーキやジェラートを笑顔で平らげているのだろう。スイーツ好きの彼のどこに、男としての魅力があるのか、まったく理解できなかった。

長身の彼はひよろひよろとして、どこか頼りない。時計の八時二十分の角度と同じ垂れ目は、いつも眠たげで、開いているのか閉じているのか分からない。

二十一歳で結婚した母は、早い段階で父からDVを受けた。母は殴られた後遺症で、今でも耳にわずかな障害が残っている。シェルターに保護されたのは、わたしが二歳の時なので、父や非公開のシェルターの記憶はない。

協議離婚が成立し、三歳から調布駅の市営住宅に暮らしている。母はヘルパーとして働きながら、今年ケアマネージャーの試験に合格した。

小柄でぼっちゃりとした母の笑顔は、夏休みのヒマワリのような。二十代前半で壮絶な離婚を経験し、強さと図太さ、そして適度な緩さを身に付けた。

大雑把な母に育てられたわたしは、真面目さと几帳面さの中に、ほんの少しの諦めを持つようになった。

成績も十位以内から落ちることなく、図書委員を務め、冬休み明けには都立高校の推薦を受ける。担任から私立の進学校を勧められたけれど、入学金と授業料の額を見るなり、入学案内を請求しなかった。

母からもなぜ私立を受けないのか訊かれた。その度に「都立は自宅から近いし、特別進学クラスもある」と言って、はぐらかした。入学後、塾の季節講習を受けるという条件で、受験の許可をもらった。

同級生が冬休み返上で受験勉強の追い込みをしている中、わたしはライトノベルを読みあさり、創作サイトのPixivに小説をアップし、勉強の感覚を忘れないよう、毎日参考書を開いた。

藍色の暖簾の奥から、倫子さんが身体を揺すりながら蕎麦を運んできた。母とわたしはかき揚げ蕎麦、西川くんは天ざるの大盛りだ。海老と野菜のかき揚げは、丼の中で黄金色に輝いている。

西川くんが箸を渡してくれた。ぺこりと頭を垂れたわたしは、朱色のやげん堀の缶を開けた。このやり取りがいまだに慣れなかった。Uの字に曲がった海老に七味唐辛子を振りかける。七味の黒ごまは、人の顔にできたホクロみたいだ。

西川くんは箸を上下に割った。手元で弾く竹は小気味よい音をあげる。それでもわたしは決して蕎麦を嚼る西川くんと目を合わせなかった。

ささくれ立った割り箸の棘が、指の股に刺さる。きれいに箸を割った西川くんとは対照的に、わたしの箸はいびつな形となった。

母が海老をざっくりと崩した。

「舞、かき揚げサクサクだよ」

「本当に絢さんは美味しそうに食べるね」

小柄な母とは対照的に、わたしは背が高く、顔も大人びていと言われている。きつい一重の目は、父に似たのだろう。二重瞼と睫毛の密度だけは、母に似たかった。

玉ねぎと海老がつゆの中に沈んでいく。ごま油の香ばしい匂いと歯応えを楽しむように、母がかき揚げを口一杯に頬張っている。西川くんが笑顔全開の母を幸せそうに見つめる。

引き戸が開き、風の流れが変わった。テーブルの上の蛸梅の匂いがあたり一面に漂う。膨らんだ蕾が開き、一年のサイクルの中で最高の時を迎える蛸梅の甘い香りは、祖母の鏡台にあった、ルビー色の香水に似ている。

ツインテールの恵理ちゃんは顔も小さく、唇を突き出したアヒル口は、まるで深夜杯の美少女アニメから飛び出してきたようだ。耳より数センチ上の位置で結んだ髪は、肩先で緩やかなカーブを描く。空気を含んだように揺れるツインテールは、ライトノベル界限では天使の翼と言われている。一方、顎の位置で切り揃えたわたしの髪は直毛で量も多く、ボブスタイルというよりも、残念なおかつ頭の類いに入る。

二人の共通の趣味はアニメや漫画、ライトノベルのファンタジー小説だ。お揃いのスマホカバーは、一角獣と共に戦う、魔界一族の薔薇と長剣のエンブレムが描かれている。

アニメ好きの連中は、だいたいがクラスの中で浮いている。わたしたちはアイドルやバンド、好きな男子の話に夢中になれないが、十四歳の女子の世界から弾かれないよう、必死に自分たちを取

り繕った。

キャラクターが全面に出ているグッズは学校には持ち込まず、Mステをチェックし、ドラマとタイアップしたバンドの主題歌はすぐに覚えた。中体連では男子のバスケの試合に応援に行った。地道な努力の結果、わたしたちは陰湿ないじめに遭うこともなく、平穏な三年間を過ごすことができる。

クラスは女子限定のライングループを作ったテニス部の長谷川さんを筆頭に、ダンスユニットを組んでいる五人組と、ファッションコーデのインスタグラマーを目指しているグループが幅を利かせている。

中間層は、ほとんどがどんぐりの背比べだ。アイドル、K-POP、バンド、FC東京、アニメとBL、人の数だけ好きなものがある。

わたしたちは、BL好きの村上さんと橘さんとは反りが合わなかった。最初に声をかけてきたのは、黒髪ロングヘアーの村上さんだ。恵理ちゃんのリュックサックに付けられた、戦記ファンタジーアニメのロゴアスキーを目敏く見つけたのだ。村上さんは、天然パーマに歯の矯正中の橘さんと、移動時間の廊下で待機していた。

「アニメが好きなの？」

早口の橘さんは他の作品や声優の話脈絡もなく話し始めた。けれども、会話のいたるところに、本編とは関係のない男性キャラクターの絡みの話が増えてきた。わたしたちは瞬時に、村上さんと

橘さんがBL好きだと察知した。

「ごめんなさい。実はBLは読まないんだ」

「恵理も舞ちゃんも、ただのアニオタだから」

村上さんの顔が引きつり、橘さんの矯正のワイヤーが鋭く光った。二人はまるで時間を無駄にしたと言わんばかりに、渡り廊下を後にした。あれから調理自習や体育のグループ分けでも、ことごとく二人からあからさまに避けられている。

そもそも、わたしと恵理ちゃんは、病欠や他のグループから余ったメンバーと組まされることが多い。

三学期に入ると、教室でも授業は自習となり、わたしと恵理ちゃんは高校の推薦が決まっているため、ノートにお気に入りのキャラクターを描いては時間を潰していた。

「舞ちゃんがいるから、恵理は高校に行っても友だちを作らないからね」

「恵理ちゃんは可愛いから、すぐに友だちができるよ」

卒業という二文字よりも、恵理ちゃんは小学校からいつも一緒にいるわたしと離れるのが、不安なのだろう。彼女は四月から私立の女子校に通う。ボルドーのチェックのジャンパースカートに、短いケープを羽織った制服は都内でも人気があり、マニアの間でも高値で取引されている。きつと恵理ちゃんは、有名デザイナーが手掛けた制服を完璧に着こなすはずだ。

四時限目の終わりを告げるチャイムが鳴る。

恵理ちゃんとお弁当を広げ、いただきますと手を合わせる。放送部は昼休みに校内放送を流している。

柏木は二年の後期から、放送部の部長になった。学校ニュースを読み、リクエスト曲を流し、自作のラジオドラマを部員たちと演じている。

今、書いているドラマはバスケットの話だ。主人公は女子マネージャーで、二年生の彼女は中体連で引退する三年生に、おそろいのマスコットを作っている。フェルトのバスケットボールに選手たちの背番号を、刺繍糸で一針一針縫いつけている。マスコットを手にした選手たちは、体育館でウォーミングアップを始める。

台本の第一稿を読ませてもらったわたしは、副キャプテンの背番号7を縫う、主人公の淡い恋心に切なくなった。中体連でチームが負けた瞬間、三年生は引退する。主人公は揺れるバスケットゴールに願いをかけた。

ラジオドラマは二月に放送される。

ギンガムチェックの容器に入った、冷凍食品のグラタンをつつきながら、恵理ちゃんと曲紹介をする柏木の声を聞いた。アイドルやK-POPのリクエストが多い番組で、たまにわたしたちの好きなアニメの主題歌やキャラソンをかけてくれる。

毎週金曜日、本を紹介するコーナーがある。書店ランキングや中学生向けの文庫を参考に、今週の三冊を選ぶ。柏木は原稿を読んでくれと、水曜の深夜にラインを送ってくれる。三冊目の本が決

まらない時は「金子のおすすめの一冊を教えてくれ」と図書室に現れる。

最近私立入試前の最後の追い込みで、柏木も忙しいのだろう。

チキンナゲットを頬張る恵理ちゃんが、いきなり小声になる。

「舞殿、例の作戦の進み具合はどうなっておる？」

「まだ準備段階でございます。しかし、我が軍は断固として敵の突破を阻止いたしまする」

時代劇口調のわたしたちは、卒業式に向けて、ある作戦を練っていた。

名付けて「西川くんを卒業式に出席させない作戦」だ。当の本人は、わたしの卒業式に出席する気満々で、わざわざ有給を取ると、スマホのスケジュール帳を開いていた。母と再婚するとはいえ、当たり前のように父親面をして、へらへらと卒業式に出席する西川くんを、神聖なるわたしたちの学び舎には入れたくはなかった。

「その時は我が軍も援護いたしまする」

「かたじけない」

五時限目が終わり、恵理ちゃんと別れたわたしは、神代植物公園から梅園を通り抜け、むしろに隠れた白い冬牡丹の花を一つ一つ数えた。南天の赤い実は冬休みが終わった頃に、完全に落ちてしまった。

深大寺門前の蕎麦屋に来るのは、二週間振りだ。

店の引き戸は建付けが悪く、戸を幾分持ち上げるようにして開けるのがコツだ。わたしは四月か

ら土日のみ、この店でアルバイトをすることになった。

「こんにちは。履歴書、持ってきました」

「舞ちゃん、おかえり」

さっそく三回書き直した履歴書を店長に渡した。

カウンターに座るよう勧められ、メニューの横に貼られた節分のポスターを見上げた。深大寺では毎年、節分の豆まきが行われる。今年も力士や落語家、歌舞伎役者が本堂の舞台で豆をまく。

二月が近付くと、小学校の児童保育での豆まきを思い出す。指導員のお姉さんと「鬼は外、福は内」と豆をまいたが、恵理ちゃんだけは、鬼は外とは言わなかった。

「パパは遠くでお仕事をしているから、恵理は鬼は外とは言わないの」

後日聞いた話によると、父親は単身赴任ではなく、若い女と駆け落ちした。パパが大好きな恵理ちゃんは、父親が北海道で働いていると小学四年まで信じていた。恵理ちゃんのママは調布市のセレクトショップのオーナーで、ターゲットは三十代から四十代の働く女性だ。ヨーロッパのブランドを主に、日本の新進デザイナーの商品も取り扱っている。

「舞ちゃんの家もパパがお留守だから、鬼は外とは言っちゃダメなんだよ。福は内だけだよ」

父がいない理由を幼稚園の頃から聞かされていたわたしは、母の片方の聴覚を奪った父を、鬼だと思っていた。鬼が二度と家に来ないよう、手のひらに握り込んだ豆を思いっきり、団地の廊下やベランダに投げつけた。その中の数個は随分と遠くまで飛んでいき、やがて下の自転車置き場に落

ちた。

母が西川くんと結婚を決めたのは、断られても諦めなかった彼の粘り強さと、ケアマネジャーの試験に合格したからだ。ヘルパーは月に夜勤が五回前後はある。母から結婚の相談をされた時に、このままヘルパーを続けていたら、自分が夜勤勤務の時に、わたしと西川くんを一晚二人きりにさせてしまう。それだけは断固として避けたいと言われた。

「西川くんを疑っているつもりはないけど……」

一度目の結婚に失敗した母は、二度目の結婚に対して、不安な芽は先に摘み取っておいた方がいいと判断したようだ。

慎重な母の言葉に、わたしはどきりとした。

誰しもが、性犯罪の被害者になりえるというリスクに晒されている。どこか他人事と目を逸らしていた自分は、大人になるのが恐いのかもしれない。

「だから絶対、試験に合格して、ケアマネになるからね」

母の熱意と努力が、転職と再婚を一度に実現させた。

一方、金子舞から西川舞へと名字が変わるタイミングも、高校入学が一番都合が良かった。中学でいきなり名字を変えたら、周りへの説明や詮索が億劫だ。

レジの横で倫子さんとホール係のおばちゃんが、節分で豆をまく力士の、今場所の成績を辛口批評している。

厨房で、店長がステンレスのボウルに入れた具材を混ぜている。倫子さんが大きな声で店長に声をかけた。

「店長、今日の賄いなに？」

「帆立の小柱と三つ葉のかき揚げ」

店長が、お玉が正方形に四つ並んだ調理器具に、かき揚げの具材を均等に流し込んでいる。

「すごい、その道具。かき揚げを一度に四つも揚げられるんだ」

「これかい？ レードルって名前なんだよ」

十分に熱した天ぷら鍋の中に、レードルが音を立てて沈む。画期的な道具を発明した人に感心したが、それを合羽橋やネットで買いたいとは、さすがに思わなかった。

給水器から倫子さんが水を運んできてくれた。

「絢さん、今日も残業なんでしょう。舞ちゃんも賄い、食べていきなよ」

母は今の職場の引継で残業が多い。時には夕食が二十時を過ぎることもあり、蕎麦は有り難かった。

「引っ越し、決まったの？」

「二月の下旬」

水を一口飲み、ストレートの黒髪を摘まんだ。切り揃えた毛先が伸びて襟足がチクチクする。スパーに入っている美容室は安くて早い、切り方が雑だ。クラスメイトの大半は、アプリ予約可

能の、サロンと呼ばれるチェーン店の美容室に通っている。

「新しい部屋、広いでしょう。良かったね」

「わたしは今の団地の方が気に入っているけど」

カット代の足りない分は、お年玉をおろすと言え、母は全額出してくれるだろう。

わたしの部屋には、来月の引っ越し用の段ボールが立て掛けられている。荷造りや本の整理をしなくてはならないのに、昨日も新選組をオマージュしたライトノベルの新刊を読破してしまった。

「あの団地に、さすがに三人は住めないでしょう」

「そうだね。西川くんとお母さんは一応新婚さんだからね」

「なに、ませた事言っているんだか。舞ちゃんだって春から西川さんでしょう。いきなりお父さんとは呼べないけど、いつまでも西川くんは変だよ」

倫子さんの指摘にわたしはなにも言えなかった。恵理ちゃんや柏木、親戚の叔母さんも、わたしが西川くんのことをどう呼ぶのか、注目している。それでも、倫子さんのように直接聞いてくる者は誰一人いなかった。中学三年にはデリケートな問題だと、気を使われるのが伸びた襟足のようにならなかつた。

そもそも「西川くん」と呼び続けている母が悪いのだ。いきなり呼び方を変えろと言われても、すぐにできるわけではない。

厨房から倫子さんが太巻きを持ってきてくれた。この店では節分の日限定で、蕎麦セットのおに

ざりを太巻きに変える。断面が鮮やかな太巻きが二つ、皿にちょこんと乗っている。

恵方に向かって、無言で太巻きを食べると良いことがあると言われていたが、この太巻きは既に包丁が入っている。福を巻き込む太巻きも、これでは縁が切れてしまう。

「節分、三人で来るんでしよう。帰りに寄りなさいよ」

「舞ちゃん、蕎麦できたよ」

レードルの油を切った店長が、温かい蕎麦の上にかき揚げを乗せた。弾けながらつゆを吸い込む音がカウンターにも届く。自然と口の中に唾が溜まってくる。

「いただきます」

大晦日にきれいに割り箸を割った西川くんの手を思い出した。わたしも長い指を真似て、勢いをつけて上下に割ってみた。

ちくりと指先に痛みが走る。また割り箸の持ち手が中途半端に折れてしまった。倫子さんが窓際の席で調味料の補充をしている。あの時、西川くんが座っていた席だ。

蕎麦を一口嚙り、斜めに削ぎ落とされた箸を持ち直し、かき揚げを崩した。ほろほろと崩れる帆立は身が甘く、深みのあるだしが口いっぱいに広がった。

「うちの賄いはどうだい？」

うまく笑えなかったわたしはこくりと頷き、美味しいと言呟いた。顔をあげると、節分のボスターが目の前にあった。金色の法衣姿の僧侶が、升に入れた豆を参拝客にまいている。

深大寺の節分会では僧侶や有名人は「鬼は外」とは言わない。ご本尊の元三大師様が鬼の姿とな
って、人間の邪気や魔物を追い払ってくれるからだ。

小学生の頃、わたしは節分会でもらった、赤い福豆の袋を握りしめ、深大寺の本堂に掛けられた
鮮やかな五色幕に誓った。

「わたしがお母さんを鬼から守る！」

細かい刺繍がほどこされた五色幕が、二月の風に揺れていた。

返却された本をワゴンに載せ、背表紙に貼られた日本文学の図書記号を、五十音順に並べる。図
書室の貸し出しが多いのは、長期の休み前と、文化の日に開催される読書感想文の時期だ。

隣で恵理ちゃんが本棚で倒れた本を直してくれている。図書委員ではない恵理ちゃんも、私の仕
事を見ているうちに、本棚の整理や剥がれかけたラベルのチェックを覚えた。

手伝いを口実に、わたしたちは本棚の影に潜んで、ある作戦を練っていた。

図書室は他の教室よりも温度設定が低く、Pタイルの床から冷気があがってくる。女子は制服の
中に紺色のベストを着込んでいる。

「はつきり来てほしくないって言えないの？」

「さすがにそれは言えないよ。お母さんが悲しむもの」

西川くんを卒業式に出席させない作戦は、暗礁に乗り上げていた。

当事者のわたしに興醒めするぐらい、西川くんは連れ子の卒業式に感傷的になっている。校舎の横には、おあつらえ向きに桜の木が並んでいる。デジタル一眼レフカメラを新調し、卒業式のあとは三人でホテルのランチビュッフェに行く予定らしい。

「舞ちゃん、俺、泣くかもしれない」

勝手に泣いてろ。わたしは見えないようにシニカルな笑いをうつすらと浮かべていた。

母も入学式に買ったスーツのサイズが合わなくなったので、新調しなければならないと嬉しそうに言い訳を並べていた。

「父親としての初めてのイベントだから、楽しみなだろうね」

「それは西川くんの勝手な妄想だよ」

家族になったのだから、行事に参加するのは当たり前のことだ。それは自分でもわかっている。そもそも、わたしは母と西川くんの結婚を反対している訳ではない。反対はしていないが、諸手を挙げて喜んでもいない。

ではなにが、わたしの中で終始、引っ掛かっているのだろうか。

「新居のエレベーターに閉じ込める」

「お母さんも出席できないよ」

「学校に爆破予告を流す」

「恵理ちゃん、過激派」

母を完全に盗られたわけでもない。西川くん自身になにか大きな問題があるわけでもない。この先、どう転ぶのかはわからないけれど……。

裏表紙のバーコードラベルを確認していた恵理ちゃんは、本棚の隅に溜まった埃を指先で拭いた。「でも、恵理のママは羨ましいって言っていたよ」

「西川くんが？ 全然格好良くないよ」

ショップオーナーの恵理ちゃんのパパは、母と比べてスタイルも良く、服装や髪型、メイクもイけている。そんな恵理ちゃんのパパが、冴えない西川くんのことを羨んでいるのが信じられなかった。

「精神的安定が違うって言っていたよ」

「意味わかんない」

精神的安定という五文字がわたしたちには難しすぎた。恵理ちゃんも使い慣れていない五文字を呟く声が、舌つたらずでぎこちなかった。

心もとない恵理ちゃんの声が、いきなり明るく弾んだ。

「西川氏をどうしても阻止したいなら、やっぱり下剤じゃない？」

「恵理ちゃん、怖い！」

深夜のダイニングテーブルで、わたしはすり鉢に入れた二錠の下剤を、ゆっくりとすり潰す。

卒業式欠席。

何度も同じ呪文を唱えながら、粉末になった下剤を白い清潔な紙に大事に包む。翌朝、新居のダイニングに座る西川くんのシリアルに、粉碎した下剤を入れる。新しいスーツを着た母の横で、西川くんは差し込むような痛み、のたうち回るだろう。

「絢さん、舞ちゃん、先に行つて。すぐに追い付くから」

規定量の倍を入れた下剤は、ダイレクトに大腸を直撃するだろう。何度も同じ波で襲いかかる腹痛に、西川くんはトイレから出られない。念のために、外側から鍵をかけておこう。わたしの計画は完璧に実行される。

できるはずもない妄想を楽しみながら、わたしは「日本文学」の棚に阿刀田高の短編集を並べた。斜め前の「言語」の本棚の前を、柏木が歩いている。

毎週金曜日の本を紹介するコーナーの取材か、それともラジオドラマの台本の下調べに来たのだろうか。確かな足取りと、正しく制服を着た様子が、いかにも柏木らしい。

クラスで目立っている男子は、ワイシャツのボタンを二つ外し、髪にワックスを付けている。柏木の髪は手を加えずにサラサラのままだ。銀縁の眼鏡の奥にある、切れ長の目力が強いことを、わたしは知っている。

視線の先を辿った恵理ちゃんが、背表紙が破損した本を数冊、ワゴンに入れた。

「この本、直した方がいいよ。舞ちゃん、声優ラジオ聴きたいから、先に帰るね」

目配せをした恵理ちゃんの大きい目と、わたしに手を振る柏木の顔が同時に視界に入る。短い挨拶

拶を交わした恵理ちゃんは、リュックを背負ってカウンターの方へ歩いていった。

柏木の手には、放送部のロゴマークを印刷したクリアファイルがある。いつも原稿を渡す時、きちんとクリアファイルに入れてくれる。彼の行動は常に折り目正しい。

腕時計と、ワゴンの中の整理すべき本の冊数を確認し、声のトーンを一つ下げる。

「金子、台本のこと、少し話してもいいか？」

「大丈夫だけど」

クリアファイルの中には、ラジオドラマの台本が入っていた。放送部は毎月、五分以内のラジオドラマを制作している。部長の柏木は、ほとんどの台本を担当している。

日本文学と西洋文学の本棚の間に身を潜め、台本を流し読みする。この前、読ませてもらった第一稿と比べて、今回はト書きが事細かに書かれている。

体育館の重い扉が開く音。

ドリブルの音が、監督のホイッスルで止まる。

バスケットシューズのスキル音が再び鳴り響く。

体育館の練習のシーンのあとに、主人公が自宅でマスコットを縫うシーンに移り変わる。慣れない手作業の中、針が刺さる音と、「痛い」と叫ぶ小さな声が続く。

「ラストが今ひとつ、決まらないんだ」

「確かにこの台本だと、呆気ないね。試合に勝ったのか、負けたのかも分からないし」

ラストのインパクトの弱さを、本人も気にしていた。試合途中でフェイドアウトしていく流れだと、あまりにも中途半端すぎるのではないか。リスナーに考える時間を与えるのも必要だ。その中で心のゆらぎや、二人の行く末を匂わすシーンが数行あれば、物語は成功と言えるだろう。

「結局、三回戦で負けるんだけどな」

「試合結果と、先輩と女子マネのその後も必要だよ」

「金子もそう思うか」

わたしのことを金子と呼ぶ柏木。

春からは、なんて呼ぶのだろうか。四月から入学する都立高校では、わたしは「西川舞」になる。恵理ちゃん「舞ちゃん」呼びなので、特に問題はない。別々の高校に通う柏木は、金子が西川に変わること、気付かないのかもしれない。

そもそも、わたしと柏木は卒業後に会うのだろうか。

「女子マネは告白するのか？ その告白に先輩はどう答えるのか？ この二つは気になる。ドラマの時間の制限もあるけど、せめて匂わすようなラストがほしいかな」

「そうだよな。部員にもきれいにまとまりすぎて、リアルじゃないって言われた」

頭をかいたあと、台本を人差し指の第二関節で軽く叩いた。本を紹介するコーナーの原稿や、今

まで書いたラジオドラマでも、柏木は人の意見を素直に受け止めてくれる。そこから、矛盾点や不足部分を修正し、自分がリスナーに伝えようとしているものを、きちんと残している。

「そもそも先輩はどう思っているの？」

「俺の設定では、両思いなんだけどな」

「それをちゃんと書かないとダメだよ。リスナーは柏木の脳内を見ることはできないんだからね」女子マネと先輩が両思いという設定に、わたしの心臓が数センチ跳ね上がった。柏木の台本は時々、言葉足らずで登場人物の真意が見えないことがある。クラスメイトも、昼休みのドラマを聴きながら、結局ラストがどうなったのかと首を傾げる者もいた。特別、哲学的な内容や散文詩的な台詞を並べているわけではないが、余韻や見えない行間に潜む感情に、こだわり過ぎているような気がする。

「ありがとう。時間配分を考えて、ラストを書き足してみよう」

「楽しみにしているよ」

第二稿の台本を再び、クリアファイルの中にしまった。腕時計を確認し、塾までの移動時間を計算しているのだろう。コンビニに寄る時間を柏木は多めに取っている。

「最後の模試もひかえているし、本当は後輩に任せるべきなんだけど、この台本はどうしても書きたかったんだ」

「完成したら、受験に専念すれば良いよ。わたしが言える立場じゃないけどね」

一瞬、柏木が真顔になった。わたしが早い時期から、都立高校の推薦を受けることに、複雑そうな表情を浮かべていた。一度だけ、わたしの実力なら、十分同じ高校を目指すことができるのに、と言われた。それは母も同様だった。

「受験が終わったら、新作を書くつもりだ。高校に入ったら、Nコンもひかえているし」

Nコンとは、NHKの高校放送コンテストのことだ。アナウンスから朗読、ラジオドラマまで、六部門にわたって高校放送部の全国大会が、年に一度行われる。柏木の受験する高校も、放送部は毎年東京都の地区予選を突破している。

ワゴンを押し、図書室のカウンターまで柏木を見送る。

軽く手を振った背中では、図書室のドアを開ける前に、一度だけ振り返る。

どんな言葉で、女子マネと先輩を両思いにさせるのだろうか。

ふと、女子マネの左親指に刺さった針の痛みを想像し、自分の親指の指紋に目を凝らせた。

夜勤入りの母は、だいたい昼過ぎまで寝ている。

ベッドサイドに置いたスマホケースには、Suicaが入っている。キャラクターのペンギンのお尻がちらりと見え、母が布団の中でもぞもぞと寝返りを打った。

「行ってきます」

三学期は毎週土曜日が休みのため、今日は恵理ちゃんと秋葉原へ行く。

春から「魔界境域シリーズ」がアニメ化されるため、原作者と監督、声優のトークイベントが行われる。人気声優の小野寺さざりが主人公の声を担当し、主題歌も歌う。イベントはコスプレ、サ
イリウムの使用が許可されている。

帰りの時間を告げようとした時、ベッドサイドのピンク色の体温計が目に入った。

今朝も母は、スマホのアラームで六時に起きて検温し、二度寝をした。

小数点第二位まで計れる体温計は、救急箱に入っているシンプルな白い体温計とは違う。計測後、
スマホに送信してデータ管理ができる婦人体温計は、生理周期や身体のリズムを知ることができる。
わたしも保健体育の夏休みの宿題で、一ヶ月半折れ線グラフを引いた。

そつとドアを閉め、玄関の鍵をかける。

母が婦人体温計を付けているのは、数ヶ月前から知っていた。毎朝六時に隣の部屋からピピピッ
と電子音が聞こえる。最近では音の前に目が覚めるようになってしまった。

ドレッサーの上には、パソコンから出力したグラフが伏せられている。起伏のないグラフの、排
卵日の赤い文字が、目の裏にいつまでも焼きついている。

母は今年で三十九歳になる。母も西川くんも子供が欲しいのだろう。年齢的に言えば、次の出産
がきつと最後なはずだ。

京王線つつじヶ丘駅の新居は、今よりも一部屋多い。

赤い文字の十ヶ月後に産まれてくる、わたしの妹か弟。

その小さな顔がまったく想像できなかった。母に似たくつきり二重の女の子か、西川くんのような垂れ目の男の子。男女が逆になる可能性もある。

西川くんだけでも気が重いのに、家の中に新しい家族が加わることに違和感をぬぐい切れなかった。赤ちゃんって、どう抱っこすれば良いのだろうか。空っぽの両腕を軽く揺すってみた。

昨日、学校帰りに、初めてサロンと呼ばれる美容室に行った。

担当した男の美容師は、千鳥格子のハンチングを被り、ネームプレートにはチーフと書かれていた。フェイスラインに沿って、華奢な造りの銀色のハサミが入る。毛先を滑らせるように切る指先が、無防備な襟足に触れた。

前下がりのショートボブに、眉毛の上の位置でいさぎよく切った前髪。

ケープを取った彼は、わたしの髪型を『どの角度から見ても頭の形が良く見えるんだよ』と慢げに語った。鏡の中の視線は、わたしの頭を通り過ぎて、自分の顔の角度を変えては、何度もハンチングのつばを直していた。

髪を洗ってくれたのは、甘酸っぱい匂いの女の美容師だった。

シャンプーのすすぎ残しか、切り揃えた毛先のラインか分からないが、今でも襟足が気持ち悪かった。

今回の割引券をもらったが、あの美容室にまた行くことはないだろう。

調布パルコ前で、恵理ちゃんと待ち合わせをした。全力で抱きついてきた恵理ちゃんは、スモー

キーピンクのコートを着ている。

「舞ちゃん、髪の毛すごく似合う！」

羽田空港行きのバスやタクシーが、目の前のロータリーを周回する。調布駅周辺は、再開発のため、わたしが生まれた年に駅が地下に潜った。百貨店やシネコン、家電量販店が立ち並び、変わりゆく街の様子は、わたしたちの成長をも追い越していく。

調布駅の長いエスカレータを恵理ちゃんと降りる。壁や波打つ天井のパイプ、エスカレータの手すりも、すべて淡いピンク色に統一されている。恵理ちゃんのAラインのコートが、エスカレータと一体となった。

ホームでは、いきものがかりの「ありがとう」が流れ、二人でいつも笑うように歌っている。

黒のモッズコートにスリムデニムを合わせたわたしと恵理ちゃんは、傍から見ると中学生のカッブルのようだ。一度、原宿を歩いている時に、めざましテレビのクルーに声を掛けられたことがある。翌日、テレビの前で待機していたが、結局わたしたちのインタビュは放送されなかった。淡い期待は数分で消え、今日の占いの順位も頭に入らなかった。

新宿で中央線に乗り換え、総武線で秋葉原へと向かうルートは、足取りも軽くなる。恵理ちゃんは、まるでブーツの踵に羽が生えたようにだと、目を輝かせていた。

秋葉原のビルの看板に描かれた、美少女の胸の大きさに、いつもドキドキする。路面店のショーケースには、精巧に作られたアニメや特撮のフィギュアがポーリングを決め、カプセルトイの自動

販売機の列は、駅前のコインロッカーのようだ。カプセルトイの横には銀行のATMもあり、一万円札対応の両替機を見たのも秋葉原が初めてだ。

イベントの前に、マクドナルドでバリューセットを食べる。わたしはベーコンチーズバーガーがお気に入り、ドリンクはストロベリーシェイクと決めている。わたしと恵理ちゃんは変顔をしながら、マックシェイクを飲むのに夢中だ。

通りに面したカウンターに座り、おちょぼ口でシェイクを吸い込んでいると、コンタクトレンズ店のティッシュを配っているお姉さんが、怪訝な目でわたしたちを遠巻きに見ていた。

チヨコレートシェイクを飲んでいる恵理ちゃんは、フィレオフィッシュの包み紙をくしゃくしゃに丸めた。

「舞ちゃん、聞いてよ。村上さんと橘さん、変な噂話しているんだよ」

わたしも恵理ちゃんも、BL好きの二人から避けられている。BLを否定しているわけではないが、そもそも男同士の恋愛物に共感ができなかった。人それぞれ、好みやこだわりはある。現に、わたしと恵理ちゃんも、アニメやライトノベルの中で、好きなキャラクターが違っていることは、さらにある。

「噂話って、もしかして、クラスの男子？」

「違う、違う。わたしと舞ちゃんが百合だって、コソコソ話していたの」

百合とは女性の同性愛を扱うジャンルのことを言う。BLと同じように、漫画やライトノベル、

アニメや同人誌でも、百合は男女とも人気がある。深夜アニメでも、いろんなタイプの女の子たちが登場する、ゆるい日常を描いたドラマが人気だ。ちなみにわたしも恵理ちゃんもBL同様、百合物も共感できなかった。わたしたちはファンタジーやSFの中に描かれる、王道の男女の恋愛物が大好物だ。

「あの人たちの考えそうなことだね」

「恵理、槇野さんからあまり良く思われていないじゃない」

同じクラスの槇野さんはテニス部のレギュラーで、バレー部の桂巻くんのが好きだった。しかし、桂巻くんは恵理ちゃんに告白をした。クラスメイトにしか思えないと、恵理ちゃんは「ごめんなさい」と頭を下げた。

振られた桂巻くんが可哀想と、槇野さんは恵理ちゃんの悪口をラインの裏グループに書き綴っているらしい。クラスの下に位置する村上さんと橘さんも、さすがに裏グループには入っていないが、移動教室中に囁かれる、恵理ちゃんの悪口に、便乗していた。

ヒートアップした二人は、わたしと恵理ちゃんがレズビアンだから、桂巻くんが振られたと、勝手にセクシナルな百合小説を書いているようだ。恵理ちゃんも実際の原稿は読んでいないが、他のクラスのBLと百合好きのグループで閲覧されているようだ。

「昨日も掃除当番の時、わざと聞こえるように話していたんだよ」

「どうせあの二人とは違う高校に行くんだから、無視した方がいいよ」

悔しい恵理ちゃんの気持ちはわかる。わたしも自分と恵理ちゃんの絡みを匂わせるようなことを言われたら、怒りを隠し切れないだろう。わたしたちはセクシナルなことに關しては、驚くほど奥手だった。だからこそ、あの二人の挑発に乗るのは無意味だと冷静に判断した。

「腐女子の考えることは分らないよ。自分たちの萌えだけを追求していれば良いのに」

摘んだポテトをリスのように食べている恵理ちゃんは、最後に頬を膨らませた。さっきの変顔とは大違いだ。きつと、村上さんたちは恵理ちゃんが羨ましいのだろう。わたしだって、ベビーフェイスの恵理ちゃんの外見に憧れることがある。

「恵理ちゃん可愛いから、やっかみもあると思うよ」

「違うよ。村上さんたちは舞ちゃんと柏木のこと羨ましいだよ」

心臓が鳴った。いつも柏木が図書室に来たら、恵理ちゃんは先に帰る。恵理ちゃんなりに柏木に氣を使ってくれていると思っていたが、なぜ話が村上さんたちにまで及ぶのだろうか。

「柏木は、關係ないんじゃないの？」

「關係あるよ。大有り。舞ちゃん、自覚なさ過ぎ。天然すぎる」

空になったポテトの袋を再び、乱暴に丸める。少し不機嫌になった恵理ちゃんは、足取りも軽く、ゴミをそれぞれのボックスに分別した。

天然の二文字が、わたしの背中をくすぐらせた。

イベントは早い時間で整理券の配布が終了し、客層は七割が男で、三割が女だった。会場に入る

や否や、体育館の用具入れのような臭いが充満していた。思わず鼻を摘んだが、すぐに空調が最大メモリで効き始めた。

恵理ちゃんは今日がコスプレデビューだ。会場が用意した女性更衣室には、既に先客がいた。水色のウィッグをかぶった女の子が付けている、ロールオンタイプの制汗剤の匂いが、会場の異臭を忘れさせてくれた。

誰かの忘れ物だろうか。未開封の汗拭き用アルコール入りウェットティッシュが、テーブルに置き去りにされている。それを見た恵理ちゃんが一瞬、眉をしかめた。

スーツケースには、主人公の彩水（あやみ）の衣装がある。恵理ちゃんは小学五年の頃からミシンを使い、最近アニメやゲームのキャラクターの衣装を作っている。

母親の取引先から入手した布地と、アンティークのボタンは、イタリア製だ。ターコイズブルーのバルーンワンピースは、既製服と見紛う完成度だ。膨らんだパフスリーブの袖や、プリセンスラインの裾から覗く、水色のオーガンジーのパニエも、彩水のイメージそのものだった。

アニメ告知の上映後、スタッフとキャストのトークイベントがあり、小野寺さざりが鼻にかかった甘い声で主題歌を歌った。後ろのスクリーンでは、彩水が魔鏡に呪文を唱え、翡翠色のたてがみの一角獣の唯流愛（いるあ）が溪谷を走った。武器を持たない彩水は、自らの呪文で五色の水晶を作る。

わたしと恵理ちゃんは彩水のシンボルカラーである、水色のサイリウムを振った。魔界境域シ

リーズには、男性キャラクターの葉空（はそら）が登場する。敵対する一族の二人は恋に落ちる。長身の葉空はオリブグリーンのベストに、クラシカルな乗馬風ズボンを穿いている。ウェーブのかかった栗色の髪は肩まで伸びている。

画面に映った葉空の横顔に、女性客から悲鳴があがった。わたしも活字でしか知らなかった二人が動き、声を聴いた瞬間の感動は忘れられなかった。彩水の成長や仲間たちとの絆、葉空とのすれ違いを春から毎週深夜枠で観られる。

撮影会で恵理ちゃんは、デジタル一眼レフを持つカメラマンからたくさん写真を撮られた。写真データはXのDMを通して送られ、インスタグラムには「イイネ」のハートマークが増える。コスプレ写真用のオンラインアルバムの空き容量は減っていく。

恵理ちゃんは今年からコスプレイヤーとして本格的に活動する。新宿で中央線に乗り換えた時に、一緒に参加しないかと誘われた。

「舞ちゃんは背も高いし、大人っぽいから、葉空先輩が似合うよ」

葉空のコスプレをやると言えば、器用に彼の衣装を作ってくれるだろう。期待を込めた大きな目にせがまれたが、わたしは活字やアニメの中の愛しいキャラクターたちを、自ら演じる気にはなれなかった。葉空のコスプレをしていたお姉さんは、完全に彼になり切っていた。罎に一族のエンブレムを象った、グレートソードを構えるポーズも完璧だった。

「わたしはいいよ。人前に出るの苦手だし」

「もったいないよ。舞ちゃんは雰囲気もあるし、小説も書けるよね。レイヤーで字書きさんって格好いいじゃん。P i x i vだって、読者がどんどん増えているのに」

カーブを描いたマスカラが、瞬きを繰り返している。最初は図書委員として、新刊の紹介を書いていた。その頃から、ノートの隅にキャラクターを描く感覚で、自分の中に広がる世界を、思いつくまま文章にしていた。

大正時代、逢う魔が時に、未知な力を得た三姉妹が、妖鬼と戦うファンタジー小説だ。実は末っ子の鞠江（まりえ）は恵理ちゃんがモデルだ。

「あんなの小説なんて言えないよ。それにラノベのファンタジーや異世界も、散々書き尽くされているし」

「でも、柏木だって面白いつて言っていたよ」

P i x i vにアップしているわたしの小説を、柏木も読んでいる。更新がわかるようフォローをし、小説のシリーズにもブックマークをしてくれている。

ラジオドラマや学校ニュースなど、彼は文章がうまい。最初は自分の小説を読んでもらうのは、気恥ずかしかったが、書いた作品に反応をもらうのは、正直に嬉しかった。

二期の進路相談の前に、歯科医の次男である柏木から、大学は放送や映像で有名な大学を目指すとかされた。てっきり歯学部に進学すると思っていたわたしは、彼の選択に驚いた。四歳上の長男が、父親のあとを継ぐ。柏木の将来の分岐点には、兄が立っているのだろう。

金子は将来、なにを目指すんだ？

その質問を、わたしはのりくりりとかわした。恵理ちゃんは小説を勧めてくれたが、本格的な創作なんて最初から無理だと諦めていた。それは母に要らぬ心配をかけないため。目の前の安全な直線を、ただひたすら歩き続ける。

撮影会が終了し、イベント慣れしたコスプレイヤーたちは更衣室へと向かった。恵理ちゃんがメラマンと名刺交換を終えた時、二人連れの大学生風の男に声を掛けられた。

「このあと予定入っているの？」

「四人でカラオケ行かない？ 二人ともご飯まだだよね」

イベント終了時間は十八時だ。十六歳未満は条例で、十八時以降はカラオケボックスの入店は禁止されている。しばらくカラオケから遠ざかっていたわたしたちは、互いに顔を見合わせた。心細げな恵理ちゃんをかばうように、二人の前に立ちはだかった。

「わたしたち、中学生だから、この時間はカラオケボックスには入れません」

「それに門限もあるし」

中学生という言葉に、彼らが一瞬、反応したのが分かった。細みのコートに、髪に動きを出すようにセッとした二人組は、メラマンの中でも目立っていた。一人は上質の革製のボディバッグに、ガンダムのジオン軍のキーホルダーを付け、もう一人はわたしたちの知らない、アメコミのキャラクターをぶら下げている。

「俺たち大学生だから、保護者ってことで入れるよ。救世主召喚シリーズとタイアップした部屋もあるし」

「門限があるなら、一時間だけ付き合ってよ。ハニートースト、食べよう。奢るからさ」
知らない男の人には付いていけないように。

幼稚園の頃から厳しく言われていることを、わたしたちはきっちりと守っている。中学三年で門限は十九時となり、母が夜勤の時や、恵理ちゃんママがデザイナーと打ち合わせで遅くなる時も、門限を破ることはなかった。

「舞ちゃん、どうする？ ママは今日、展示会の打ち上げで遅いんだ」

恵理ちゃんはわたしに選択肢を委ねた。

いつもは自分でも呆れるぐらい慎重だった。今まで羽目を外すことに無縁だった。

カラオケに行けば、門限を過ぎるけれど、母や恵理ちゃんのママに黙っていれば大丈夫、と甘い誘惑に駆られた。アニメの救世主召喚シリーズとコラボした部屋や、自分ではまず頼まないハニートーストも魅力的だった。

母だって、金曜ロードショーでジブリの映画と一緒に観ようと約束をしていたのに、西川くんと二人で居酒屋へ行ったのだ。エンドロールが流れていた時、窓の外を見ると、西川くんが商店街の交差点で信号待ちをしていた。

さらに、自己紹介の延長線上で聞いた大学名にも興味がわいた。彼らが通っている大学は、柏木

が志望している大学だ。わりと自由な気質の芸術学部は、新鋭の映画監督や脚本家、写真家を数多く輩出させている。

その一方で、ノリの軽い彼らに不信感を拭い切れなかった。どこかで男の人が恐かった。

「わたしたち、やっぱり帰ります」

「救世主召喚シリーズの部屋、来週で終わりなんだよ。付き合ってよ」

「ちゃんと駅まで送るからさ、行こうよ」

ジョン軍から軽く肩を叩かれた時、恵理ちゃんがわたしの手をぎゅっと握った。

わたしがしっかりしていれば大丈夫。

安心して、と恵理ちゃんの手を強く握り返した。

彼らは受付や、メニューの決め方もスマートだった。キャラクターのイメージカラーのソーダフロートには、書き下ろしのコースターが付いてきた。厚切りハニートーストの上に、生クリームとフルーツ、ババロアで作った雪だるまがちょこんと載っている。

ジョン軍が端末で曲を選び、アメコミが追加注文をした。部屋の壁には、救世主召喚シリーズのイラストやメカが一面に貼られ、テーブルには特典として、キャラクターの団扇が人数分置いてあった。

ピザやパスタを電話で頼み、彼らは交互に歌い始めた。声量もリズム感もある二人は、難しい高音の曲も歌いこなしていた。恵理ちゃんがタンバリンを叩き、わたしはスマホの時間を気にしながら

ら、ピザにタバスコをかけた。今年で二十歳になったという二人は、シークワサーサワーと酎ラ
イムを飲んでいる。

ジオン軍がピザから伸びるチーズを器用に絡めながら、話しかけてきた。わたしの目の前には、
デジタル化されたカラオケのリモコンが光っている。

「なにか歌わないの？ 時間もったいないよ」

「先に曲、入れて下さい」

「舞ちゃん、せっかくだから一緒に歌おうよ」

アメコミからナポリタンを取り分けてもらった恵理ちゃんは、ピーマンを箸で摘んでいる。割り
箸の上の部分が折れて割れていた。

二人で学校帰りにカラオケに行く時は、時間の許す限りアニソンを歌い続けている。元々、わた
しも恵理ちゃんも人見知りをしない方だが、特別愛想も良い方ではないので、初対面の大学生を前
に、消極的になっていた。

この中から歌って欲しい曲を選んで下さいと、二、三曲候補をあげた。彼らが選んだのは、三年
前に放映していた青年誌原作の、ラブコメの主題歌だった。画面にはグラウンドで野球の居残り練
習をする男子と、彼を校舎の窓から見つめる女子の映像が流れていた。

着ることのないセーラー服を眺めているうちに、四月からカラオケ映像のような高校生活を送れ
るのだろうか、脳裏をよぎった。そんな思いに一瞬戸惑っている自分がいる。来週のお昼の校内

放送は、いよいよ柏木の書いたラジオドラマが放送される。

「二人とも歌、うまいね。小野寺さざり、歌える？ 俺、メツチャ好きなんだよね」

「さざちゃん、今日も可愛かったよな」

小野寺さざりの曲は、わたしたちはだいたい歌える。アメコミが端末で小野寺さざりと検索し始め、隣から恵理ちゃんが不安げな表情を投げかけてきた。

「わたしたち、トイレに行ってください」

「飲み物、追加する？」

あと十分で約束の一時間だ。トイレに行き、小野寺さざりの曲を歌い、ドリンクを飲んだら、ちょうど帰る時間だ。

「カルピスソーダとグレープフルーツジュース」

「オッケー。曲、適当に選んでおくね」

二人揃ってエレベーター横のトイレに入った。

手洗い場には、長い髪の毛と使用済みのあぶらとり紙が、無造作に落ちていた。ドアが開いた個室のゴミ箱には、ストッキングの袋がそのまま捨てられている。先ほどのイベント会場の更衣室とは大違いだ。化粧品落としのシートやコットンパフ、つけまつげなど、コスプレイヤーたちは自分のゴミをきちんと持ち帰っていた。

「恵理ちゃん、もう帰ろうね」

「うん。一曲でやめようね」

足元がおぼつかない二十代前半の女の子が、友達に肩を借りながら入ってきた。入れ違いにわたしたちは彼らの待つ部屋へと戻った。

ジオン軍がすぐに端末のスタートボタンを押した。

ソロライブの映像が流れた。この曲は二人で何度も歌っている。オリコン三十位内にランクインされたため、柏木がめずらしく校内放送でかけてくれた。

カメラがサポートメンバーのギターソロから、小野寺さざりをピンで捉える前に、カルピスソーダを飲んだ。

舌に違和感が残る。

喉を伝うカルピスソーダの甘さのあとに、薬の苦さが被さる。弱いはずの炭酸がぴりぴりと喉を刺激し、急激に頬が赤くなるのがわかった。

グラスのふちに鼻を近付け、匂いを吸い込んだ。

「ほら、始まるよ。歌って、歌って」

「これ、アルコール入ってますよね？」

「やべっ、俺、カルピスサワーとグレープフルーツサワーで頼んだ」

隣から恵理ちゃんの声が聞こえて来なかった。歌う前にいつも喉を潤す恵理ちゃんは、ジュースだと思い込んだサワーを、グラスの半分まで飲んでしまった。

テーブルの縁からするとグラスが落ち、ガラスの碎ける音が室内に響いた。床に飛び散ったガラスが、タイルの上で光っている。恵理ちゃんの身体が横に倒れ、白いニットのワンピースの胸が上下に動いた。

「ちょっと、彼女大丈夫？　もう酔ったの？」

「具合悪いなら、どこかで休んでいく？」

気管が閉じ、どんどん呼吸が浅くなる。喘息の発作が始まった。

「この子、アルコール過敏症なんです。洋酒入りのチョコレートを食べただけで、呼吸困難になるんです」

恵理ちゃんがピーマンの欠片を吐いた。

ボルドー色のソファアの肘当てが、少量のナポリタンとハニートーストで汚れる。ミカンの粒やイチゴが床に零れた。

「うわっ、汚ねー。俺たち、帰るわ」

「そういうことは先に言ってよ」

耳を疑った。

アメコミはテーブルの上のスマホとコースターをそそくさとデイバッグにしまった。中から小型ビデオカメラが見え、わたしは身体が凍った。ジオン軍が団扇をばたばた仰ぎながら、「はずれ」と手を振って出ていった。

ソファから今にも崩れ落ちそうな恵理ちゃんの頬が赤くなる。イベント会場の更衣室にあった、アルコール入りの汗拭きウエットシートは未開封だった。恵理ちゃんは狭い空間で、ヘアースプレーや化粧品を吸い込んだだけで、気化したアルコールによってアレルギーの発作を起こす。

「吸入器は？」

苦しげに眉を潜め、何度も首を横に振った。

「もしかして、忘れたの？」

衣装や無香料のメイク道具を入れたスーツケースには、いつも携帯している吸入器のポーチが入ってなかった。小刻みに震える身体がテーブルに当たり、ケチャップまみれのナポリタンの皿が横に揺れた。

救急車を呼ばないと。

ガタガタと震える手でスマホカバーを開き、電話のアイコンをタップした。

数字キーの下に、連絡帳が表示されている。登録した名前が、あ行から順に並ぶ。救急車を呼ぶ前に、誰かに連絡をした方がよいのだろうか。それとも、インターフォンで店のスタッフをすぐに応えさせるべきか……。混乱した頭でどんどん名前を飛ばしていく。

母は明日の九時まで仕事だ。職場に連絡などできない。恵理ちゃんママの連絡先を、わたしは知らない。

担任の伊藤先生は論外だ。十八時以降にカラオケボックスに入店し、未成年なのに飲酒した。二

人とも高校の推薦を取り消されるだろう。

柏木に連絡なんてできない。彼は今頃、塾でコンビニのおにぎりを食べているはずだ。明日が受験前の最後の模試と言っていた。そもそも、初めて会った大学生に誘われて、カラオケボックスに行ったなんて、言えるわけがない。

西川くん。

数秒、手が止まる。

恵理ちゃんの首がどんどん赤くなり、何度も激しく咳き込んだ。

わたしは名前の下の発信マークを見つめた。

その日、初めて西川くんに電話をした。

20110727

救急隊員が、恵理ちゃんの生年月日を確認した。

無線で受け入れ先を確認している中、他の隊員が酸素吸入を受けている恵理ちゃんの血圧や脈拍を計っている。

西川くんがスマホの暗証番号に、先ほど聞いた誕生日の四桁の数字を入れる。

ロックが解除され、画面には学校指定のピーコートを着た恵理ちゃんとわたしがいいた。

大学時代の友だちと飲んでいた西川くんの行動は早かった。まずは店員に症状を伝え、救急車の要請を依頼すること。すぐに店から出る準備をするよう言われた。

十五分後に、西川くんが店に駆け付けてくれた。ストレッツチャーで恵理ちゃんが運ばれている間、カウンターで支払を済ませ、何度も頭を下げていた。わたしは二人分の荷物を救急車に運んだ。

自分たちが無力で、幼稚であると思ひ知らされた。

受け入れ先が決まり、救急車のサイレンが鳴る。

AEDとモニターの横で、西川くんはスマホの連絡先から、恵理ちゃんママを探し当てた。運転席の無線や荒い呼吸の中、数回目のコールのあとに、電話が繋がった。

「泉恵理さんのお母様ですか？ いきなりの電話、失礼します。西川と申します。金子絢の――」

最初は怪しんでいた恵理ちゃんママも、母の名前を聞き、声色が変わったのが気配で分かった。「そうです。今、恵理さんと娘と一緒になんですが、恵理さんが喘息の発作を起こしまして、今、救急車で病院へ向かっています」

娘。

西川くんの口からさらりと出た言葉に、わたしはカバンの持ち手をぎゅっと握りしめた。戸惑い

が一気に押し寄せ、娘と呼ばれた恥ずかしさが後ろからついて来た。まだ母と籍も入れていないのに、と抗議する自分がいる。驚きと小さな怒りをどこにもぶつけられず、カバンを胸に引き寄せた。ポケットに付けた、キャラクターの缶バッジが、カツンと何度も当たる。

「今、娘に代わりますね」

わたしは小刻みに震えながら、だらしなく項垂れていた。恐る恐るスマホを受け取ったわたしの目は、きつとジグザグに泳いでいるのだろう。手の震えを悟られぬよう、右手で左手首を強く掴んだ。

か細い声が、酸素ボンベの音に紛れる。

「おばさん、ごめんなさい」

「舞ちゃん、恵理が迷惑を掛けたね。私も今から病院へ向かうから。ごめんね」

上品なママの声は、電波の状態が悪いためか、通話が途切れ途切れになっている。電話越しに何度も謝られ、泣きたくなった。謝らなければならないのはわたしの方なのに。伝えたい言葉が浮かんでこなかった。

展示会の打ち上げを欠席し、恵理ちゃんのママは病院へ駆け付けてくれる。自分たちの軽卒な行動で、周りの大人に迷惑をかけた。しかも、西川くんカラオケ代まで払わせてしまった。明日、母になんて説明をすれば良いのだろうか。

通話を終えた西川くんが、スマホの画面をコートの袖口で拭いている。スマホの写真は、十二月

に表参道のイルミネーションで写したものだ。シャンパンゴールドの光の中で、お揃いのタータンチェックのマフラーが滲む。卒業を前に、わたしたちはどこか浮かれていた。

「ごめんなさい、西川くん」

「絢さんには、あとで連絡をしよう。今の時間帯は、夜勤のナイトケアで忙しいからね」

またにも西川くんの顔を見られなかった。ビニールレザーの長椅子に座り直した瞬間、隣から微かに居酒屋の臭いがしてきた。けれども、アルコールの臭いがまったくしなかった。大好きなビールを、一口も飲まなかったのだろう。

酸素マスクを付けた恵理ちゃんと目が合った。黒いマスカラが溶けて、パンダ目になっている。

「君たちが無事で、本当に良かったよ」

火照った両手を握り締めた時、霞んだ視界の中で、恵理ちゃんが一回、深く頷いた。

白く曇った酸素マスクが、上下に動いていた。

アームに備え付けられた六角形の無影灯が、深い光を放っている。

救急救命室では、運ばれた患者がカーテンで仕切られたベッドで、処置を受けていた。救急車で酸素吸入をしていたため、恵理ちゃんのサチュレーションと呼ばれる数値は、上昇していった。

救命室の廊下で、西川くんから紙バックのいちごジュースを受け取った時、恵理ちゃんママが夜間通用口から現れた。コートに大判のストールを羽織ったママは、西川くんに何度も頭を下げた。

余程急いでいたのだろう。バッグに入れた財布が開いたままになっており、小銭が丸見えだ。

「舞ちゃんも本当にありがとう」

強く握るママの手は、ネイルを施した爪が痛かった。まとめ髪が崩れ、鼈甲のバレッタから髪が数本ほつれている。頬にできたシミと、いびつになった眉を見て、わたしはこらえていたものが再び溢れてきた。

打ち上げをキャンセルし、化粧直しもしないで、ママは一番に駆け付けてくれた。

恵理ちゃんが羨ましかった。

すっと落ちた不安や寂しさが、涙となってぼろぼろと頬にこぼれる。

母に無性に会いたかった。

恵理ちゃんのママの、コートに残るスパイシーな香りに抱きしめられた。もう一人の自分が、鳴咽を漏らしたり、号泣することを我慢しろと、天井から指令を出している。涙と鼻水でコートやストールを汚さないよう、わたしはひかえめに泣いた。

恵理ちゃんは救命室で追加の酸素吸入を受け、一日入院するため、病棟へ移された。看護師が応急処置のステロイドと点滴の準備をしている。ママは自動販売機からエナジードリンクを買った。

ガタンと自動販売機が鳴った時、西川くんが静かに呟いた。

「舞ちゃん、今から絢さんに電話を入れるから」

救命救急室に新たな患者が搬送された。

母の驚きは大きかった。

西川くんの説明が終わらないうちに、電話を代わるよう要求してきた。わたしと恵理ちゃんの安否を何度も確認し、何をやっているのかと怒られた。母に心配をかけてはならないと、いつも頭に置いていたわたしは、自分たちの行動を悔いた。

通話を切り、西川くんスマホを返した時、また涙が零れた。家まで送ると言ってくれた背中が、初めて広く感じた。

西川くんが住んでいるアパートは、うちとは逆方向なのに、わざわざ調布駅から団地の入り口まで送ってくれた。

幼稚園の頃から、眠れない夜など、ほとんどなかった。母が夜勤の時も、魔法や冒険の物語を考えているうちに、睡魔が空想の世界へと誘ってくれた。

ベッドの中で、天井の豆電球を一晚中眺めていた。簡単に騙された自分たちの幼さが情けなく、彼らにも怒りが込み上げてくる。最悪な状況を想像しては、身体が芯まで冷たく強ばった。

結局、その日は一睡もできなかった。

日曜休みの西川くんが、母の勤務が終わる頃、施設に迎えに行ってくれた。

そろそろ二人が帰ってくる時間だ。前日の電話で覚悟を決めていたはずが、団地の緑色のドアが

開いた瞬間、わたしは緊張と心細さから、その場で一步、後ずさった。

叩かれるかもしれない。咄嗟に身構えていたわたしは、五センチ身長の高い母に、きつく抱きしめられていた。

「なぜ、私に真っ先に連絡してくれなかったの。なぜ、私が最後のよ」

恵理ちゃんママとは違う、いつもの母の匂いがする。頭部のつむじの生え際が数ミリ白くなっている。わたしはサロンで髪を切り、母は自宅の狭い洗面所で、髪を染めている。後頭部や襟足がうまく染められないため、いつもわたしが刷毛で白髪の目立つ箇所を撫でつけている。

顔をあげると、母の後ろにいる西川くんと目があつた。彼はなんの躊躇もなく、わたしを娘と呼んだ。昨日の恥ずかしさと動揺が、胸にあふれる。たれ目の彼は、いつものように笑っている。八時二十分が八時十七分になっている。

「本当になにもなかったの？」

「大丈夫だよ。カラオケを歌っただけだから」

ようやく母の腕から解放されたわたしは、夜勤明けの疲れた顔と充血した目に、これ以上うまく言葉が出てこなかった。鼻の奥がツンと痛くなり、涙がぼろぼろとあふれ、子供のように声を上げて泣いた。

「お母さん、ごめんなさい」

ごめんなさいと繰り返し返すことがやっとで、母の胸の中で、泣きじゃくった。背中を叩くりズムが

懐かしかった。小さい頃、寝る前に絵本を読んでもらいながら、このリズムに癒されていた。身体の中に染みついた音に、母のコートを握りしめた。毛玉ができたコートに涙と鼻水が付いた。

「舞には昔からいろいろと我慢をさせてきた。本当は私が真っ先に病院へ行くべきなのに、仕事、休めなくてごめんね」

昨日だけは母に会いたかった。恵理ちゃんが羨ましかった。

母はちゃんと気付いていたのだ。わたしが我慢や諦めを自然と身に付けてしまっていることを…

泣き止んだ頃には、お腹も空いてきた。眠れなくても、悩んでいても、空腹は時間と共にやってくる。西川くんが居酒屋のポケットティッシュを渡してくれた。

「二人とも、朝マック行こう。お腹、空いているでしょう」

準備万端の彼の前で、わたしは思いっきり音を立てて、鼻をかんだ。

週明け、わたしと恵理ちゃんの門限は十八時になった。さすがにスマホは没収されずに済んだ。

ジオン軍とアメコミは短大生を酔わせ、乱暴をし、逮捕された。彼らは大学生ではなく、二十代前半の派遣社員だった。カラオケボックスの会員証も偽造していた。警察は余罪がないか調べている。

柏木の、中学校最後のラジオドラマが放送された。

第四クォーターでシード校に二十点差をつけられた。

監督は残り三分でレギュラーの二年生を下げた。

「三年、全員入れ！」

七番の副主将が最後にスリーポイントを決める。しなやかなフォームで、手首のスナップを利かせて放たれたボールは、ゴールに吸い込まれ、白いネットを揺らした。

「終了二秒前に刻まれたスコアを、私は忘れない」

歓声と試合終了のホイッスル。

72―54で敗退。

「整列」

「ありがとうございました」

ビデオを回している父兄や、クラスメイトの声が響いていた応援席に、部員が一行に並んで頭を下げた。

「これで終わった」

先輩の引退を、身をもって感じた。視線の先の横顔を見るのも、卒団式をもって最後だろう。小学校からの親友にも、「コクらないの？」と言われ続けた。

「そんな簡単に、告白なんて出来ないよ」

三年生の卒団式は監督の挨拶から始まり、今期の成績発表、部長の挨拶、後輩からの送る言葉、主将の引継のあとに卒団生退場で終わる。

部長の挨拶は三年間の思い出や仲間との絆を語り、後輩は歌で感謝の気持ちを伝えた。主将の引継は後輩へのエールと、これからの抱負を述べた。

拍手と共に退場する卒団生。

扉の閉まる音。

三秒程の間のあとに、スクールバスが発車するアナウンスが流れる。

「ちよつと、いいか」

先輩の声が教室のスピーカーから流れる。

わたしも恵理ちゃんも、教室にいる誰もが、先輩の声に耳を傾けた。後ろからはバスのドアの閉まる音、生徒たちの笑い声が聞こえる。

柏木がどのような手法で、先輩と主人公の仲を繋ぐのだろうか。

お弁当のウィナーを箸で摘んだまま、わたしはスピーカーに集中した。購買で買ったハムローを手に持った恵理ちゃんも、ぱつくりと開いた口を閉じた。

「春休みに、Bリーグ、一緒に行かないか？」

バスケットボールが跳ねる音が聞こえ、その二秒後に主人公は小さな声で呟いた。

「はい」

静かに聞いていたクラスメイトが、一斉に歓声をあげる。わたしも恵理ちゃんも、箸とハムロールを置き、ハイタッチを決めた。

エンディングにはキャストと、キャストを演じた生徒の名前が読み上げられた。柏木の名前は、台本と監督で二回、スピーカーから流れた。

原案、編集、音響監督、音楽、協力。

キャストの次に続く名前の中には、部を卒業する三年生も含まれているだろう。協力には、同じクラスのバスケット部のマネージャーの名前と、金子舞、わたしの名前もあった。ドラマの感動と、名前を呼ばれた嬉しさに心が躍った。

制作、調布市立第二中学校、放送部。

昼休みの放送が終わった。この教室で放送部の番組を聞くのも、あと何回残されているのだろうか。

水気を含んだスポンジを絞るように、心臓をきゅーっと鷺掴みされた。目の前でハムロールを頬張る恵理ちゃんの目も、心なしか潤んでいる。

「ドラマ、良かったね。柏木、凄いね」

「うん。今までで一番感動した」

周りの生徒たちからも感嘆の声が上がる。柏木から第一稿、第二稿と台本を読ませてもらった。

思い付くままアドバイスをし、出来上がった台本は格段に良くなった。効果音や主人公の語りが入っただけで、まさしく作品に命が宿った。

台本やスタッフの力もあるが、恐る恐るBリーグに誘った副主将の台詞と、数秒後に答えた主人公の演技も素晴らしかった。放送部の一年間の集大成と言っても過言ではないだろう。

放課後、柏木の教室を訪ねよう。

ブロッコリーを頬張りながら、なんて声を掛けようかと、わたしの中にある言葉の引き出しをひっくり返した。

すでに気持ちちが加速していった。

クラスの女子内で小さな異変があった。

BL好きの村上さんと橘さんが、スクールカースト上位の長谷川さんから目を付けられた。裏ライングループ内は、受験が終わり、卒業に響かない程度に、虎視眈々と刺激を求めている。

「村上と橘、まじウザいんだけど」

いつもは体育や家庭科のグループを決める時に、村上さんと橘さんはFC東京のサポーターの子たちとつるんでいた。

長谷川さんが、村上さんたちと同じグループにならないよう、FC東京のサポーターにラインで指示を送る。

この手の問題が発生した時の空気は独特で、必然的に二人残された体育館で、先生が突貫工事のようにグループを適当に決めた。

明らかにおどおどしている村上さんと橘さんは、わたしと恵理ちゃんの後ろに並んだ。仕方ないという空気よりも、この列にしかいられないという必死さが背中から感じられる。

卒業までの一ヶ月半、村上さんと橘さんとグループを組むことになるだろう。

百合小説を今でも書いているかどうかは、分からなかった。

明け方にさらりと降った雪が、地面にわずかに残っている。北風が制服の足元をすり抜け、紺色のダッフルコートの際に付いた、水牛角のトグルを掛け直した。

深大寺門前の甘味処で、粒あんの入ったそばパンを買い、母と西川くと参道を並んで歩いた。

甘酒の香りと、醤油を煮詰めた甘じょっぱい匂いが食欲をそそる。警備員が本堂の入り口で、節分祭の入場規制を始めた。

東参道から太鼓とホラ貝の音が聞こえる。鮮やかな金色と紫色の法衣を纏った僧侶と、檀家のお練りが始まった。町内会の青年部が黒い半纏にねじり鉢巻きを締め、大きな赤い番傘を先頭の僧侶に差している。楕円形の提灯と錫杖を掲げた列は、お鈴を鳴らしながら、お祓いをした豆を舞台へと運ぶ。

茅葺き屋根の山門の階段を上った。本堂までは節分の長い行列が続き、警備員が列を乱さないよ

う、注意を促している。

「豆まきが終わったら、倫子さんの店に行こうね」

「絢さん、そばパン食べているのに、蕎麦も入るの？」

「食事とデザートは別腹ですから」

来週の休みに母と高校の制服を買いに行く。学校指定のコート、ローファー、体操着、教科書を買い、四月からは西川舞で高校へ通う。

そばパンが他の参拝客に付かないよう、注意をして冬枯れの石段を歩いた。横に並ぶ西川くんの身長差に、いっこうに慣れなかった。真上から見下ろす視線は、動物園で人間から餌をもらうキリンみたいだ。クラスでも西川くんと同じ背丈の男子はいるが、細い身体と長い顔がキリンを連想させるのだろう。キリンと違うのは、舌が短いことだけだ。

袋に入った豆をキャッチするため、わたしと母は毎年フード付きのコートを着る。

「今年は何個もらえるだろうね」

「お母さん、毎年張り切りすぎ」

「来年も健康でありますようにって、年の数だけ豆を食べるんだよ」

母がダッフルコートの衿を直してくれた。肘の辺りには、口の広い大きな紙袋をぶら下げている。飛んできた豆は素手でキャッチし、取り損ねた豆は運が良ければフードや紙袋の中に入る。

「節分なのになぜ来年を祈るの？ 新年は一月から始まっているじゃない」

西川くんが隣でマウンテンパーカーのフードを広げている。落ち着いた声が、静かに耳に届いた。「旧暦では、明日の立春を新年とするんだ。だから今日が大晦日となる。一年の邪気を払うために豆まきをし、来年の健康を祈るために、年の数だけ豆を食べるんだよ」

「豆や太巻きを食べるのも、ちゃんと意味があるのよ」

西川くんの言葉をそのまま受け売りする母は得意気だ。恵方巻きの由来だって、スーパールの戦略だと聞いたことがある。

そもそも、年の数だけ豆を食べたら、間違いなく母は吹き出物ができたと大騒ぎするだろう。

警備員がゆっくりお進みくださいとアナウンスし、本堂までの列が動き始めた。

ダッフルコートのポケットに入れたスマホのバイブが震えた。片手でラインを確認すると、柏木からだった。

ラジオドラマが放送された日、柏木から受験が終わったら、ぴあフィルムフェスティバルに行くかと誘われた。

わたしは二秒後に「はい」と答えた。

今日のラインは、フィルムフェスティバルの上映スケジュールを、おすすめのコメントと共に送ってくれた。新鋭映画監督が数多く参加する短編映画のフェスティバルは、見応えがあるらしい。フェスティバルのあとに、マクドナルドに入るのかもしれない。さすがに変顔でストロベリーシエイクは飲まないだろう。

楽しみにしているね、とスタンプを送っていると、西川くんがいきなり四十五度の角度で頭を下げてきた。顔を上げると、たれ目が八時十七分になっている。

「舞ちゃん、卒業式、本当にごめんね。俺、すごい楽しみにしていたんだ。よりによって、研修が入るとは思わなかったよ」

わたしと恵理ちゃんの「西川くんを卒業式に出席させない」作戦は中止となった。卒業式当日、新しい福祉用具の研修があるため、西川くんは欠席した。

「別に良いよ」

「入学式は絶対出席するから。もう有給申請出したからね」

下剤を使わなくて済んだ。くすりとわたしは小さく笑った。口角をややあげて笑うわたしに、母は変な顔をしてみせた。

西川くんが、石段の天辺にそびえる木を指差した。

「舞ちゃん、蠟梅、もう終わりだね。去年の大晦日に、倫子さんの店に咲いていたね」

最後に残った蠟梅の花は水分というよりも、油分を含んでいるように見える。蠟を引いたような黄色い光沢が、日の光に照らされている。

「中国では旧暦の十二月の臘月に、蠟梅は咲くんだ。臘月から蠟梅と名付けられた説もあるんだよ」

「ロウソクとは別の解釈ってこと？　なぜそんなことを知っているの？」

西川くんが、蠟梅の名前の由来を知っていることに驚いた。わたしが立っている位置からは悔しいことに、散り際の蠟梅の匂いは感じられなかった。

「俺、大学の時、教養科目で中国語を取っていたからね」

深大寺の僧侶の後ろから、袴を着けた議員や、袴姿の力士や歌舞伎役者が本堂の前の舞台を歩いていく。

明け方に降った雪が本堂に残り、屋根の先から雪解け水が細く滴り落ちている。細かい刺繍がほどこされた五色幕が風に揺れている。

二〇二五年二月二日、旧暦の大晦日。豆をまいて今年の邪気を払い、新しい年を迎えるために福を巻き込む。そのためには年の数だけ豆を食べ、太巻きを食べる。福を巻き込む意味の太巻きは、無言で食べなければならぬ。

この後、倫子さんの店で蕎麦と太巻きを食べよう。きっと今日は、割り箸をうまく割れるような気がする。

「お母さん、今年の恵方ってどっち？」

「確か西南西だよ」

「絢さん、違ふよ。西南西よりやや西」

列は手水舎の前に差し掛かった。

咄嗟にわたしは、西川くんの立っている方角を頭の中のコンパスで引いてみた。西川くんの左目

尻があがった。

今年の恵方は、西南西よりやや西。

福はきつと、蠟梅の匂いに乗って、西からやってくるだろう。

環を描く

中村郁恵

若葉が色数を競いはじめた昨春。私は、自宅の狭い庭でひとり雑草を抜いていた。一週間前まではさほど目立たなかったのに、ここ数日間で種別問わず緑が緑を呼び、自分たちの領域を拡げていた。約半年間。北国の厳しい寒さと一メートルにも及ぶ積雪の下で根を張り続け、季節の巡りをじっと待っていたのだ。雪解けからひと月ながらもこの成長の早さは、不屈さの必然にも思えた。まだ小さく薄い葉を惜しみなく開き、華やぐ光の春を余さず受けとめている。

まいにち。まいにち。陽が昇ると、植物の多くは呼吸を抑制して光合成に勤しみ、養分をつくり酸素を放出していく。人間が眠りに沈む真夜中こそが、呼吸に注力する時間だ。彼らは、人の眼によく似る気孔を開き、喧騒から逃れた夜気を吸い込んで、月や星の位置を示す群青へ二酸化炭素

をくゆらせていく。

中学で習った理科の基礎を辿りながら、右手が握る小型の鎌で雑草と対峙する。今年もその時期が訪れた。クローバー。カタバミ。イヌダテ、オオバコ……雑草たちは、この瞬間も光合成に精を出しているのだ。そう考えると若干の罪悪感が過ぎる。だが、刃先は南中を指す光を鋭く反射させながら根元を狙う。地を這う根。異種同士ながら絡ませ合い地中を共用する根と根。土の粒子と粒子の隙間に分け入る根毛。それらに刃の尖端を鋭く当て、左手で土と乖離させる。すつと抜けるものもあれば、途中で切れても末端だけは地中に残すものもある。

強引に地上の空気に触れさせられた根毛を、手のひらにのせる。ほどかれた土が、鼻腔をくすぐってくる。このか細い根の端から、腐葉土に含まれる水や養分を吸い上げ、茎を通り、張り巡らされている葉脈の末端まで伝わせていく。そして、光合成で生成されたエナジーをまた根に戻していく。いのちの継承という基点を動かすことなく、天候や気温に応じその仕組みを微調整しては、受動を潤いある能動へ寡黙に変換させているのだ。

正直、雑草抜きは好きではない。ガーデニングも趣味としない。けれど、土が抱く温度やにおい、根の湿りを指の表皮が覚えることで、細胞ひとつひとつが水気を帯び目覚めていく想像と親しくなれた。質朴だが厳かに巡る環はしだいに同心円と化し、私の内に幾度も透明な弧を描いた。細々とも言葉を綴る身としては、自然の摂理とその普遍性に、じかに触れられる希少な時間は愛おしかった。

昨年までは、確かにそうだった。だが、この春は違った。緑葉や土から何かを享受しても、文章表現の良質な助言にならなくなっていた。それよりも、これから先もこの場所に留まっていってよいのかと、焦りを感じていた。迷いのない植物の環に触れるほど、恬淡としていられない気持ちがあった。軌道を敷き直さなければ。植物に喚起されるなど安直かもしれない。けれど私は、ふたたび外へ向かう扉を開けてみよう、土と草の青さが浸み込んだ手袋を脱いだ。

表面上は引きこもっていたわけではない。友人と時々会い、隣近所の方々とも挨拶を交わし談笑もする。買い物にも出かける、ありふれた生活を送っていた。だが一度、直接的な関りを絶った者にとって、俗にいう「社会」に繋がる扉は、近いようで遠くにある。それは、重く厚く硬い。扉とは、内在する殻でもある。そう承知していながら、殻を殻と認めず、無理せずに生活する私なりの同心円を描いてきた。

不思議なもので、限られた空間で描き続ける円は、無意識ながらしだいにわずかに内側、さらに内側をなぞっていく。円周は保護膜となり、乾いた外皮から殻と化し、自分に適した温度で見えない囲繞を構える。ついには同心円内に籠る方法が身につき、誰にも気づかれずにやり過ごしてしまうから厄介でもある。そこから脱出する必要性を察知しつつも、物理的には難しかったことも確かだった。

我が家は二十数年来の单身赴任。今でいうハワンオペ育児Vで二人の子と接してきた。加えて、

実家の母と夫の両親とは距離を取らず、ずっと寄り添ってきた。独居の母は、自立していたものの片肺が機能せず体力がなく、腰も悪かった。隣家の義母は、義父が他界してからめっきり衰えた。

その親たちを一人ずつ送り終えた。幼い頃から病院通いばかりしていた娘も社会人になった。つまり、家庭人としての私の役割はほぼ終了したのだ。

儉しい生活を覚悟して家庭を中心に据えてきたのは、後々、臍を噛む思いをしたくない保身だった。それでも、細切れの時間を綴ることで継いだ毎日。他律的な不自由の中で、細い呼吸を繕い合わせるように原稿用紙上にだけ行使された自由が、実は、不自由が故の抽出方法だったとは。早く重い荷を下ろしたい。自分の時間が欲しいと願っていたのに、いざ独りになると寂寥の風が吹きぬけた。さらに、母たちや我が子を通してしか社会と接点がなかった自分を知る。私の立ち位置はどこか。気づけば、言葉との交歓も希薄になっていた。還暦間近にして一本道で迷子になった。この狭い庭に、ひとり取り残されていく恐怖も過ぎった。

暗然の真中で蠢くものは、言葉を求め言葉に求められる関係性を失いたくないという、ささやかな意思のみだった。上手下手ではない。書くという行為が、自分に去来する感情や思慮、醒めたがる感覚に対して、私にできるただ一つの確認作業だと信じていた。

もちろん、針孔に極細の糸を通すように自己の深淵を突く時間も大切だろう。だが、現実社会を肌で感知することがいちばんの治療薬に思えた。さらに、歯止めのかからない物価高騰も追い打ちをかけた。定年退職した夫は第二の職場に移ったが、現役世代より給与は下がる。年金受給にはま

だ数年ある。不安定で模糊とした最近の時流では、その年金も当てにはならない。限界。潮時。分岐点。リスタート。類似する言葉が束になり、就活へ向かわせた。

この十数年。全く働かなかったわけではない。年末調整の書類チェック、区役所での短期アルバイトなど幾度か経験はしてきた。だが、本格的な就活の記憶は、学生から社会人になる三十年以上前に遡る。今回は、扶養範囲内のパート勤務希望と、条件を明確にしたものの、直面すると不安と疑問が次々と湧いてきた。

「人手不足」と言われて久しいが、居住する札幌での有効求人倍率はどのくらいか。就職に直結する資格もなく、還暦間近の私にできる仕事は何か。パソコンは、wordとexcelしか使えなくてもよいのか。これから五年、十年先まで従事できる職場に巡り合えるのか……混沌の領域に陥落しそうな頭で、ハローワークの求人情報をスマホで開く。

「売り手市場」は本当だった。想像どおり、介護やサービス業、清掃、コールセンターからの募集多数。だが、介護という言葉の奥から、母達の面影がまだ表出してくる。誰かの背中の丸みに。指の節節に。カーディガンの袖口の縫りに。母たちを濃く重ねる自分が想像できた。時間が許す限り傍にいたはずなのに、私の接し方は正しかったのか。もっと優しい言葉をかけてあげられればよかったのにと、沈潜させたはずの思いが小さな気泡となり沸々と滾ってくるに違いなかった。これでは、我が身を責め立てる材料を自ら引き寄せるに等しい。事務職経験しなく人前が苦手な私に、

今から接客業に就く自信はない。帰結をみないまま、通勤距離・職種・就労時間から絞り込みハローワークに急いだ。

ハローワークのシステムも様変わりしていた。登録は自分でパソコン入力。その後、担当者から応募先へ連絡、履歴書送付や面接日程の確約など仲介してもらう。初心者に等しい私に対し、女性の担当者は、履歴書と職務経歴書等の作成マニュアルと一緒に確認してくれた。仕事とはいえ、その親切な応対に安堵した私は、幾つか質問を並べた。

「私のような五十代後半でも事務職求人は結構あるのでしょうか」

「正社員は難しいですが、パート・アルバイトは少なくないですよ。ただ、採用人数が一人の場合が殆どなので倍率は高い傾向です」

「では、事務職に限定しない方が無難ですね」

「明言はできませんが、勤務条件から選択肢を広げるのも悪くありませんよ」

「これといった資格を持っていないので、やはり狭き門ですね」

「でも、ご自分の経験や経歴に自信をお持ちください。タイピングもあります。ここはひとつマツチングと捉えて、ゆっくり探していきませんか？」

よほど焦っているように見えたのだろう。緊張と恥ずかしさで白いブラウスの内側では汗が筋になって流れていた。この日は、取りあえず二か所の会計年度職員に対し紹介状を発行してもらった。ここは、履歴書を先に郵送。一次審査が通れば面接に至るという。

職務経歴書はパソコンで作成したが、履歴書は手書きである。ペーパーレスの時代を迎えても、履歴書はアナログ続行だ。修正ペンは使えないという意識と履歴書の白地に緊張したせいか、指先が硬いことに気づく。これではゆとりある文字は綴れない。似た材質の紙に名前を書く。何度も黒いペンを走らせる。滑らかになったペン先で氏名。生年月日。住所。学歴を記す。

中学校名を書くと、放課後の図書室が蘇った。M-3の棚にあった『牟太・セクスアリス』の濃紺の背表紙に手を伸ばした時、

「郁恵さんには、少し早いわよ」

奥の棚から声をかけ、代わりに『檸檬』を手渡してくれた月館先生はお元気だろうか。高校名を記せば、化学準備室の薬品がにこい、校庭のスプリンクラーが夏の陽をプリズムで弾いた。短大のゼミで何度も輪読した『たけくらべ』は、もう一行も憶えていない。

職歴欄には正社員として長く勤務した会社名を。楽しいこともあったはずなのに、無視されるか嫌味ばかり言ってきた先輩の、腰まで垂らした茶髪の揺れ方をまだ憶えている自分がいた。履歴を記す意識の外で浮遊する回顧から集中を戻し、志望動機を丁寧に記す。爪の先で折り目をつけ封をし、切手を曲がらずに貼った。日永の路上で待ってくれていたポストが、直方体の底へ鈍い音で飲み込んでいった。

一週間ほどして履歴書が返送されてきた。黒星発進。結果を冷静に受けとめ、新たな求人情報を閲覧する。大学関係が多く掲載されていた。大学食堂の募集もあった。身体を動かして働くことは好きだし、就労時間、日数も希望通りである。ハローワークから紹介状を発行してもらい、翌日面接の運びとなった。

ところが、面接官は私を一瞥し、履歴書も開かずにかう言った。

「三十キロの米を一気に釜へ入れられますか？ それを何度も繰り返せますか？」

「こう見えても体力に自信はあります」

「申し訳ないですが、無理だと思われますので」

黒星一つ追加。想定外の採用基準に、現実の厳しさが刺さった。駐車場に戻り、運転席から緑溢れるキャンパスをしばし眺めていた。学生たちの活気に負けない若葉が、翳りを知らない五月の光を小刻みな揺れで還していた。ふいに、百日草の種を蒔こうと思った。

「色を変えながら元気に長く咲いてくれるから可愛いの」

庭仕事に特に愛でていた花が百日草だった。他界してから二年。無意識に避けてきた花が急に恋しくなった。

就活に注力し手入れを怠っていた庭では、雑草が自在に蔓延っていた。蟻は、あちこちで土を盛り上げている。中心に空いた極小の円い穴が、地下で繰り広げている営みを想起させた。義母が遺したスズランは盛りを迎え、その白さを誇っている。モクレンは薄茶になった花びらを散らし、萎

んだツツジは花殻摘みを催促していた。だが、いまは百日草の種撒き徹する。

まずは雑草抜きから。私の手という敵が不在だった時間。たつぷりと陽の恩恵を受けてきた葉や茎は、どれも水気と張りがあった。だが、遠慮なく鎌の刃を向ける。眼を凝らし根元を探る。力を集めた指先で抜く。絡み合う根と根が、途中で千切れても引き抜いた。黒星続きとはいえ、扉を開けた私を責め立てるものは、もうなかった。その安堵が、鎌を持つ右手をテンポよく動かした。

緑を減した一面を、スコップを使いほぐしていった。種と一緒に購入してきた土を均等にのせる。大きく混ぜる。新旧の土を均す。いつも父が施していた手順が、私の手指に降りてくる。平らになった土に、右人差し指の第二関節上までまっすぐに入れる。並列を指し間隔を取っては、また土を押し込んでいく。十数個できた小さなポケットに、百日草の種をひと粒。またひと粒落とし、発芽への希みを託した土を柔らかに被せた。如雨露で水を大きく撒く。若かった父の厚みある手が、緩やかな弧で落下する破線の水に浮かんでは消えた。色を濃くした土の香が、鼻の奥でツンと浸み

た。
双葉が首を伸ばすまでに黒星二つ。茎が太くなるまでに三つ追加された。交互に表出する葉と葉の間に蕾が準備された頃、経理補助職員の面接を受けた。面接前には、SPI学力試験があり、一時間に及ぶ非言語・言語テスト。適性検査も実施。面接室では、四人の担当者が座っていた。大規模とはいえない事業所で、最低賃金・週三日勤務のパート採用にしては、大仰な気がした。簿記四

級は、採用基準以下らしい。しかも、履歴書を見て冷めた口調でこう尋ねてきた。

「この十年、単発のアルバイトでしか働いていた経歴がないようですが、あなたはいったい何をしていたのですか？」

それは、どういう意味なのか。一瞬の間の後、

「介護とまでいきませんが、親に寄り添い、話し相手や手伝いをしていました」

おそらく私の眼も口調も尖っていただろう。胸を張ってきつぱりと答えた。就労していなくても、遊び惚けていたわけではない。圧迫面接だとしても、なぜ、初対面の若い面接官に非難めいた言い方をされなければならないのか。どんな人にもそれぞれの事情がある。定まらない心もじつと抱えているのだ。この職場には、間違って採用されても辞退しようと思った。

当然、黒星追加。同時にこの面接でこれまで保ってきた緊張が、突然途切れた。私は、どこかに所属しているという安心感を得たかっただけではないのか。社会の現実に触れただけでも十分ではないか。憤りと疲弊が、しばし就活から遠ざけた。

三週間が経ち、百日草の堅い蕾が三つ開いた朝。鉢を持って庭に出る。毬状の花は、深紅。薄紅。そして母が好んだ橙色。せっかく咲いたのだが、母に供えようと橙色の一輪だけを、水平に絶った。薄緑の断面には、透明な液が滲んでいる。この茎の内側では、切断の寸前まで二種の管による交換が行われていたのだ。

道管は、根が吸い上げた水や養分を葉先まで行き渡らす。師管は、葉が光合成で培った栄養分を根や細部まで運ぶ役割に徹している。細い筒状の内でたゆまず循環されていた証しに、指の先端でそっと触れた。僅かに粘度ある水気が、皮膚の表を生温かく走った。密やかな循環がもたらす夜には、しずかな生の肯定があった。清徹なその一滴を、親指と人さし指の腹で擦っては、肌理から内底へと浸透させていった。

証明写真の残りは二枚。使い切らなくては。家に戻り求人情報を閲覧する。スクロールの先に、ある総合病院の電話交換手の応募があった。六十代でも勤務可能とある。ハローワークへ急ぐ。二日後の面接を確約した。

当日。九時半に面接が始まる。挨拶。自己紹介。着席。手渡した私の履歴書・職務経歴書にひと通り目を通した面接担当者が、

「これから一緒に職場見学に行きませんか？」

と言ってきた。面接開始から僅か五分。驚いた私の表情を察し、

「中村さんの実務歴と挨拶の仕方でもう十分です。ですが、とても忙しく緊張感が走る職場ですので、ご自分に適しているか直にご確認ください。研修もあります。それでよければ、一緒に仲間として働きませんか？」

「ありがとうございます。ぜひ見学させてください。よろしく願いいたします」
写真残一枚にて、初めて白い星になった。

帰宅後の庭には、盛夏を迎えた西日が熟れて流れていた。新たに開いた百日草の近くで雑草を抜く。一本。これまでの日目の点綴に代え、また一本。私も新しい同心円を描けるだろうか。手指を動かす私の背に、陽が溜まっていく。緑がおうこの微熱を、いつか言葉に変えてみたい。ひさしぶりの希求だった。

当然ながら、仕事は覚えることばかりだった。病院の規定。施設の全配置。各部署名。医師や看護師だけではなく、検査部。薬剤部。医事課。総務課。栄養課。秘書課などスタッフの把握。最低限の医療用語や知識。公費の種類。地域連携室の役割。説明を聞きメモを取り、マニュアルに線を引く。交換台の扱い方など、錆びかけた頭に何度も繰り返し刷り込んでいく。わからないことは自己判断せず尋ねるしかない。幸い先輩達には恵まれ、何度聞き直しても嫌な顔一つせず、「慣れるしかないから。がんばろう。二十年やっていても、迷うことはあるから」

さり気ない励ましが心強かった。三台の交換台は鳴りつ放しだ。無駄口に費やす時間などない職場は、陰で人と人を繋ぐ意識以外を排した緊張感が底流している。

入電した下四桁の番号を控えながら内容を聴き取り、必要事項を質問し、各部署に振り分ける。担当者に繋ぐ。先生に伝える。医療内容以外で正確に答えられるものだけを返答する。新規予約の窓口へ。受診外来に。再診や面会予約の他にも入電内容は様々だ。

――紹介状を書いてもらったのですが、どのように予約すればよろしいですか？

――南大病院の血液内科医師・佐藤ですが、総合臨床科・立花先生はお手隙でしょうか？

――スカイ調剤薬局ですが、形成外科の疑義照会をお願いします。

――お財布の落とし物は届いていませんか？

――野良犬に噛まれました。

――介護主治医意見書をお願いしたいです。

――がん検診について教えてください。

――東野警察署です。孤独死された方の自宅から、そちらの病院の予約票が発見されたのですが、病歴を教えてくださいたいです。

――どの科を受診したらよいか相談できますか？

――保険会社に提出する診断書を欲しいです。

――訪問看護指示書をいただきたいのですが。

――一歳の子が舌を嚙んでしまいました。

――昨日、海外出張から帰国して発熱したのですが。

――北口警察署の生活安全課ですが、救急搬送された方の身元確認の電話です。

――マイナ保険証について教えてください。

――そちらの病院へ行くのに便利なバスか電車を知りたいです。

――介護施設の職員ですが、病院で車イスは貸してもらえますか？

――中園警察署ですが、強制採尿の依頼です。

――入院手続きの書類の書き方がわかりません。

――清川救急隊ですが、患者様受け入れ確認の電話です。

――三日前に救急搬送されてそのまま亡くなった者の家族です。その支払いに行きたいのですが。

未踏だった領域が、インカム内で蠢く。深奥に振幅を覚えることもあるが、感情は声や言葉に介入させない。

スタッフからの公用依頼も多い。

――6南病棟の看護師・水島ですが、古内武さんのご家族に電話をかけてください。

――中央保健センターの永守保健師さんに繋いでください。

――新生児内科の小野ですが、朝日市民病院小児科・岩渕先生に電話してください。

繋ぐ先に伝える必要性から、氏名を伺うとこう返されることもある。

——なんであんなに個人情報を話す必要がある。

——そんなことどうでもいいから、さっさと繋げよ。交換のくせに。

現今社会の渾然や綻びが、一本の回線内に凝縮している。どこかで、人と人は繋がり、先には未知な展開が待ち受けている。その裏側で、自分の声と番号を押す指先が、微かに関わっている。そんな錯覚が過ぎるようになった頃、空は冴えた蒼を渡し、冬隣りの季節を迎えていた。

白い息で庭に出ると、エゾマツとナナカマド以外の樹々が、翌春の芽吹きに備えすべての葉を落としていた。菊も終わり、雑草だけが張りのない緑で寒さに抗っていると思っていた。ところが、冬支度の作業で切り忘れた百日草が二輪、茶褐色ながら花のかたちを保っていた。触れると、乾ききった音が耳元を揺らした。

私を待っていてくれたのかもしれない。恣意は、鋏を大きく開かせた。太く長い茎の真中で絶った。日盛りに、私の指を濡らした水気は一滴も残されていなかった。私は、細かに切った茎一片一片を袋の底にそっと寝かせた。

百日草は一年草である。根を残しても翌年を迎えられない。だが、抜き取ることはできなかった。

手袋を脱ぎ、冷たく硬い土を指先でほぐした。ゆっくりと。私の熱を土に伝えていく。膨らみを呼び返された土を柔らかに掬う。地と水平になった茎の断面に、土がめり込んだ指でひとつまみ、ひとつまみしてのせていった。

※ 備考

「オタ・セクスアリス」

森鷗外

著

「檸檬」

梶井基次郎

著

「たけくらべ」

樋口一葉

著

いずこよりいずこへ（京極編）

津坂 格

〔前号第八章までのあらまし〕

名寄町高台（現、名寄市緑丘）に住む零細農家の娘平岡ノリコ（十九歳）は北海道製酪販売利用組合連合会（略称、酪連）のバター工場に勤める技術者高屋敷勲（二十二歳）との祝言を愛別村中愛別（現、愛別町中央）の勲の実家で挙げた。昭和十三年二月四日のことであつた。勲は渚滑（現、紋別）に新設された酪連のバター工場に転勤が決まっていた、新婚生活を渚滑の社宅で始めることも決まっていた。母の連れ子で、その母を十三歳で亡くしていたノリコにとって、またとない幸運

な結婚と思われた。

この五日後に召集令状が届き、勲は二月十五日に旭川の第七師団歩兵第二十八連隊に入営した。同月二十八日、同師団は満州国の日本軍駐屯地チチハルに派遣された。

その翌十四年、勲が所属する歩兵第二十八連隊第二大隊はいわゆるノモンハン事件で出兵し、ソ連軍の大規模な包囲のもと、勲はノロ高地にて同年八月二十三日に戦死した。

その後もノリコは高屋敷家で農作業を手伝いながら暮らしていたが、祖母カノからの勧めで、自分の生母コキヌとはいとこの関係にあたる田辺正人と再婚することにした。

祝言は昭和十五年一月十五日に旭川の田辺家において、二人とも再婚ということで、ごく身内だけで済ませた。

正人（二十七歳）は叔父猛四郎が営む古物商の店で働いていて、まだ二歳の恵子とともにこの叔父の自宅に住み込んでいた。恵子の生母花恵は産後の肥立ちが悪く亡くなっていたのだ。恵子の日常の世話には猛四郎の妻ウメと花恵の妹科恵（しなえ）が面倒を看ていた。こうした事情で、ノリコも猛四郎宅に住み込むことになった。

それから数日後に訃報が届いた。祖母カノはノリコの祝言後に名寄を引き払って札幌定山溪に住む長男吉彦夫婦のもとに身を寄せたばかりであったが、吉彦が造材作業中に倒木事故で即死した。気丈なカノもすっかり気落ちし、急に老け込んでしまった。カノは次男昌彦に引き取られ、樺太の敷香（しすか、現在のポロナイスク）に渡った。

この間、東俱知安村（現、京極町）の田辺家（正人の実家）からは早急に帰って来て家業を継いでくれという催促が矢継ぎ早に続いた。正人がこのことを猛四郎に告げると、「おまえたちは帰ってもいいが、恵子は置いてゆけ」という思わぬ条件が突き付けられた。正人はこれに反論し、言い争いから、ついにはデレツキが飛ぶ事態となった。子どもに恵まれなかった猛四郎とウメの夫妻にすれば、この恵子はわが子のようにいとしかった。ウメにしても恵子は自分の弟の娘が産んだ女兒だったのだ。

結局、恵子は叔父叔母がもう二年間預かるという口約束で、ノリコは正人に伴われて東俱知安の田辺家に入ることになった。

九

昭和十五年二月三日、ノリコは正人に連れられて東俱知安村の田辺家に向かうこととなった。六時四十五分の函館行き急行に乗車するつもりでいたが、昨夜はなかなか寝付かれずに明け方になってウツラウツラと眠ってしまい、間に合わなくなった。次の急行八時十分発小樽行きに乗り込み、小樽からは乗り換えることにした。

恵子にはあえて顔を合わせないことにして、猛四郎の家を出て旭川駅に向かった。

持参するものとしては、大きなトランク一個だった。それは原聡がみずから進んで駅のホームまで運び、列車が動き出して見えなくなるまで手を振って別れを惜しんでくれた。

勲と渚滑で所帯を持つために用意した家具等は、高屋敷家のキミが嫁入りする際にそっくり使ってもらうことにしていたが、夜具一式は賢が気を利かせて旭川に送ってくれていた。それが荷を解かずにあつたので、そのままチツキで託送手続きを済ませていた。

中愛別から旭川にやってくるまで、ずいぶんいろいろな事があつたような気がしたが、数えてみれば、わずか二〇日にも満たない暮らしであつたのだとノリコはあらためて思い返した。

そういえば、今日は節分の日だった。暦のうえでは明日は立春か、と車窓からノリコは外の雪景色を見やった。

列車が動き出して旭川駅のホームを離れると、座席に座っていた正人は腕を組み、目を閉じ、押し黙ったままだった。眠っているわけでないことは、無論、ノリコは分かっていた。むしろ、胸中に湧き上がってくるものを押し殺す闘いをしているように見受けられた。

列車が次の停車駅の深川に止まると、正人は目を開けて、窓外のプラットホームに目をやった。ノリコは気が気でなかった。ここで下車して旭川に取って返し、恵子を連れ戻すと正人が言い出しはしまいかとハラハラしながら横目であがった。そうすると、今度はのつびきならない大立ち回

りとなるに違いない。

列車が動き出すと、正人が再び腕を組んで目を閉じた。それを確認してまずはほっとした。

次の滝川駅に停車すると、また正人は目を見開いたが、行動を起こすことはここでもなかった。

岩見沢でも目を開けたが、

「ここには叔父がいる。芳子の実家だ」

ポツリと口にした。

「桧山さんね、叔父さんというのは？」

「岩吉じいさんの三男で基三郎というが、親類筋の桧山家に養子で入ったんだ。おれのおやじが長男、次男が英二郎といって函館、四男が件の叔父というわけだよ」

「旭川、岩見沢、函館ときて、小樽にも親戚がいるというわけではないでしょうね？」

「風のうわさでは、おれとは血縁関係がまったくないが、姉がどうも小樽に住んでいるらしいんだ。父親を明かさないう赤ん坊を産んで家を飛び出したので、消息不明とはなっているが……」

「ちょっと待ってください、急にそんな話を聞かされても込み入っていて、頭に入って来ないので後からゆっくり聴かせてもらいたいわ」

ノリコは正人の話をとりあえず制した。今はこれから赴く東俱知安の家のことと頭が一杯で、他のことをあれこれ思い煩わす余裕はなかった。これはまた人間関係の複雑錯綜した家に来てしまったと思ったが、いまさらどうしようもない。

札幌駅に着いた。札幌はつい先日のこと、古木吉彦の葬儀で来たばかりだ。

正人の腕時計を見ると、十一時に近かった。多くの乗客が下車し、新たな乗客が乗り込んできた。ここは停車時間が長いので要注意だとノリコは思い、正人の気を逸らそうと、

「駅弁でも買いませんか、ここは何が名物なのかしら？」

問い掛けたが、

「名物なんて、この札幌にあるものか、食事なら小樽の方がいいだろう」

正人は素っ気なかった。正人が下車して旭川に戻る気はもうないかとノリコは読み取った。

列車は札幌を発って程なくして浜が見え始め、列車はますます海岸に接近しながら走行しているらしい。やがて窓外には一面の海が広がってきた。ノリコにとってはじめて見る風景だった。ノリコは目を遠くにやった。海岸線が半円を描いて遠くまで伸びていて、列車はその半円の線に沿って進んで行く。見飽きない風景だが、空は重苦しい鉛色の雲が織り重なっていて、海もまた濃い灰色がただただ広がっていた。目の前にあるのは、海岸線の岩場に打ち寄せる大きな波が白い牙を次々と剥き出して立ち向かってくる、冬の海の陰鬱な波頭ばかりだ。

ノリコは黙が話していたオホーツクの青い海のことをふと思った。勿論、ノリコは自分の目で見たわけではなかったが、頭の中に思い浮かべるオホーツクの海はインクを真水で少し薄めたような静かで透명한青い色だった。今となっては、それも童話の世界になってしまった。

終点の小樽駅に到着した。乗り換えの列車まで、三時間ほどある。

駅の中は混雑していた。大勢の人々が乗り降りする。みんなが忙しく、足早に歩く。うつかりしていると体がぶつかってしまいそうだ。あきらかに商売を営む人たちの群れだ。

「おれ、小さい頃にこの小樽にいたことがあるんだ、少しの間だけだな」

正人がいささか活気づいた口振りになった。

ノリコは詳しく聴きたいと思ったが、今は記憶に留めておくだけにした。

トランクを手荷物預所に託し、雪道を散歩してみることにした。

小樽の街はノリコにとってはじめてだった。

駅前にはびっしりと建物が張り付き、そのほとんどが店屋で賑わしく、行き交う人はせかせかしていた。

目の前の広い駅前道路は緩やかな下り坂になっていた。

「このまま真っ直ぐ行けば海に出る」

と、正人が言った。

坂を下りて行くにつれ、この街には自分が今まで経験したことのない空気があると思っていたが、それは潮のにおいというものだ。とノリコは気が付いた。

海まで行くのは止めにし、途中、右手の賑やかな通りに入った。

「ここが小樽でも一番の繁華街だ」

正人が言うように大勢の人々の混み合った流れだった。

昼食はまだ取っていないので、目に入った大衆食堂に入った。やはり混んでいた。一番手っ取り早いおまかせ定食を注文した。

どんぶり御飯に主菜はカレーの煮物で、シジミの味噌汁、それにクラゲの入った和え物としん漬けがお盆に載っていた。定食にしては豪華だった。

食事中も次々と客が入ってくるので、ゆっくり休んでいるのは食堂に悪い気がして、食事を済ませると早々に出た。

時間潰しにこの〈都通り〉の商店街をぶらつくことにした。

行き手にひときわ目立つ建物があった。

「これが有名な〈電気館〉さ」

「デンキカン？」

「要するに映画館だ」

人が溢れかえり、館内は混み合っている様子が見て取れた。

ここを通り過ぎ、ノリコは正人と二人で肩を並べて歩いた。自分にとってはこれが新婚旅行というものかもしれない、とふとそんな気がした。

都通りを往来して駅前通りに戻った。真正面に小樽駅が見えた。駅舎は左右が同じで、中央部に

は三本の柱が立っていて、その真ん中の柱には大きな時計が一段と高く、駅前の広場を見下ろしていた。

「ずいぶんと立派な駅舎なのね、こうして見ると」

話し掛けると、

「鉄筋コンクリート造りで、道内の駅ではただ一つなんだ」

正人は前を見たまま答えた。

小樽駅から乗り込んだ列車は街中を通り過ぎてトンネルに入り、そこを出るとにわかに山の中を突き進んで行く感じになった。蒸気機関車は黒い煙を盛んにたなびかせ、白い蒸気を上空に放っているのが車内にいてもうかがえた。山中の谷間を縫う鉄路を喘ぎながら登っている様子だ。ノリコには今後の自分を暗示しているように思えてならなかった。標高がだんだんと高くなっているのであらうことは、鼓膜が突つ張るような感じからも分かった。唾を飲み込んで耳の中の調子を整えた。途中、列車は小休止するかのようにつかの駅に停車したが、駅を出れば、車窓の右も左も雪の壁だった。

長いトンネルを過ぎ、開けた広い平地に出たかと思うと、そこが俱知安駅だった。

ここで函館本線と別れ、京極線に乗り換える。ノリコは駅のホームに降り立って、積雪が多いのには驚きだった。名寄や旭川よりはずっと南の方に来ているにもかかわらず、雪が多いのには不思議

議な気がした。

京極線の脇方行きは、一〇分ほどで乗り継ぎができた。

「この京極線は脇方鉾山の鉄鉾石を室蘭に運ぶのが目的で敷かれたもので、京極駅はその一つ手前なんだ」

と、ノリコは正人から聞かされた。

このローカル線は俱知安駅を十七時二十五分に発ち、しばらくしてトンネルに入り、出ると鉄橋を渡って六時過ぎ京極駅に滑り込んだ。

「この駅舎ってずいぶん大きいのね」

ノリコは言ったが、正人は黙ったままなのでそのまま後ろに付き従った。駅の玄関前は一面の雪原で、一人だけが通れる一本道しかなかった。

六〇メートルほど歩いた所で、

「ここだ」

正人が振り向いて言った。

家は駅前と聞かされていたが、駅に一番近いとまでは考えていなかったことだった。思わず、ノリコは立ち止まり、左側に目を向けてはっとした。

一軒の家が雪の中に埋もれていたからだ。

今、自分が立っている所は家のひさしとほとんど変わらない高さなのだ。雪の階段が六、七段続き、その下に玄関が見えた。大きな段差の階段を正人に従って降りた。

玄関に入ると、そこはちまちまとした品物が並ぶ店先だった。

「ただいま、帰りました」

正人が大きな声を掛けると、初対面の年配女性が現れた。正人から紹介されるまでもなく、姑のキクに違いなかった。

「ノリコと申します、今日からお世話になります」

ノリコは型通りに頭を下げた。

挨拶をそこそこに、居間に通された。

部屋の真ん中にはいろりが掘られていて、鉄瓶が置かれていた。その向こう側に、旭川の祝言で顔を合わせていた舅の一輔がいた。

「嫁を伴ってよう戻ってくれた」

一輔は上機嫌だった。キクが座布団を出して迎えてくれ、にこやかだった。

確かに大歓迎といった雰囲気だった。

「ちよんどのいい時にきてくれた、このところ部屋の引き戸がきつくなって困っていたところじゃ」
一輔が待ってましたとばかりに言ったが、ノリコはとっさに理解できなかった。

「帰ったら、早々に屋根の雪下ろしが待っていたか、一週間遅らせるべきだったかな」

正人が笑いながら答えた。

「嫁入り早々に屋根の雪はねなんて、新婚さんに悪いわよね」

ノリコはその意味が解った。

ノリコは名寄でも愛別でも屋根の雪下ろしの経験はなかった。女が屋根に上がるといふのは人目をはばかるはしたない振る舞いとされるものだった。だが、家が軋んできたとなれば、そんな行儀の善し悪しを言っていられるものではないのだ。

キクが夕食の配膳をしてくれた。今日がお祝いの日になろうとは思っていなかったのも、それらしい料理ではないがとことわりながらも、膳にはおちよこが添えられていた。

キクが各人のおちよこに酒を注いで回り、正人の音頭で一同そろって飲み干した。

一輔は猛四郎と違って普段は酒をたしなむことはしないということだった。それに、この家では家族一人一人が膳で食事を取る仕来たりとなっていることを知った。座る位置は、男は部屋の方すまを背にし、女は厨房側のガラス戸を背にして着席する。つまり、ノリコ側からすれば、向こう側は一輔と正人、いろいろを挟んだこちら側はキクと自分という位置だ。

食後の後片付けはキクがノリコを制してみんなの膳を下げたが、明日からは一人一人に配膳するのは自分がしなければならぬ仕事なのだとなリコは思った。

食後、正人がこの家の間取りを案内してくれた。

居間と店舗とはガラス戸で仕切られ、店舗に入ってくる客を見ることができるようになっていた。

店舗は商品を並べる台や棚があった。品物はお世辞にも品数が多いとは言えなかった。その後ろは背の高いガラスケースが置かれていた。

店舗の隣は食堂になっていた。店舗の玄関とは別にここにも玄関が設けられていた。丸いテーブルが三卓、椅子が十二、三脚あった。それと石炭ストーブが置かれてあった。

「ここは〈富士見待合所〉とみんなが言ってくれている」

「富士見？」

ノリコが訊き返すと、

「今日は見えなかったが、天気の良い日は駅の玄関を出ると、富士山のような姿に似た羊蹄山が目の前に現れるからなんだ」

「この家はいつ頃に建てたものなの？」

「いや、おれもよく分からんなあ、この村で旅館を営業している兼松さんからおやじが購入したもので、まあ、駅ができた頃だろうなあ。最初から〈富士見待合所〉と言っていたそうだ」

正人の話はあやふやだった。

これらの食堂、店舗、厨房はいわば営業用で、それぞれ十二畳ほどが道路に面して一列に配置されていた。

これは同時に自分がどんな仕事をしなければならないかを語っていた。家事の外に、食料品や雑貨品の販売といった店番、食堂の賄いと接客などであろう。

これらの第一列の後ろに、いわば居住用に行っている各部屋があった。食堂の後ろは床の間付きの和室で、大きな仏壇が目立った。寒々とした部屋だった。

「毎日、おやじがここで、腹の底から絞り出すような大きな声でお経を上げるんだ、朝夕だぞ」

正人が言ったので、ノリコは高屋敷家の朝のお参りを思い出した。

「わたしたちも一緒に？」

「いや、誰も付き合わないよ、ばあさんだって腹の中で辟易しているのさ」

正人は素っ気なく言った。

正人は姑を陰では「ばあさん」と言っているのだとノリコは知った。正人はこの義理の母に何か含むものを持っているのだろうとノリコは思った。

次の部屋は六畳だった。

「ここがおれたちの寝室になる」

窓のない、暗い部屋だった。

ノリコが押入を開けてみると、空っぽだった。ちょうどいいと思った。渚滑から旭川に送られてきていた寝具一式があと二、三日で届くはずなので、ここに収納できるからだ。

店舗から土足のままで奥の方に通ずる廊下を挟んで、舅と姑の寝室があり、この手前が居間なのだ。これらが第二列であった。

第三列は、トイレ、風呂場、物置などが並ぶ。物置には石炭が入っていた。風呂は五右衛門だっ

た。

ストーブは食堂に一台だけで、居間の暖はいろりとこたつだった。しかも、この部屋は板敷きで、板と板との繋ぎ目には箸が落ちるほどの隙間があった。そこから隙間風が吹き上げた。猛四郎が恵子をあんな所にやったら、凍えてしまうと言っていたことを思い出させた。

田辺家の本家といっても、実態はじいさんばあさんが細々と営む小さな商いの家だったのだ。

翌々日は朝から天気がよかった。ノリコは正人の後ろに付いて屋根に上がってみることにした。切妻屋根で、見たところ、前が三分、後ろが七分の振り分けで傾斜は急ではなさそう。正人の話では、この家は平屋で約四〇坪と言うので、屋根の広さは五〇坪ほどになるのだろうか、と見当を付けた。

スコップを持ち、積雪を漕いで家の裏に回ってみると、この冬すでに二、三度雪下ろしをしたのか、ひさしよりも高く雪が積み上げられていた。これから屋根の雪下ろしをするには、その前にまずここに積み上がっている雪をさらに外側にはね除けなければならなかった。

屋根のてっぺんまで登ってそこから雪下ろしをしようと考えたが、半分も登らないうちに雪が深く進めなかった。同じ屋根であっても風の吹き回しのせいか、積雪は一様ではなかった。雪溜まりの場所では人の背ほどもあった。

雪下ろしといっても、屋根の中程よりも上になると、いったん屋根の下部に投げ下ろし、それを

さらに屋根の外にはね除けなければならないのだ。

正人はこういう作業になることはお見通しのようだった。

屋根のてっぺんにやっと辿り着いた。朝食後から取り掛かって正午近くまでかかっていた。背中も胸も汗びっしょりになっていた。

後ろの屋根の雪は処理できたが、まだ道路側の前の部分は残っているが、こちらは積雪が少ないので後回しにすることにした。

周囲を見渡してみた。

まず何といっても、羊蹄山に目が行く。富士山に似たコニーデの、孤高の頂が青空に突っ立っている。山頂から八の字をくつきりと描いた真っ白い裾がきれいだった。どっしりと構えているのが頼もしい。

ずいぶんと近くに見える。

「ここからどのぐらいの距離？」

「登山口までなら五キロといったところじゃないのか、標高は一八九三メートルだ」

「ここら辺りの高さはいくらなの？」

「うむ、二三〇メートルぐらいになるかな」

「小樽の海辺から蒸気機関車がずいぶんと頑張って上っていたものね」

この山の頂上から見下ろせば、ここら辺りはきっと山の真下なのだろうとノリコは思った。

「この駅前道路は真っ直ぐに山に向かっていているのね」

「いや、これを真っ直ぐには行けない、四〇〇メートルも行けばワツカタサップ川の急峻で大きな崖になる」

「ワツカタサップ川？ 列車がトンネルを出た所で渡った川？」

「いや、違う。あの川はペーペナイ川で、ワツカタサップ川は鉄山のある脇方の方から流れてきて尻別川という大きな川に注いでいる。ちなみに、こここの住所は東俱知安村字ワツカタサップ番外地というわけだ」

「ワツカタサップ川の向こう岸にはどう行くわけ？」

正人は駅前通りに直角に交わる道路を指差した。

「この道路を行けばいいんだ、橋が架かっている。ついでながら、この道路からこちら側が国鉄の敷地なんだ。それで、国鉄に毎年借地料を払っている。もともとこの辺りは京極農場で鉄道に寄付したもののなんだ」

「京極農場って？」

「四国の大名の京極家が未墾地の払い下げを受けて開墾したんだ」

「それで、東俱知安村にある駅なのに京極駅なのね」

道路を挟んだ真向かいの建物の玄関先に「日本通運営業所」という看板が掲げられている。それを正人に言っていると、

「ああ、丸通なあ。所長は和田さんだ」

道路を挟んだ斜め向かいは、何棟かの木造建築物が一〇〇メートルほど連なって建ち並んでいる。

「あれは？」

「あれは、八村産業といって、ジャガイモなどの農産物を貯蔵しておいて、東京とか札幌に出荷しているんだ。その倉庫で、手前の大きな家は、八村さんの自宅兼事務所だ」

反対方向に目を転ずると、遠くかなたには、銀色に輝く山並みが連綿と続くのが望みできた。

「無意根山とか、喜茂別岳とかの山々で、その向こうが先達て行った定山溪の山奥になる」

と、正人は問われるままに説明した。

ごく手前に見えるのは言うまでもなく、京極駅舎だ。そこから右に目を移すと、国鉄官舎の細長い長屋が雪に埋もれて建ち並んでいるのが分かった。

「他の所はおれ一人でやるから、おまえはもういいぞ」

正人が言い、ノリコは雪下ろしを切り上げた。屋根の雪下ろし作業はきつい仕事だと実感させられたが、おかげでこの近辺の地理がよく分かった。

*

ノリコが田辺家に入って間もない三月初旬の寒い夕方だった。

「こんばんは」という掛け声で、ノリコが店先に出ると、女の子の手を引いた、三十前後と見える女性が立っていた。太めの体格の人だが、姿形を一見しただけでこの村の人ではないことが判った。女の子の着ている外套からして、この辺では見掛けないおしゃれなものなのだ。

「いらっしやいませ」

いつもの型通りに応対すると、

「あなた、この店のお手伝いさん？」

と、問い掛けられた。

体格に似て、言うことも大胆な物言いだと思いながら、

「いえ、この家の嫁ですが……」

ノリコの返答に、

「というと、正（まさ）のお嫁さん？」

上目で見やり、続いて小声で、

「正が帰って来ていたのか」

とつぶやいた。

「失礼ですが、どなた様でございますか」

「いや、いまさら名乗るほどの人間じゃないんだけれど、一応、この田辺家の人間なんだけどね」と、ニヤリとした。

ノリコは、この女性は正人が汽車の中で話をしてた小樽の人と見当が付いた。居間の方に振り向くと同時に、ガラス戸を開けてキクが店に出てきた。

「シズ！ 無事で暮らしていたか。まず、中に入れ」

と、居間に入れた。

さっきまでいたはずの一輔は奥の部屋に引っ込んだのか、居間に姿はなかった。

シズは上がり口で、

「いろいろ御心配を掛けました」

一通りの挨拶を述べ、

「この子も六歳になりました。おじいちゃん、おばあちゃんにも見てもらいたいと思って……」
と、頭を下げた。

まだ小さいがシャンな女の子、とノリコは思った。

「ひとみ、おばあちゃんとおじさんに御挨拶をしなさい」

シズが促すと、

「一色ひとみです。よろしくお願いします」

キクの顔がほころんだ。

ノリコは正人と一瞬目が合ったが、言葉を交わさず、

「ひとみちゃんは何年生？」

ノリコが訊くと、

「四月に一年生」

ハキハキと答えた。

夕食は済ませていないというので、ノリコが鍋焼きうどんを早速こしらえるため、台所に入った。キクとシズは積もる話をひそひそと交わしている様子だ。

ひとみは鍋焼きうどんを食べ終えたと、コックリ、コックリとし始めた。眠たくなったようだ。ノリコとシズが布団を奥の八畳間の押入から取り出そうとして、ノリコが寝室に使っている六畳間に入るなり、そこに敷いてあった布団を見て、

「新しく入った嫁が、田辺家の一番いい布団を使うものではない」

シズがノリコにつっけんどんに言った。

「これは、わたしが嫁入り道具で持ち込んだ布団です」

ノリコが即座に答えた。この布団は渚滑（現、紋別）で勲と所帯を持つために購入したもので、義兄の賢が送り届けてくれたものだ。

「あー、そう……」

シズは平然とそれだけ言った。

後ろにいた正人が、

「言い掛かりを付けるな」

シズに向かって声を荒立てた。

シズの来宅をおもしろく思っていなかった気持ちが正人の口を衝いたのだ。

シズがこれに反発し、

「言い掛かりじゃないよ、嫁たる者の心構えを言っただけよ」

と言り返した。

「そもそも出戻りするなら、あらかじめ連絡を入れてからにしろ」

「自分の実家だものそんなのいいじゃない」

と、あれだこれだと諍いが始まってしまった。

「そうかい、そうかい。田辺の血を引く人間でないから、邪険にするんだ。こんな家にいられるもんか」

シズは最後にたんかを切り、

「俱知安行きの次の汽車は何時？」

ノリコに向かって訊いた。

「十九時二十八分ですが……」

シズは腕時計を見て、

「ちょうど、間に合う」

と言に残し、娘の手を引き、そそくさと家を出て行った。

正人は引き留めようとしなかった。

キクの顔色がにわかに変わった。

「シズは年老いた親を手助けするために来たんだぞ、それをむげに追い出した」
不満たらたらに、

「せっかく、来た者を追い返した」

と、何度か愚痴った。

ノリコはいやな予感がした。

案の定、後々その鬱憤の矛先はノリコに向かうことになる。

「なあに、子どもの面倒を看てもらうつもりで戻ってきたんだろう」

正人は冷ややかだった。

「シズさんは何歳なの？」

「おれよりほとんど一年上になるんだが、あれが十二月生まれで、おれが一月生まれなので、学年は同じなんだ。みんなに冷やかされたもんだよ、姉弟で性格がずいぶんと違うなって」

と言いつつ、続けて、

「シズは田辺家とはまったく血縁関係がなくて、一輔キクの養女になっているんだ」

「シズさんが結婚して家を出たのは、六年前のことになるのね、ひとみちゃんの年齢から言う」と

「いや、それが違うんだ。シズの結婚のことはおれもよくは分からないが、ひとみは一色の本当の

子ではないことは確かなんだ」

ノリコはこれらの事情が飲み込めずに正人に問い直してみたが、

「おれもね、その辺りの経緯は実際よくは分からないんだ」

と、繰り返すばかりだった。

ノリコは正人の口振りから、おれは関知するところではない、シズのこととは話題にしたくない、と言いたいのだろうと思った。

*

二月の半ばに入ってから、ここではまだ雪はしんと降り積もった。朝起きて一番の仕事は、店舗と食堂の玄関先の雪かきだ。もはや雪かきでは追い付かず、積もった雪は踏み固めて通路を造り、とにかくお客さんが入れるようにしなければ、商売にならない。これが済んでから朝食というのがこの家の習わしだった。

食事はキクが浜育ちのせいか、魚も野菜も混ぜ合わせた汁物を三日にあげず作るが、山育ちのノリコにとってはどうしても苦手であった。魚は魚でしっかり火を通すなり、煮込むなりして食べたが、そうした注文を言うわけにもいかず、ノリコは食事の用意もなるだけ自分の手で行うようにした。

食堂は投げ込みの石炭ストーブがあったが、居間にはストーブはなく、切り炬に炭を燃やすだけの暖房だったので、仕事の合間にこたつで手足を温めた。こんな家はノリコにとってはじめてだった。いつの間にか、足にはしもやけ、手にはあかぎれができていた。

シズが残していった付けは、早速にやってきた。

夕食のときを狙って、親がいない娘はこんな事もできない、あんな事もできないとキクから難じられた。その一つが算盤だった。事実、ノリコは算盤の使い方を知らなかった。

「算盤ができなくて、どうして商家の嫁が務められる」

「おまえ、そんなこと、言うな。育ったところが違うではないか。親がいないからと言ったって、早く亡くなったのだから本人のせいじゃない、いちいち言うな」

一輔はかばってくれたが、口惜し涙が出た。食べ物も喉を通らない。

ここの家の算盤は大きな長方形の木箱で、横に中仕切りの棒があつて、一桁の珠が上に一個、下に五個あるものだった。

正人から親指と人さし指の使い方など、手ほどきをしてもらった。一、二、三、四、五、六、七、八、九と一桁ごとに珠を置き、これを九回繰り返すと、一がずうっと八桁続き、次は零で最後が一というふうにきれいに並ぶから、これで親指と人さし指が敏捷に動くように練習すればいいと教えられた。

店を閉めた夜、居間で手を温めながら練習を繰り返した。

時間を忘れて算盤に熱中していると、

「いつまでやってるんだ、気になって眠れん、いいかげんにせんか」

と、ふすまの向こうから一輔の声が飛んできた。

ノリコが観察するところ、一輔とキクは仲のいい夫婦とはいえなかった。よく諍いをしていた。例えば、一週間に一度行う食堂の煙突掃除もそうだった。煤の扱いをどうするかで毎回のようになりがみ合った。二人がああだ、こうだと言って時間を費やしていたが、ノリコは寒いけれども火を入れる前に一人で片付けた。煤を辺りに飛び散らせずに手際よく処理できるのだ。

こうしてノリコが担う仕事の範囲はだんだんと増えていくばかりだった。

正人は、これまで自家製造していた羊羹が水っぽいものだったのを、寒天とザラメを十分に入れ、火を小さくして煮詰め、固く練り上げた新製品を作った。これを、太く縦長に切り、ウィンドウの中に交互に積み重ね、「マクラギ羊羹」と名付けた。これが意外に人気を呼んだ。これに気をよくしたのか、正人はパンを自家製造すると言い出した。これからは食堂よりも西洋食品を店で販売する方向に力を入れていくのだと力説した。一人前のパン職人になるには通常二、三年の修業は必要だと言われたが、なるべく早く帰りたいと意気込み、三月末に、小樽で評判の高い「亀屋」というパン屋に見習いとして住み込むために出て行った。

*

正人が小樽に向いて間もなくの昭和十五年四月一日をもって、「東俱知安村」という村名が「京極村」に改称された。

この村の始まりは何と言っても明治三十年の京極農場にある。香川県の丸亀藩主だった京極高德が俱知安村のワツカタサップ原野約八〇〇町歩の貸付を申請し、翌二十九年許可となって、京極農場を開いた。

この広大な農場は、尻別川の流域とワツカタサップ川の下流地帯にあつて、この地区の主要な平坦部の全域に及ぶもので、耕作地として最も恵まれた条件の場所であつた。

この三年後、北海道庁は京極農場の一部に返還を求め、公設市街地の設定を行った。翌年には郵便局も設立され、その名称を東俱知安郵便局としたので、市街地も「東俱知安市街」と呼ばれるようになった。

さらに、ペーペナイ原野が北海道庁によって拓植企画され、ここにも入植が開始された。俱知安本村との交通は当初羊蹄山の麓を巡った道路のみであったが、ペーペナイを通る道路（現、国道二七六号）ができ、交通の便もよくなった。

田辺家はそうした状況を知って、明治四十年にペーペナイに入植したのだ。

明治四十三年に俱知安村から分離独立し、「東俱知安村」となった。

その後、京極農場が開放され、華族京極家を称える趣旨と鉄道の停車場がすでに「京極駅」と名付けられている事情から、村名が京極村となったのだ。

＊

ノリコにとって、はじめての春となった。こんな大雪では春になっても融けないのではないかと心配していたが、春風が吹き始めると、みるみるうちに減っていき、黒い地面が現れてきた。それとともに、京極駅の国鉄敷地は存外に広いのだとノリコは知った。

家の裏の畑地も国鉄敷地であったが、許可を受けないままに花や野菜などを作っていた。この先は「春日川」という小川が流れていた。線路の下を潜って流れてくる。じかに飛び越えて行くことはできないほどの川幅があった。源はペーペナイ川で、ここら辺りの農地に灌漑用水として利用されているようだ。これも京極農場が掘った水路なのだ。この辺りの融雪水はこの小川に流れ込んでいた。

川向こうは国鉄官舎が建ち並んでいる。京極駅には駅員が一〇名ほどいて、他に保線区があつて線路の保守や補修などを行う鉄道員たちが住んでいた。二、三軒の長屋造りがずらりと並んでいた。一番奥が駅長と助役の官舎で、これは一軒家であった。これらの鉄道官舎には、年の暮れにはお歳

暮として一軒ごとに手拭いや石鹼を、夏にはうちわを配る習わしなのだ。

道路一本隔てて日本通運営業所の事務所（通称、丸通）があつて、鉄道貨車に荷を積んだり、卸したりする作業員も多かった。斜め向かいには八村産業。ジャガイモなどの農産物卸問屋で、大きな倉庫を何軒も持ち、農作業や出荷作業の日雇い人夫も大勢抱えていた。

駅の構内には貨物用の専用引き込み線が敷かれていたし、蒸気機関車を方向転換させる円形の操車ヤードもあった。無蓋貨車が何台も連結して盛んに往き来していた。これは脇方鉱山が産出する鉄鉱石を室蘭の製鉄所に輸送するための専用貨車だった。道路に雪がある間、駅前の広場は山奥から切り出した丸太を積んだ馬そりで長い列ができた。駅構内やその周辺に倉庫が建ち並んでいたし、丸太や石炭を一時保管する敷地も広がった。

国鉄を利用する乗降客も多かった。隣村の喜茂別に往き来する人は京極駅で乗り換えをした。これらの乗客を相手に田辺の家は生計を立てていたのだ。ソバ、鍋焼き、天ぷらうどん、天井、親子丼など、飲み物はビール、盛っ切り酒、熱かんも出した。駅、丸通、八村産業に岡持ちで届ける出前の注文も受けた。

田辺家にはこの国鉄敷地とは別に畑地が二箇所あった。家から七〇メートル離れた場所と三〇〇メートルほど離れた場所で、合わせて一町歩ほどの面積だった。ここには昨年まで農作を八村産業に一任していた。ジャガイモを栽培し、収穫物は山分けだった。これを正人が自分たちで耕作すれば、まるまる自分のものになると言い出した。作物はアズキが選ばれた。あんや羊羹の原料になる

からだった。自分たちで耕作すると言っても、結局はノリコの労力に依存するものになった。アズキを栽培した経験はなかったが、ともかく農家出の嫁ということでノリコに割り振られた。

小樽にパン製造の修業に出ていた正人は時たま帰宅した。試作品だと言って、いろいろな珍しいパンを持ってきた。正人がしばしば旭川に行っていたらしいことはノリコもそれとなく感じていた。何としても家の普請を成し遂げ、恵子を連れて来たい、その一念が正人を小樽に赴かせた理由であったに違いない。あんパンやクリームパンや子どもが喜びそうなお菓子を携え、わが子のいとしい笑顔を愉しみにして旭川に足を運ぶ正人の姿をノリコは想像した。それは痛いようなほろ苦いような感情となってノリコの胸に迫った。自分にも子どもが欲しいという気持ちが強くなった。

*

季節が盛夏になって、舅と姑は虫干しを始めた。風通しのいい寝室に古新聞を敷き、その上に押入から甲冑みたいなのや脇差、掛け軸などといった古色蒼然とした時代物を取り出して並べた。毎年の行事としているらしい。

我が家の先祖は高松藩の士族で云々と一輔は古い田辺家の言い伝えを語って聞かせたい様子だったが、ノリコはこうしたものに関心がなかったし、それよりも目の前の仕事に追われてそんな話に

応対する余裕はなかった。

高屋敷家から勲の石碑を建てたので、ぜひお参りしてほしい旨の手紙が届いた。この八月二十三日は勲の一年忌にあたる。この日正午に石碑の除幕式を行うとあった。ノリコも気にしていたところだった。

ノリコは前日に高屋敷家に泊まり、翌日のお披露目に参加して法要に出ることにした。

ノリコは高屋敷の家を出て八カ月を過ぎたばかりであったが、中愛別の風景は何か子ども頃の昔を振り返っているような気がしてならなかった。

高屋敷家では、里子はぐんと背が伸びていたし、泣き虫だった登はやんちゃ坊主になっていた。キミは小学教師として相変わらず頑張っている様子だ。姑のタカはさすがに腰の曲がりが深くなったように見受けられた。

夕食はトウキビやスイカなど自家栽培の収穫物を食卓に並べ、歓待をしてくれた。

食後に兄嫁のウタと二人っきりとなったとき、

「例の千人針のことなんだけど、理（さとる）兄がノリコさんの新しい住所を教えたらいいのよ。披露宴で旭川に出向いた当日に、片腕のない青年がノリコさんを訪ねてきて、理兄が応対したわけよ。以前、喉仏を持参してくれたノモンハン帰りの人だと思うんだけど、その人に問われるままにしゃべったみたい。普段は、お客さんが来たときはわたしが出るんだけどねえ、よりによって：

…

と、こっそり耳打ちしてくれた。

高屋敷家の墓は家から程近い裏山にあるが、これに隣接して勲の石碑が建てられたのだ。

正午、碑の披露式だ。

これを手掛けた石屋が神主を伴って待機していた。

分家の人々も集まった。

今日は金曜日でキミと子どもたちはここには来ていないが、親族十数名が集まり、ノリコは賢の指示で、タカ、ウタなどと一緒に最前列に並んだ。

石碑の前面には上から下まで白い布が掛けられてあった。石の台座を含めると高さは二メートル以上もありそうだ。

ウタが水を供え、ノリコは自家製の羊羹を台座の上に置いた。

石屋が進行役を担い、賢が代表して除幕のひもを引いた。黒い御影石がゆっくりと姿を現した。びっしりと漢字が一面に彫られていた。

続いて、皆が平頭し、神主からお祓いを受けた。

式が済み、神主が退いて、皆が石碑の文面をあらためて仰ぎ見た。

碑文の本文は六行で、上から下まで難解な文章が隙間なく並んでいる。

昭和十一年伍勤豫備十三年應召伍長園部々隊第四分隊長二月

下旬出征十月任軍曹十四年芦塚部隊青柳隊附六月ノモンハン出動

七月上旬隊長以下多数戦死澤田隊入揮下越死線幾度八月梶川

隊大隊別働隊任分隊長ハルハ河進撃更ホルステン越河敵大機械化兵团

交戦及旬日重死闘友軍戦死者不知數此間擲砲彈振猛威八月廿三日

正午敵迫撃砲彈雖受身觀測器機不離散花新巴爾虎左翼旗之地

その後、「叙功六級勲七等 歩兵曹長高屋敷勲 享年二十有五」とあり、その横に今日の日付が彫られてあった。

勲がまるで歴史の教科書に出てくる勇士みたいになってしまった、とノリコは思った。

ぎつしりと厳めしい漢文で、ノリコは全文を読み下すことはできなかったが、所々に出ている字句から勲の戦績を称えるものであることは読み取れた。目を凝らして、「ノモンハン出動」「ハルハ河」「ホルステン」「八月二十三日正午」「散花」「二十有五」「曹長」といった文字を拾い読みし、頭の中に刷り込んだ。

ただ、最後の「新巴爾虎左翼旗」はどうしても読めなかったし、その意味も分からなかった。そのことを尋ねると、賢は文字を指差しながら、

「〃シン ハルコ サヨクキ」と読み、〃シン〃は文字通り〃新しい〃ということ、〃ハルコ〃はもともと蒙古族の内のハルコ部族の名称なんだがこれに漢字をあてはめたもの。〃サヨク〃は〃左の方〃で、この〃旗〃という漢字は地方とか地区といった行政区域、つまり日本でいえば県とか郡にあたるものなんだ」

と、教えてくれた。

愛別だけでも六名がノモンハンで戦死しているが、それぞれの家でこのような立派な石碑を建てて祀っているわけではないだろう。やはり、この石碑は高屋敷家の特別な計らいによるものなのだとノリコは胸が熱くなり、感謝の気持ちでいっぱいになった。

続いて隣の高屋敷家の墓に全員で手を合わせた。

法要も無事に終わった。

ノリコにも「お土産に」と広い口径の大きなビンに密封された蜂蜜が渡された。

「駅までこれを持ち歩くのはたいへんよ」

ウタが言い、賢が馬車で送ることになった。

その別れ際になって賢が、

「旭川で渡せなかった残りのもので、いつか機会を見て直接渡そうと思っていたものだ」

と、素っ気なく言いながら紙包みを持たせてくれた。

ノリコは正人と祝言を挙げたときの五〇〇円だと気付いた。正直言っておりがたかった。この秋

に取り掛かる自宅の普請に役立てることができると思ったからだ。一〇〇円というのはひと月の家計費を賄うことができる金額なのだ。

*

正人は九月末でパン製造の修業を終えた。

早速、家の中にパン釜を据え、材料を仕入れ、パン製造を開始した。といっても正人が手掛けたのは、食パンではなく、あんパン、クリームパン、ぶどうパンなどの菓子パンだった。

春に蒔き付けをしたアズキは思い掛けないほどに獲れた。むしろを敷いて天干し、乾燥させて穀竿でたたき、実を取り出した。虫食いなどは取り除いた。

それを大きな釜で煮た。釜の底が焦げ付かないようにとボートのオールをひと回り小さくしたような大きなへらでかき回したが、アズキ液は煮詰まってくると重くなってきて力を要した。羊羹は煮詰めたアズキ液に砂糖や寒天を入れ、それを長方形のブリキ製のトレイに流し込み、冷やして固まってから取り出した。あんも次々と作らないとならない。アズキ液を大きな布袋に注ぎ、それを二つ折りに重ね、手で押して水分を抜くといった作業もノリコの仕事だった。

パンを陳列する大きなガラスケースを店に置いたが、いくら製造しても次から次と売れてケースはまたたく間に空になった。珍しさもあったのであろう、予想以上によく売れた。ノリコは以前に

まして忙しく働かなければならなかった。

氷で冷やす木製の冷蔵庫も購入した。イースト菌を保管しておくためだ。外側の周囲に藁が入られていて、内部の収納部分は小さい。冷蔵庫に入れる氷は街の室井商店で売っていて、頻繁に買いに走らなければならなかった。この氷は羊蹄山の天然水で、冬季に湧き水が凍結して氷となったものを切り出し、氷室に保存しておいたものだった。

正人はパンの外に羊羹、最中、中華まんじゅうなども手掛けた。「マクラギ羊羹」ともども売り出した。中華まんじゅうというのは素地を長円形のフライパンで表側をどら焼きのようにきつね色に焼き上げ、裏に甘いこしあんをたっぷり載せて二つに折り重ね、三日月の反りに似せて形を整えたものだ。最中は殻を購入し、中にこしあんを入れた。これらも自家栽培のアズキから作ったものだ。

こうした品物をお客さんに渡すときは、薄皮（木材を紙のように薄くした横長の包みもの）に包み、紙ひもを掛けた。これらの販売もノリコが行った。

アズキの自家栽培がもたらした恩恵がもう一つあった。予期しない豊作だったので、余ったアズキで枕を作った。一輔とキクにも使ってもらった。細めの頭の一輔は頭の座りがちょうどいい具合に収まると言い、幅広頭のキクはアズキの冷ややかな感じがよいと喜んでくれた。ノリコにとっては、自分の存在を認めさせる効果にもなった。

この秋、ノリコはアズキ作りの他に野菜作り、漬物作りでもノリコは実績を稼ぎ、舅や姑に一目

置かせるようになった。

キクはもともと能登半島の輪島の出身で、正月の雑煮はしょうゆ味の四角餅。一方、一輔は高松が故郷でみそ味の丸餅。しかもその中は甘あんが入ったもの。舅はともかく白みその味で野菜もたっぷり入ったものが食べたいと言い、キクは正月早々からみそとは縁起が悪いと言う。一日置きに変えてみたが、二人のお国自慢は収まらない。ノリコに一計が思い付いた。子どもだった頃の記憶が蘇った。それは「塩味の粒あん」だった。名寄の平岡家は香川県三豊郡の出で、この地方の風習だったのだ。

これを試しに食べさせてみると、一輔は大賛成だったし、キクもこの塩あんともその味は合っているといい、粒あんは通じに効くと評価してくれた。こうして正月の雑煮はこの「塩味の粒あん」に限るようになった。

「何でもできる嫁」と一輔が言ってくれるようになった。「嫁は国衆からもうもんだ」と盛んに口にした。小樽で病死した先妻は高松の隣村に住んでいた三歳年上の恋女房だったらしいが、この先妻は郷土の正月料理を得意としていたのであろうし、朝夕の熱心なお経もそんなところに関係があるのだらうとノリコは思った。

*

ノリコにとって京極二度目の春がめぐってきたが、この四月に生活必需物資令が公布され、食料品をはじめ主要な生活品の入手や販売に統制が敷かれることとなった。だからといって、ノリコの働きづめの生活に暇ができるわけでもなかった。

春の連休後のことだった。その日も朝早くから立ち回っていたが、ノリコは腹部の萎えるようないやな感じとともに今度は痛みにおそわれた。トイレに入ると、子宮からの異様な出血だった。感じとしてはゼリー状のようなものだった。何かの異変が自分の体に起きているのか、不安になった。正人に話すと、どうせならしっかりした病院で診てもらえばいいだろうと言い、少し考えていたが、小樽の協会病院での診察を勧めてくれた。

その診察の結果は一種の流産ということだった。その原因はホルモンの分泌が十分でないため、子宮が通常の大きさに成育していないからであるという見立だった。このままではたとえ妊娠してもすべて流産してしまうので、今のうちに治療をしておかないと子どもは一生不可能であるという結論だった。

医師は明言しなかったものの、旭川で受けた手術は完全なものではなかったのだ。

帰宅して医師の診断結果を話すと、

「大げさな、それどころではない。この忙しいのは分かっているのに」

キクが開口一番に不満を露わにした。

正人がその場で、

「いいから入院して来い」

と、押し切ってくれた。このときほど、正人を頼もしく思ったことはなかった。

二人だけになって、

「医者が二週間の入院が必要だと言うのなら、三週間あればいい。三週間と言うなら四週間あればいい」

と言ってくれる正人の言葉が嬉しかった。

手術は無事に終わった。

その数日後に、ノリコは思い掛けない人の見舞いを受けることとなった。シズだった。一年ほど前のあの剣幕もすっかり忘れているかのように、シズの態度が一変していた。言う言葉は荒いが、言ったことを根に持たない人柄なのだろうか、それとも、もともとカラツとした浜育ちの人の性格なのであろうかとノリコはいぶかしかった。

シズは自分の生い立ちをどこからか聞き知ったようだった。お見舞いの言葉の中で、「あなたの育ちもたいへんだったのね」と言ったからだ。

「退院になっても、すぐに田舎に帰らない方がいいよ。通院しなければならぬと言って、一週間ぐらいあたしの家で遊んでいきなさいよ」

と、誘ってくれた。

退院の日が決まると、シズから言われていた電話番号にダイヤルを回すと、大家さんと思えるおじさんが取り次いでくれた。

「朝、迎えに行くから」と朗らかな声だった。

一泊させてもらうことにした。

その日はシズが手配したタクシーに便乗し、富岡町の自宅に向かった。丘の上にあった。お世辞にも大きな家とは言えないものだった。

「借家なんだけど場所が気に入って、ここに住んでいるのよ」と、玄関先でシズが言った。

実際、その家の居間からは小樽の港がよく見えた。

机の上には大きな双眼鏡が置かれていた。

「これで港に入ってくる貨物船を観察しているのよ」

旦那は大きな船に乗り込んでいるコックさんと言う。旦那が乗る船の入港や出港をチェックしているらしいのだ。

書棚には背表紙に石川啄木、与謝野晶子といった作家名が記された本が何冊も並んでいた。

シズは昼食にスパゲティを料理してくれた。スパゲティを前にしてシズは十字を切った。

この所作を見ていたノリコに、

「あなたははなくていいのよ、田舎の年寄りに知れたら大目玉を食ってしまうわね」

シズは笑いながら言った。

食後には、コーヒーをいれてくれた。これほどいい香りがする高級なコーヒーはノリコにとってはじめてだった。

シズは机の上に飾ってある娘の写真を指差した。

「ひとみはマリア幼稚園に預かってもらって、それでわたしは働かせてもらったのよ。マリア幼稚園はカトリック富岡教会に隣接してその付属幼稚園といったもののなの。この教会の礼拝堂はとても美しいステンドグラスで有名なのよ。一度見せてあげたいんだけど……」

ノリコは一瞬応えに窮した。

シズはノリコの様子を察し、

「一色はさ、何一つ訊きもしないで認知してやるというものだから、それだからさ、しかたないのよね」

話題を替えて言った。

ノリコはそこまで言うシズにそれ以上の事情を尋ねるわけにはいかなかった。

帰宅したノリコはシズの家で一泊したことを正人に話してみた。

「シズさんの家には詩人や小説家などの本がかなりあって、わたしに自分から洗礼を受けたと言っ

てたのよ」

「シズがクリスチャンになったとは知らなかったが、ある意味で解る気もしないではない。小樽には富岡教会というカトリック系なんだけど、ステンドグラスがきれいな教会があるんだ。シズはおそらくそこで洗礼を受けたたんじゃないのかな」

「その教会にあなたも行ったことあるの？」

「おれの場合は小学校一、二年のただの印象にすぎないが、シズは父親の名も明かせない赤子を抱き、自分の宿命に感ずるものがあつての入信なんだろう」

正人がシズに対してあまり好感を抱いていないはずなのに、感慨深く肯定的な物言いをしたのはノリコにとって意外だった。

「シズが文学作品を読むのは、信人兄の影響があるかもしれない」

「信人兄って、旭川の叔父さんが師範学校に通わせてやったと言っていた人のことね」

「おれより四歳年上で、勉強好きで読書好きだった。おれは勉強嫌いで将来画家になりたいんだとおやじに言ったら、何を馬鹿なこと言ってるんだと叱られてしまったが、信人兄は小学校を卒業した年にちょうど北海道庁立倶知安中学が開校してこの第一期生として入学しているんだ。京極からは五名だけだった。マントをまとして闊歩する姿はみんなからうらやましがられた。その後、二年間叔父の家に寄宿して旭川師範に通ったわけで、このときことを叔父は恩着せがましく言っているんだ。卒業後は喜茂別小学校の正教員になった。蓄音器や幻灯機といった新しいものに積極的で、

進取旺盛な気性だったんだが、残念なことに、若くして死んでしまった」

「いつのこと？」

「ああ、ちょうど十年前になるなあ」

「何の病気？」

「気胸とか言っていた」

「肺結核のこと？」

「いや、違う。外傷性のものもあるらしいが、信人兄の場合はそうではなかったようだ。肺を包んでいる胸膜から空気が漏れて肺が縮んでしまう病気で、二十歳前後に案外多いらしいんだ」

と、正人は言い、

「どうも、わが家系は呼吸器系が弱い体質かもしれないなあ」

「信人兄さんは、いくつでしたの？」

「満で二十二歳にもう少しというところだった。それで話はシズのことなんだけど、シズは信人兄のそうした一面に影響されたというか、自分で受け継いだというか、まあそういうことだ。それにシズはもともと性格が外向的で物事に怖じない、まかせていて何かと発展家なんだ。まあ、一種のモガなんだろうな。カフェなんかで女給の仕事もしていたんじゃないのかな、都会生活向きの女さ」

ノリコはまた一つこの家の一端を知ることになった。複雑な人間関係のもとに、いろんな出来事のある一族なんだとつくづく思った。

それから二カ月ほど経った七月十三日、正人に対し、昭和十六年七月十八日十三時歩兵第二十六連隊に入営せよ、との召集令状が役場の三木兵事係長によって届けられた。

歩兵第二十六連隊というのは渡島、松山、後志を召集区とし、函館市に連隊区司令部が置かれていたが、衛戍地は歩兵第二十八連隊の場合と同じく旭川であった。

この頃すでに中国での戦況は泥沼状態になっていて、出征の大仰な見送りは差し控えるようにという自粛が出されていた。勲の場合とは大違いだった。

ノリコは京極駅で正人を見送った。ノリコにとって、三年半の間に二人の夫を戦場に送ったことになる。

田辺家は大黒柱の働き手を失った。パンの製造販売は諦めざるをえず、その他の菓子類はノリコが見よう見まねで覚えたものだけを細々と続けることとなった。

十

正人にとってまさに晴天のへきききだった。世の中が国民総動員の戦時体制に進んでいることに無関心ではなかったが、まさか満二十七歳六カ月のこの自分に召集令状が来るとは予想だにしていなかった。

まずもって最初に頭に浮かんだのは、この秋に着手する予定の自宅の普請だった。恵子を迎えるために叔父と約束していたものだ。建築業者の山上組とはすでに話を付けていたが、これはいったん御破算にしなければならないということだ。

次に自分の体力のことが不安だった。この年齢でいまだ、二等兵だ。こんな老兵まで狩り出されるということは、どういうことなんだろうか、いぶかしかったが、どうなるものでもない。

正人がどんな気持ちで歩兵第二十六連隊の営門に向かったのか。

後日になって見出したものだが、それを探る手掛かりとなるものが残されていた。薄っぺらなB5版のノートである。途中十数ページにわたって切り取られていたが、正人がペン書きしたメモ部分はそのままだった。この一部を引用する。

正直、自分は面食らい、いら立った。皆が自分を心配するので、自分はできる限り自信に満ちたそぶりを見せた。

今日の日を故郷の駅で皆と別れてきた。

これで父母とも故郷の山河ともお別れだ。再び帰る時というものがあつたとすれば、それこそ…。

はたして営門が吾々を待っていた。

人々が次から次へと入り混む。

様々な事が頭の中に交錯する。今日からは何せ別世界の生活だ。兵隊なのだ。

練兵場の側で時間の来るのを待つ。太陽がますます照り付ける中、案内が現れ、吾々の付添人を集めて訓示。次に、兵隊が来た。吾々は集められて第二十六連隊の営門に案内された。見送りに来てくれていた清人たちともここで別れた。

営庭で整列し、検査を待った。順次、検査が進む。焦慮に駆られたが、案外に検査は簡単に済んだ。

分隊や兵種の区別がなされ、自分は部隊兵舎の二階に収まった。服を着替える。食事が運ばれる。分隊の軍曹から挨拶を受ける。

・七月十九日

ようやく軍服姿で営門を出て練兵場へ。急こしらえの馬繋場で自分たちの受持つ馬匹が決められた。

・七月二十日

毎日厩の使役で汗だくだくだ。

馬の運動、飼付などの慣れない仕事だ。吾々の仲間でもずいぶんの巧者がいる。自分の馬は格別に大きいヤツだが、右前足が悪いのか乗るとくらくと前にのめくる。困ったヤツだ。今後が思いやられる。兵にしても、馬にしても、今はもうおんぼろしか召集できないのだろう。

・七月二十三日

新しい服装で練兵場を行進する。

軍装検査もどうやら済んだ。

兵隊生活の苦しみを感じる。また、愉快なこともある。無理な仕事と思っても皆でやれば案外早く片付く。

酒保（筆者注：兵舎内の売店のこと）から牛乳を買って飲むのが何よりもうまい。

・七月二十六日

午前零時出発だ。前夜の支度でゴった返しの兵舎に不寝番で立つ。廊下の薄暗い電灯が辺りを照らしている。

刻々、時を打つ腕時計が運命を担っているように思える。

「行く人の心に走る夢かしこ」

銃剣を握っている手に熱い涙、ポロリと落ちる。

・七月二十七日

午前零時。吾々は部隊兵舎に最後の敬礼をして別れた。庭は暗いが隊伍を整えて営門を出た。

「吾々はいくぞ営門帰るまで」

軍靴も軽く練兵場に馬を引き出し、馬具を取り付け、停車場に向けて行軍する。

停車場に到着する頃、ようやく明るくなってきた。定刻の列車に乗り込むまでに、馬を貨車に積み込む。見送り人もなき無言の出発だ。

以上、入営から満州に出征するまでの十日間ほどの状況をメモ書きしたものである。この記録はここまでしかないが、北海道庁が保存する正人の軍歴によると、この後は次のようになっている。

七月二十七日 旭川出発

八月一日 神戸港出帆

八月三日 釜山港上陸

八月六日 鮮満国境図們（ともん）通過

八月八日 東安省密山県西東安着。歩兵第二十二連隊に転属、第一大隊本部に編入

九月二日 左肺門浸潤にて東安第一陸軍病院西東安分院に入院

要するに、正人は満州に渡ったが、軍隊生活が二カ月も持たずに、肺浸潤から肺結核になって入院となったのだ。

満州の東安市とは、歩兵第二十二連隊とは、何か。

東安はソ連との国境に近く近い東部満州にあって、昭和十四年に東安省の設立とともにその公署所在地で、人口五万弱、そのうち一万人弱が日本人で、満州国の中でも新しい都市であった。対ソ国防上の要地で、第五軍司令部が置かれ、第二十四師団が配備されていた。

歩兵第二十二連隊は愛媛県松山市で編成された部隊で、昭和十三年満州に派遣され、東安に駐屯し、昭和十四年に第二十四師団に編入された。対ソ作戦の有力な部隊として東部満州の西東安に駐屯して警備と訓練に明け暮れた。

正人は、第一期検閲までの約四カ月にわたる厳しい初年兵訓練の途中で挫折したのだ。それも、何ということなのか、満州の駐屯地に着いて、一カ月も経たないで入院生活となったのだ。これじゃ、病人になるために兵隊になったようなものだ。

軍事訓練に体力が付いていけなかったわけだが、そこには初年兵に対する軍隊特有の制裁があったであろう。少しのミスでもことさらに責められ、馬を取り扱う兵ならば、馬糞を口の中に押し込められたとか、鞍を背負わされて兵舎の周囲を何度も何度も馬に代わって走らせられたとか、そう

いった古兵の過酷な、見せしめに等しい体罰が正人を病人に押しやったものに違いない。

以後、正人は七カ月に及ぶ陸軍病院生活が続くことになった。

では、正人がこのとき病に倒れなかったら、無事に我が家に帰宅できたのであろうか。その可能性はほとんどなかったと言わざるをえない。

正人が重患となつて内地に帰還させられた後、正人が所属していた歩兵第二十二連隊は、太平洋におけるアメリカ軍との戦いが不利になって、メレヨン島に派遣されている。メレヨン島は、グアム島とパラオ諸島の中間に浮かぶ小さな島。この島にアメリカ軍が上陸することはなかったが、激しい空襲とさらには潜水艦によつて食糧や武器などの補給が根絶され、餓死や病死した戦士が約九割に達している。また、歩兵第二十二連隊の他の兵士は沖縄に送られ、昭和二十年六月、沖縄戦で玉碎しているのだ。

正人の場合は、歩兵第二十二連隊第一大隊に配置されていたので、病気で送還になっていなければ、おそらくメレヨン島に派遣され、そこで餓死または病死となった確率は極めて高い。

正人はその後、牡丹江第一陸軍病院、旅順陸軍病院へと転院している。結局、日本に送還されることになり、昭和十七年三月二十六日大連港を出港。航行中は重患を示す赤紙を張った個室に入れたが、かろうじて本国の土を踏むことができた。同月三十日宇品港に上陸し、直ちに広島陸軍

病院に収容された。同時に原隊の歩兵第二十六連隊に転属となった。

ここで一カ月余りの入院生活を送り、広島から旭川の陸軍病院に移送されることになった。

正人はノートを開き、このときの感動を記している。

昭和十七年五月七日、新緑の広島を立った。三月三十日より今日までの広島での生活はずいぶんと長く感じられた。

列車の一隅に陣取る北海道行きの患者は皆移送の嬉しさに顔をほころばせて元気いっぱいだ。故郷に帰ることのみを考えている毎日の生活だったから無理もない。

窓辺に映る初夏の山河、その遠近の風景は鮮やかな緑で、昨年七月に出征したときの風景が思い出される。

十一

ノリコは正人が出征して身边がにわかに寂しくなっていたが、その三カ月後に一つだけ嬉しい出来事があった。

昭和十六年十月十二日に、胆振線縦貫鉄道が全線開通となったことだ。これに合わせて古木昌彦が樺太鉄道からこの鉄道に転職してきたのだ。鉄道勤務の経験者を求めているのに応募して採用さ

れたのだ。ひとまず伊達紋別駅（現・伊達駅）に配属となっていたが、樺太鉄道勤務の実績が評価され、間もなくして喜茂別駅の助役に抜擢されたのだ。昌彦の妻フミ、実母カノ、兄吉彦の遺児秀彦の三人を伴っていた。

カノは若いときのような力仕事はもうできなかったが、ノリコが忙しいときに家事や店番の手伝いにやってきた。日帰りしたり、二、三日泊まってゆくこともあった。あんなや羊羹を作るときなどは、ノリコにとってありがたい人手であった。カノにしても、それは気楽な息抜きだった。息子の昌彦夫婦には子どもがなかった。子育てに時間が取られない嫁と狭い鉄道官舎で毎日顔を合わせているよりも、孫娘の言うことを「ハイハイ」と聞きながら体を動かしている方が気晴らしになった。カノが喜茂別の自宅に帰るときは、ノリコは自家製造の菓子、自家栽培の収穫物、季節物の商品や売れ残った商品などを持たせるようにした。

もう一つノリコの身辺を揺るがす出来事があった。つまり、正人が満州に出征した六カ月後の十二月八日、日本は宣戦布告を行い、中国大陸における戦争に加えて太平洋でのアメリカなどの熾烈な戦争に突入していったことだ。戦時体制が強められてきた。何事にも統制が加えられ、食料品はもとより多くの生活物資が配給制度となった。それに加えて世の中が戦争の影響でしだいに物資が不足する時代となり、この農村にあっても成年男子が多く召集で姿を消した。各家庭も儉約と耐乏生活を余儀なくされた。菓子などは贅沢品とされ、菓子を製造するにもその原料を入手するのが

困難な状態になった。商売をしてゆく環境がだんだんと狭まっていた。

田辺家にあっても売る品物が手に入らなくなつて、以前のような商売を続けてゆくことは不可能となつた。

昭和十七年の春を迎え、畑に蒔き付ける作付けもアズキよりはジャガイモ、カボチャ、ダイコン、ニンジンといった作物に切り替えて、自家の食糧確保に努めることにした。

こうした矢先に正人が帰還していることが知らされた。

五月十四日、ノリコは約一年ぶりに旭川陸軍病院のベッドに伏す正人に再会した。

ノリコは夫の顔を見た瞬間に、自分は明るく振る舞わなければならないのだと悟つた。正人は顔が青ざめ、頬がこけ、見るからに病人であつたからだ。自分が悲しい顔になつてはいけないのだと心に決め付けたものの、逆に言葉に詰まつた。

「先日、旭川の叔母が飴玉や卵を持って、見舞いに来てくれた」

正人が言つたが、恵子に会つたという話は出なかつた。ノリコも訊き出せなかつた。叔母のウメは正人の病気が恵子に伝染しないかと危惧し、正人に会わせるのを避けたのであろうとノリコは思つた。

「ここで療養すればきっとよくなるから」

と励ましてみたものの、正人は元氣なくなづくだけだつた。

ノリコは、帰りの車中、そう遠くない日のうちに来るべきものを迎えなければならないのではな

いか、と憂いた。

一輔とキクに早速見舞いに行った方がいいと薦めた。このまま病院で死を迎えるとも限らないと心配したからだった。

四日後、二人は見舞いに出掛けたが、やはり言葉少なく戻ってきた。

一輔が上げる読経は一日として欠くものではなかったが、このところ、朝夕の「南無阿弥陀仏」で始まる読経の音が一段と大きくなったようにノリコの耳に聞こえた。お寺にあるような大型の経本を一〇冊も備えているが、そのうちの一冊は頻繁に使っているらしく背表紙の角が擦り切れかかっていた。

「おまえたちも少しはお経を上げりゃよいのじゃがのう、ありがたいものじゃ」

と、一輔はしばしば口にした。お経はありがたいものと心から信じ切っていることだけは間違いないなさそうだ。

ノリコが旭川陸軍病院を訪れた一カ月後の六月十三日、正人が突然に帰ってきた。皆が喜んだが、もとより仕事ができるわけでもなく、天気の良い日は裏庭をぶらつく程度。くわを握るわけでもなく、草取り一つするわけではなかった。

相変わらずの微熱に、濁ったせきには血たんが伴った。重苦しいせきが続くと、喉をゲーゲーと鳴らして嘔吐反応を引き起こすが、実際に胃の中のものを吐くことはなく、唾をぺっぺっと吐き捨

てた。

どうも完治して退院となったわけではないようだ。正人は帰宅しても、パン製造のあの甘酸っぱい匂いは、遠いかなたに消え去っていたことをノリコは思い知らされた。

ノリコはふと思った。どうせの命ならば、本人の気の済むようにさせてやろうというではないのか。このまま入院していてもどうしようもないので、退院をさせてせめて束の間でも家族で暮らす幸せを今一度味わわせてやろうという医者たちの配慮だったのではないのか。すでに医者は見放しているのかもしれない。

正人は日ごとに疲労の淵に沈んでいく様子だった。

そんな体調にもかかわらず、正人は今までとは別人のように貪欲な男になっていた。ノリコは自分に、胸の弾力と温かさ、それに心臓の鼓動や乳房の汗の臭いまでも求められていると感じた。目の前にあるものは自分のありったけを奪い取ろうとする男だった。

正人は両手で左右の乳房を挟み付け、そこに自分の顔を埋めてくる。両乳房の間はいつしかぐっしりと濡れていた。正人のよだれか鼻水か、自分の汗なのか。それともおのれの命の行く末を知ってしまった男の悲しい涙なのだろうか。それは最後の狂い花を咲かせようともがいている姿とかノリコには見えなかった。その力はどこから湧いてくるのか。

正人の背に手を回すと、肩幅も狭まっていて両腕の付け根は筋肉がすっかりそげ落ちてしまっ

いるではないか。別人のように痩せてしまっていることを知らされ、恐ろしくもあった。軍隊に入る前はこんなではなかったのに、とノリコは思った。生き物が最後に見せる羽ばたきなのかもしれない、とそんな思いに駆られた。ノリコは怖れた。朝になってみたら、命の力をすべて使い果たし、冷たくなっていたということが起こることも限らない。だからといって、自分の生の果てを悟った男の希求をむげにかわすこともできなかった。

七月も中旬から下旬になって、真夏の酷暑が続き、正人の体調がいよいよおぼつかなくなってきた。ノリコは役場の担当者にひそかに相談してみた。伊達紋別（現、伊達市）にある赤十字社療院に入ってはどうかと助言してくれた。この療院は一昨年八月に開院したばかりの新しい施設で、昨年十月に京極から伊達紋別まで全線開通となった胆振線縦貫鉄道に乗れば三時間ほどで行ける。伊達紋別は内浦湾に面して気候が温暖で、これに優る療養所は他にない、と勧められた。

「別荘に避暑のつもりで行ってくるさ」

正人も納得し、八月三日、伊達紋別に向かった。

正人が伊達紋別に行って間もなく、ノリコは自分が妊娠していることに気付いた。村宮病院での受診も思ったとおりだった。四月初旬という見立てだった。

この月中旬になって、つわりが出てきた。

*

こんな折りに家族にとっては耐えがたい事件が起きた。

一輔は日常生活ではノリコの味方になってくれたが、一口で言えば、ワンマンなところと人のいいところが同居している。

この人のいいところが問題だったのだ。

八月お盆過ぎの朝、一輔がいなくなっていて、書き置きが一枚あった。

「明日の夕方帰る。心配無用」

また、山師の口車に乗せられてどこかに出掛けたな、とキクが直感し、手金庫を開けてみると、店の有り金が消えていた。

コツコツと貯めた店の有り金をかき集めて、家族には告げずに出掛けたのに違いはない。

組合などから借金して出掛けているかもしれないぞとキクが言う。ノリコは恥を忍んでめばしいところを尋ね回った。

借金をしていたのは信用購買利用組合で、家と畑地が担保に入れられていた。

警察に届け出ようかとも考えたが、明日の夕方までは見合わせることにした。

はたして、一輔は書き置きのとおり帰宅した。

「生きていたのか、どんな顔して帰ってきた？」

キクが一輔にかみついた。

「いい物件が買い物できた」

一輔は自画自賛。

「せっかく貯めた店の有り金、どこに捨ててきたんだ？」

「何を言うか、子孫のために美林を残すことができたんじゃない」

「美林とは何じゃ？」

「向洞爺の山林原野、七十八町歩を買い取ったのじゃ」

「今度は、向洞爺か。前にも、どこかの山の金鉱とかで有り金をひったくられたのを忘れたか。向洞爺とか言うヤツをここに連れてきてくれ」

金鉱の件はノリコが嫁に来る前の事件であった。「田辺さんの名義」で金山の鉱区権を設定するには現地調査が必要で、ついては前金を融通してもらえば、直ちに定山溪の山奥に調査業者を入れることができるので……、と言い寄られて金を渡した途端にその仲介人はドロンしてしまったことが四年前にあったのだ。

キクにはそうした苦い経験があった。

田辺家がこの村のペーペナイに入植したのは明治四十年だったが、その翌年に山梨県に大水害が

発生した。家や田畑を失った山梨県の人々三千人が北海道庁の設定した羊蹄山麓付近に集団移住してきた。その移住場所は俱知安村ヌプリカンベツ、ペーペナイ、ワツカタサツプだった。山梨県人が入ったペーペナイは田辺家がわらじ脱ぎをした地区よりもさらに山奥で「上山梨」と呼ばれ、ワツカタサツプは鉄鉱石が出る例の地区で「中山梨」と呼ばれた。それと、豊浦のソータキベツ地区で「下山梨」（現、豊浦町字山梨）と呼ばれたが、この辺り一帯は街のある洞爺湖南岸からは湖を挟んで向こう側にあたることから、俗に向洞爺と呼ばれる。そうした山梨県人の間の情報があつて、この土地が売りに出されているの知ったのだというのが一輔の説明だった。京極からその向洞爺に行くには、真狩を経由して行くのが一番近道だ。京極真狩間約一五キロ、真狩豊浦山梨間も約一五キロで、合計三〇キロ、歩いて五時間。早朝六時に自宅を出れば、十一時頃に目的地に着く。そこで一泊し、翌日十三時出発で、十八時頃に帰宅できるのだと言う。

このとき一輔は土地の買い取りのことだけしか話さなかったが、向洞爺の当地ではもう一つの問題があることが、三日後になって分かった。持ち出し金、組合からの借入金、土地の買取金が突合しないからだ。購入した土地には、前々から無断で拝み小屋を建て、夏は勝手に水田や畑作をして住み、冬は車でルンペンをしているといううわさの男がいたのだ。その男は種もみをくれれば収穫を山分けにするとか、澱粉を買って知り合いの菓子屋に卸し一もうけするほら話を一輔に持ち掛け、一輔はこれにまんまと乗せられてだまし取られていたのだ。

このことを知ったキクは怒りを勃発させた。ノリコの手前もあつたのだろう。キクは半狂乱となつて、

「じいさん殺して、自分も死ぬ」

と、喚いた。

ノリコはそこにキクのわざとらしい立ち振る舞いを見て取つたが、ともかくなだめ役へ回り、この場を収めることに努めた。姑は興奮がこうじ、自分自身が制御できなくなつてしまいかねないと思つたからだ。

ノリコはつわりの苦しい時期にあつたが、この後始末に奔走した。

信用購買利用組合に担保を入れていた借金をとにかく家中の有り金を洗いざらい集めて返済することにした。ノリコも高屋敷家からもらったお金もこれに充てざるをえなかった。

伊達紋別の療院に入っている正人に相談することも一時考えたが、病人に心配を掛け、療養に悪影響が及ぶことを畏れた。

この家の金庫番は今後一切、キクが取り仕切ることを一輔に約束させて何とか騒動を収めた。

この事件が切っ掛けとなつて、キクがノリコに心を開き、自分の過去をぼそぼそと語るようになった。

能登の輪島で育つたが、若げの至りで当時ニシンで景気のよかつた寿都に來た。

寿都にはやはり石川県出身の向田忠太郎という、地元では音に聞こえた大立て者がいた。布団屋さんが生業で、消防だかの組合長をやっていた。面倒見のいい地元の顔役だった。この忠太郎の息子に健一という、ろくでなしがいて、これにだまされた。岩内で男の子を産んだが、乳が出ず、栄養不足で死なせてしまった。

健一が岩内でひいきにして通っていた床屋というのが半藤トキという女がやっていた床屋で、その家に人なつこい女の子がいた。シズだった。

シズは健一になつき、家にしばしば遊びに来ているうちに、いつとはなしに居着いてしまった。後で分かったことは、この健一はこれという女を物にしていた女たらしの道楽者だったのだ。ただ、シズは健一の子でないことは確かだ。

忠太郎は腹を立て、離れさせてくれた。

健一は忠太郎から勘当されて行方不明。その後、野垂れ死にしたとの風のうわさだ。

忠太郎はシズを自分の孫として向田家の戸籍に入れてくれた。シズには何人かの兄弟がいた。コウちゃんという弟らしいのが留寿都にいるらしかった。妹もいて、岩内でみそだかしようゆだかを製造をいっている家の嫁になったようだ。

そうこうしていて、妻を亡くしていた一輔とは岩内で顔見知りになって女房に望まれた。あちこち引っ越をしないで一箇所に腰を据えることが条件で、ここが選ばれて岩内から真っ直ぐにやってきた。一輔は小樽の製麺工場の倒産で管財人や債権者などといざこざがあつて、ここに来たのは自

分より遅れた。

こういう身の上話はノリコにとってはじめて耳にすることだった。

*

向洞爺の一件を何とか収めてほっと一息することができ、つわりもこの頃には収束して食欲が出てきた。同時に乳房が張り出し、腹部の膨らみもはつきりしてきた。

そうした矢先の十月末、正人が突如帰ってきた。

話を聴くと、どうも伊達紋別の療院は看護婦長の制止を振り切ったの帰宅のようだった。

帰宅して当座、正人は強がっていたが、仕事に取り掛かれる状態ではなかった。微熱、せきなどの症状は相変わらずだった。

間もなくして寝付くことが多くなった。

伊達紋別の療院に戻ることを勧めると、

「あそこに戻るぐらいなら、裏庭に掘立小屋を建てて、そこで独りで暮らす。食事は岡持で運んでくれればいい」

などと言い出して、みんながあきれてしまった。

ノリコも何とか言い聞かせようと試みたが、看護婦長と感情的に喧嘩して出てきたのか意地にも

あそこには戻らないと言い張るばかりだった。

ノリコは正人の体力が日一日と衰弱してゆく有り様を目にし、困惑の日々が続いていたが、一方、ノリコは乳房が大きくなり、腹部の膨らみは外形からものはっきりと分かるようになってきた。

そうした折り、カノがお祝いとして岩田帯を携えてやって来た。

「今日は、戌の日じゃ。安産なように戌にあやかってな」

と、孫娘のふっくらとしてきた腹に腹帯を巻いた。

今日は十一月三日だった。ノリコは妊娠を知ったときよりも、この岩田帯の由来を祖母から聞かされた今、自分が母親になるのだという実感を自覚させられた。

ノリコは食欲旺盛で体重も増えてきた。

十二月の初め、役場の三木兵事係長が正人をわざわざ訪ねてきた。

ノリコが応対に出たが、本人とじかに話をしたいというので、横になっていた正人の上体を起こしてやって、席を外した。

「田辺さん、体調はいかがですか」と三木は切り出し、正人の顔色をうかがった。

三木はそこに紛れもない重患の結核患者を見た。

「伊達紋別の赤十字社療院から田辺さんの病状と退所についての知らせがわたしに届いています。御自分から退所されたそうですね、きちんと治療を受けるように本人に伝達してくださいというこ

とで、本日、おじゃまをしました。こちらの御自宅におられては、家族の方にも感染する危険があるそうですよ」

「そういうことなら、裏庭に掘っ立て小屋を建てて一人で過ごすよ」

正人は迷惑な話だと言わんばかりに返答をした。

「田辺さん、それはね……。田辺さんはそれでいいのかもしれませんが、奥さんのことを考えてあげてください、まして奥さんは身重の身と伺っております」

正人は目を閉じ、黙ったままだ。

「このままじゃ、い……」

と、三木は言い及んで話をいったん引っ込めて言い直した。

「田辺さん、お気を悪くするかもしれませんが、この際、はっきり申し上げましょう。陸軍指定の病院に入院してきちんと治療を受けるようにしないとだめですよ。そこで治癒すればまことに結構なこと、万が一のことになったとして……」

正人は、依然として目を閉じ、口を閉ざしたままだった。

「田辺さん、召集令状を持参したこの三木にせめてもの罪滅ぼしをさせてください」

「いやいや、学歴のないおれだけど、召集の命令を出したのは三木さんじゃないことぐらいはわきまえているよ」

正人が目を開け、つぶやくように言った。

「万が一のことになった場合、このままじゃ、犬死になってしまいますよ、お国のためにいうことが認められると、配偶者には年金が支給されることになっています。奥さんのことを考えてあげてください。手続きのことはこの三木がすべて処理しますので、田辺さん、ここはわたしにお任せください」

三木が頭を深く下げた。

それを目にし、ややあつて、

「……判りましたよ」

正人は顎を引いて黙った。

本当のところ、正人は気が進まなかったが、三木が勧める七飯の陸軍治療所に入所することに同意した。

ところが、そこは患者が多く順番待ちで、とりあえず函館市立病院に入院することになった。

一輔が函館に住んでいる弟の英二郎にその旨の知らせを出した。

一輔の話によれば、田辺家と三木家とは同郷のよしみで、我が家が高松からこの京極のペーペイに来て、最初にわらじ脱ぎをさせてもらったのが三木さんの家だった。役場の三木さんはその息子だという。

十二月十六日、市立函館病院に入院するため、ノリコが付き添って函館に向かった。古木昌彦が

函館駅まで同行してくれた。

正人はすでに歩行も満足な足取りではなかった。跨線橋の階段は登るにせよ、降りるにせよ、おぼつかい状態で、昌彦が正人の脇の下に自分の肩を入れて担ぐようにして運んだ。

俱知安駅を出て間もなく狩太駅に差し掛かって、今までほとんど口も利かなかった正人が窓外に目をやりながら、ノリコに語って聞かせるでもなく、昔を懐かしむように独りぼそぼそと口を開いた。

ああ、狩太か。懐かしいなあ、小学校に入る前、この村のルベシベという所にいたことがあるんだ。おやじがここに移住してきたんだ。

おお、昆布駅か、ここからは南尻別村（現、蘭越町）となるが、ルベシベとこの昆布とは隣の部落で、ここにはその当時、英二郎叔父の一家が住んでいたんだ。それで年頃が同じの英介とはよく往き来して遊んだものだ。

次は蘭越駅だ、ここには少し山奥に入った所にユサンベツという開拓地があつて、檜山の叔父が京極から入植しているんだ。旭川で一緒にいた檜山芳子はここで生まれている。猛四郎叔父が独立して分家を建てたのもここだ。今思えば、大正七、八年の頃で、その後に原聡君のお父さんが高松から入植してきて、聡君もここで生まれているんだ。

ノリコも昌彦も、この方面の地理にはなじみもなく、別段相づちを打って聴かなければならないことでもなかった。それよりもとにかく、あまり疲れないで函館に着いてくれればよいとそれだけを願っていた。ただ、猛四郎が芳子さんや聡さんを旭川に呼んだという理由が南尻別村のユサンベツにゆかりがあったのだとノリコは知った。

列車が長万部から内浦湾に出ると、急に積雪が少なくなった。青い海に注ぐ陽光は奥深い山の中から出てきた人にとってまばゆいばかりだった。

病人にとって、ノリコにとっても半日がかりの長旅だった。無事に函館に着いた。午後四時半近くだった。

駅の改札口には、叔父英二郎の長男英介が出迎えてくれていた。

雅彦は駅の改札口を出ないまま、英介と二、三言葉を交わし、今乗ってきた列車で直ちにトンボ帰りした。

英介の傍らには、「田辺様 函館病院」と書かれている半紙を掲げた年配の運転手さんらしい人がいた。迎える車を差し向けてくれていたのだ。

英介が正人をいちべつして開口一番、

「正さん、どうしたんだ、ずいぶんと痩せたんだね」

無神経な言葉を浴びせた。

ノリコにとって、その事実是谁よりも承知していながら、聞きたくない言葉であった。自分の顔

が思わず引きつってしまったことにノリコは気付いた。英介に見られたと思ったが、取り繕う気持ちにはなれなかった。言っている事実は間違いいでもないし、悪意で言ったわけではないと思いつつも、今本人の前で言うべきことでないとノリコは腹立たしかった。英介も配意が欠けたと思ってか、黙った。それでも、英介は正人を抱えるようにして病院の車に乗せた。続いて、ノリコが正人の手前の席に座った。

「お大事に」

英介はそれだけ言って車のドアを閉め、見送った。

車は街の中を十分間ほど走って基坂に差し掛かった。

「どちらか来られましたか？」

運転手が声を掛けてきた。

「羊蹄山の麓の京極という所からです」

ノリコが答えると、待っていましたとばかりに、

「そうですね、この上が函館山ですが、われわれ地元では親しみを込めて臥牛山と呼んでいます。

ずっと大昔アイヌが住んでいた頃、武田というお殿様がここに館を建てましてね。その館が四角い箱のようだったことからこの一帯が函館と言われるようになったわけです。古くからここは一等席の場所なんですよ」

なめらかに語った。

基坂の中程に病院は建っていた。

少し登って十字路となっていて、

「この横の通りが富岡町通りで、外来患者さんの玄関はこちらになりますが、入院患者さんはもう一つ上の天神町通り近くの玄関からになります」

説明しながら車を玄関先に寄せた。

下車すると、積雪は多くなかったが、冷気が山の上から滑るように降りてきた。

「この病院の上にある建物は公会堂です」

運転手が教えてくれた。

正人は車椅子に乘せられて、坂の上の方にある南病舎の八人部屋に入れられた。正人のベッドは函館港の海が見下ろせる窓側だった。

同じ窓側の隣のベッドにはおばさんが付き添っていた。患者は二十歳過ぎの息子さんでやはり結核の戦病兵士のようなであった。おばさんは、「下北の佐井から来たんだ」と話し掛けてきた。津軽弁だった。

ノリコにとって、下北も佐井も分からない地名だった。

佐井というのは今はさびれてしまったが、昔はしょっぱい川を渡って渡島に行くのはみんな佐井の湊から出て行ったもので、という話を皮切りに、この病院には売店があつて、患者が使う品物や付添人の日用品や食べ物などが置いてあること、付添人の食事を出してくれる食堂、病人が使う

氷が貯蔵されている倉庫の場所など事細かく教えてくれた。この坂を降りて電車通りに出れば、いろんな商店も並んでいるので一度出歩いてみたい、と言ってくれた。気さくで親切な人だった。

付添生活が始まった。

朝、目を覚ますとまず検温。次はベッドから体を起こしてトイレ。間もなくしての朝食。食事のトレイを運ぶ。食べ終わって薬服用、洗顔歯磨き。着替えのついでにタオルで体を拭いてやる。吸吞器の水を取り替えてやる。

医師の回診が終わって、まずは一段落だ。

次に新聞に目を通したり、窓際に立って窓外の景色を眺めたり、ベッドの上に寝そべったりする。トイレに立ったときはついでに廊下を散歩させるために付き添う。

昼食が済むと、薬を飲む。昼寝している間に下着などの洗濯を済ませる。

そうこうしているうちに、夕食。薬の服用。とりとめない話を交わす。就寝時間がくる。トイレ。二十一時消灯。

ノリコは大きなお腹に、上衣付きのモンペを昼夜着たままで付き添い、夜は床に毛布を敷き、ベッドの下に下半身を入れて睡眠を取った。

病院の敷地内にいくつもの建物があつた。外来診療所の外、一ノ側病舎、二ノ側病舎、三ノ側病

舎、東病舎、隔離舎、それに正人が入室している南病舎があった。病床数はおおよそ三〇〇ほどと言われていたが、それでも患者であふれていた。

入院して五日目に英二郎がお見舞いに駆け付けてくれた。自宅でこしらえたイクラだと言って瓶詰を差し入れてくれた。合わせて今朝の新聞も持って来てくれた。

「やっと、新しい函館駅ができた」

英二郎が言った。

落成式が挙行された旨の大きな見出しが新聞の第一面に踊っている。

「あれっ？ おれたちが降りた駅は何だったんだ」

正人が言うと、

「それは函館棧橋駅だ、前の函館駅は本屋が四年前に出火で全焼し、臨時に棧橋駅を使っていたんだ」

英二郎が説明をした。

「それで何だかゴチャゴチャしていたもなあ、一週間遅らせば新しい駅だったんだ」

正人は相づちを打った。

「京極に戻るときは新しい駅だ」

英二郎が言ったが、正人は「うむ」と声にならないつぶやきを漏らした。

英二郎の見舞いで、ノリコは函館駅に出迎えてくれた英介が英二郎の長男で古書店をやっていることは分かっていたが、出会いの初っ端ですっかり心証を害していたので、英介がもともとどういう人間なのか気に掛かっていた。

英二郎が帰った後に、

「あなた、英介さんとは年格好が似ているけど、どうなの？」

と、話の接ぎ穂を投げ掛けてみた。

「そりゃそうだ、あれは大正元年でおれは大正二年だけど一カ月も変わらない」

「なんか似たようなことを前にも聞かされたような気がするけれど、そうだ、シズさんよね」

「そうなんだ、英介とシズは誕生日が二日しか違うはずだ」

「そうか、英介さんとシズさんは、どこか似ている感じよね」

「英介は積丹半島の余別村（現、積丹町）で生まれて小学校に入るまではそこで育たんだ。シズは生まれも育ちも岩内だから、二人とも積丹半島の浜育ちで口の利き方は荒っぽいんだ、齒に衣を着せずにズバズバと物を言う」

「言葉だけでなく、性格も似ている感じね」

「まあ、そういうば、二人とも世の中の新しいものには興味津々で積極的だなあ。それに都会志向だ」

正人は一息入れて語り出した。

「英介は余別の後に南尻別村の昆布にいたが、その後は函館に引っ越し、尋常小学校卒業後は東京神田の古書店に丁稚奉公をしながら高等科に一年在学していて、その後この函館の若松尋常小学校高等科に転校しているんだ。この一年の東京生活で彼としては目覚めるものがあつたんだろうと思う。後で分かったことだが、家業の古書店を手助けながらもしばしば上京し、日本共産党青年同盟の活動で警視庁に検挙されたが転向を誓って釈放されたりしていたらしいんだ。昭和九年三月の有名な大火の際にリュックサックに食べ物を詰め込んで見舞いに来たが、幸いにも本町の自宅は火災を免れていた。手前の電車通りで止まっていたんだ。彼とはそれ以来の再会だったんだが、この間の昭和十三年に函館地方文化運動事件で彼が顔写真入りで大々的に新聞報道されてびっくりさ。彼は詩誌を発行して講習会を催したりしていたのが、治安維持法違反とされたわけだ。そんな逮捕されるような存在とは思ってもいなかったよ」

「それでどうなったの？」

「結局、起訴猶予だったようだ」

廊下から夕食を知らせるベルが鳴って、ノリコはベッドの傍から離れ、二人の話はそれっきりになった。

季節は冬でやはり雪は降ったが、京極のように連日にわたることもなく、好天に恵まれる日々が多かった。

正人は晴れた日となると、病室の窓際に立つて、函館湾の海面に目を細めた。

「海の中に飛び込んだら、どんなに気持ちがいいだろうになあ」

と、何度も口にする。

体が高熱で焼かれるように苦しいのであろう、とノリコは思った。

頭や胸に当てている氷のうの中の氷は高熱で二、三時間しかもたない。その度に取り替えてやらなければならなかった。

氷は南病舎からは三階下に相当する倉庫まで長い廊下と階段を通って取りに行かなければならなかった。昼夜を問わず日に何度も倉庫に行つて氷を割り、それを持つて運び上げた。日を経るとともにきつい仕事となった。

熱は体内の結核菌との戦いで出る、その熱は食べ物のエレルギーから供されるが、これで間に合わなくなると身体に蓄積されていた脂肪の一番となり、これも尽きると筋肉や内臓の臓器から絞り出してゆく。それは同時に体力の衰弱という結果となる。この「胸の病」の治療とされたのは、清浄な大気、働かずに安静、栄養豊富な食事という自然療法だけで、熱のため頬が赤く、目が大きく潤み、瘦せて肌は白くなつてゆく。それを防ぐ有効な手立てがないのだ。生き残れた人は希少な幸運と体力に恵まれた者であつて、結核菌を排出する重症となれば、その患者は療養期間に長短の差こそあれ、いずれ衰弱死を歩むこととなる。

昨年十二月にアメリカとの間で大規模な戦争が始まっていたが、戦争が進むとともに日常生活の必要物資は一段と乏しくなり、何事にも統制が及び、「がまん、がまん」の耐乏生活を強いられた。俗に「贅沢病」と言われる結核患者たちにとっては精神的にも酷な時代であった。

医師や看護婦たちも戦時ということで、あちこちに派遣されるのか、病院に勤務する人々が不足し、皆が気忙しかった。

そうした中、英二郎は一週間に一度は病室に顔を出して気を配ってくれた。時折、タラコや鶏卵をどこからか入手し、栄養になるだろうと差し入れてくれたりした。

古書店を引き継いでいる長男を除く三人の息子たちは志願して海軍の軍人になり、戦艦「山城」や巡洋艦「鳥海」などに乗っているといったことをたびたび話題して、病人の気を紛らわせてくれた。明るい話題と言えば、名寄出身の力士「名寄岩」が大関で活躍しているぐらいのものだった。

この年の師走となって、ノリコの腹部はその膨らみがへその辺りまでに及んできた。その一方で、正人の病状は寝汗、高熱、せき、血たんなどの病勢が一段また一段と進行しつつあった。

食べ物は戦時中の節約、耐乏生活で栄養のあるものがなかなか手に入らない。食事も御飯から重湯へ、食べ物を口に運んでやるようになった。

正月三が日が過ぎた頃になって、正人は病院から出される一日三食の食事に好き嫌いを言い出すようになってきた。

今日の朝食ではタラの子粕漬けを残し、夕食では三平汁を生臭いと言って避けた。これらは今までうるさいことも言わずに口にしていた食べ物だった。所詮は食欲減退のせいなのだ。

夜中にベッド上の病人のうめく声や激しいせきに目が覚めることがある。背中をさすってやる。熱が出て苦しうなので、氷のうの氷を入れ替える。薄明かりの長い廊下と階段を通して倉庫に氷を取りに行かなければならないことが多くなった。

トイレ対応も変えなければならなくなってきた。今まではノリコの手を借りながらも廊下を歩いて用を足していたが、腰を下ろすのもまるで便器にへたれ込むようになり、立ち上がるのにもつまり棒を必死に握ってやつとという状態で、トイレ通いもこれ以上は限界になってきたのだ。ほうろう引きのおかわを使わせるようにした方が本人にとって安全で負担が少ない、そういう事態になったことをノリコは知った。

一月中旬となって、症状の悪化がさらに進んだ。結核菌が腸を侵し始めたのか、新たに下痢が加わった。おかわでは間に合わなくなり、おしめを当てなければならなくなった。病状が重くなつてゆくに従って、声もしわがれたものに変わってきた。病人の目が見ているのか、何を求めているのかを感じ取ってやらなければならない。時々、海に溺れているような息苦しさを見せるようになった。手を握ってやって元氣付けることしかできない。

その一方で、ノリコの腹部はますますせり出してきた。

病院内の婦人科で定期検診を受けた際、年配の医師から、

「御自分の手のひらをお腹に当ててみてください。上の方の丸い感じは胎児のお尻ですよ、そこから下がって少しゴツゴツしているのは背中、下の堅いのは頭です。順調に生育していますので、御安心ください」

続いて、

「どうですか、歩いているとき、足元がちゃんと見えていますか」

と、問われた。

「何とか見えます」

足元が見えにくくなってきたのは事実だったが、ノリコはそう応えた。

「お伺いするところによれば、田辺さんは付添をなされているそうですね。この病院は御承知のように階段が多いのでね、よく気を付けてください。ついですが、わたしの専門から言わせてもらえば、付添の仕事はどなたかに代わってもらった方がいいのですがね……」

ノリコはその場では、「はい」と答えた。

自分もそろそろ限界かなと思っただけのもの、いざ代わってもらえる人は浮かなくてよかった。姑は正人本人が嫌がるだろうし、姑自身そんな気は毛頭ないであろう。年老いたカノおばあちゃんにはあまりに負担が大きすぎる。

病気が病気だけに簡単に付添を引き受けてくれそうな人は見当たらなかったが、これ以上続けら

れないと思った。出産の準備もしなくてはならないと意を決し、

「わたしの看病は一時誰かに交代してもらって、赤ちゃんを産みたい」

と、心の内を正人に明かした。少し考え事をしていたが、

「今月中は、いてくれないか」

くぐもった、うめくような声が返ってきた。

この言葉は意外に思えたが、振り切って帰ることはできなかった。というのも、昨週から正人は子どものときからの辛かったことや悲しかったことなどを少しずつ少しずつ、息が苦しくなるとひと休みしながら行きつ戻りつ語り出していたからだった。

それは小学一年前後の記憶から始まっていた。

小学校にまだ行っていなかったかも知れないが、アメリカのスミスとかいう曲芸飛行士が来たんだ。自分たちは母や姉に連れられて見に行ったんだ。それが岩内だったのか、小樽だったのか、記憶がないが、何でも学校の運動場のように広い場所だったんだ。プロペラが回転し出して、砂塵の嵐みたい、白い尾を引いて走り出す。ワアーワアーとみんなの歓声の中を、その飛行機は浮いてあつという間に白線の糸を引いて遠くに飛んで見えなくなったんだ。

自分が生まれたのは、京極のペーペナイだったが、その三カ月後に一家は岩内の前田村に移っている。だから自分には京極の記憶はまったくない。田辺の家がこの京極に入植したのは明治四十年

で、姉は小学一年生。俱知安駅からペーペナイまで歩かされて本当にきつかった、と十二歳上の姉からはよく聞かされた。

自分の小学校一年生は岩内郡の嶋野村だった。この一年前に狩太のルベシベから移ってきたんだ。岩内は春になるとニシンの群来だ。出稼が金もうけにやってくる。ニシンを満載した舟が次から次へと浜に揚げられ、その処理にみんながてんでこ舞いだ。どこも足の踏み場もないほどのニシン。浜は戦場のようにいきり立ってくる。浜の生徒は気が荒く、自分はないじめなかった。

自分の家は街より遠い開拓地。ブラック造りの家で、夜はランプ、いろいろには吊し鍋があった。帰宅するとならいで足洗をさせられた。

近くには急流の川があった。これに注いでいる小川には小さなエビがいる。カニも住んでいる。水田にはカメもいて、それを姉や兄たちがとらえてきた。

運動会は愉しかった。万国旗が風になびいている。ふろしき包みの重箱提げた姿が集まってくる。ラムネや駄菓子の出店が並んでいた。

蒸し暑い夜は、螢が庭前の柳まで青い光がふわりふわりと飛んできた。

秋は水車が回り出し、水音を辺りに響かせた。

学校の途中に墓場があって、そこからローソクを盗んできて、庭に丸く並べて火を点し、兄弟たちみんなで悪たれをした。

今、考えてみれば、姉は嫁入りの娘盛りで、剣道好きの喜一兄は尋常小学校高等科、信人兄は小

学四、五年、弟の清人はまだ三、四歳だった。

翌年の夏、気丈な岩吉じいさんが突然倒れた。七十四歳の一生を終えた。棚にあった、黒いさやの短い脇差がじいさんの置き土産になった。

父はまた気変わりを起こした。小樽の花園町にあった製麺工場を買い受けて転住した。ここから一家は不幸の坂を転げ落ちていった。

自分は勉強をそっちのけに、都会の賑やかさに何もかも珍しくおもしろく見物ばかり。製麺工場はかんばしくなく不況時代の暗礁にあつという間に乗り上げた。

八月、ただ一人の妹輝子がわずか二歳で死んだ。

九月、母は労苦のかいなく自分たちを置いて世を去った。清人は旭川の叔父に引き取られた。喜一兄は家業の悪戦苦闘で健康を損ね、犠牲となった。

父は相続く不幸の渦中で苦悶した。

再び東俱知安村に住むことになった。

正人はこのわたしに自分が子どもの頃のことを聞いてもらいたいのだと思い、一つ一つにうなずいた。こうした話を何日かにわたって聞かされているうちに、激しい下痢が続くようになっていた。目に見えて体力は落ちていった。

ノリコは何とか元氣付けようとして、

「このお腹の子は、何と名前を付けようか。男の子と女の子の名前」

と、訊いてみた。

しばらく黙っていたが、

「自分には、言えない」

と、正人は憔悴しきった顔を向こう側に逸らせ、毛布で顔を覆ってしまった。

ノリコは思わずはっとした。正人にしてみれば、それは我が身の無念さ、悲しさを思い知らされることだったのだ、と。生まれてくる子とは顔を見ることがままならぬであらうし、そんな父親に名前を付ける資格なんか、この自分にはありはしないのだ、そんなふうに正人は思い、ことさらにつらく、悲しかったに違いないのだ。

それから十日後のこと。

その日の午前中に回診があったときはいつもと変わらなかったが、午後から様子が変わってきたことに気付いた。昼食の重湯にも口を開けなかった。しだいに呼吸が弱くなってきた。握っている手の返しも弱くなってきた。

「わたしノリコ、分かる？」

二度、三度と問い掛けたが、応答はなかった。

隣のベッドに付き添う青森のおばさんが看護婦詰所に知らせてくれて、医師と看護婦が駆け付け

てきたが、それは死亡を確認するだけだった。脈、胸部聴診、まぶたをひっくり返して診た。

「御臨終です」

死亡時刻は、午後八時と告げられた。

「今月中……」と言ったその言葉を裏書きするように、正人は二十六日午後八時、逝った。付き添っていたのはノリコ一人だった。

程なくして病院の霊安室に運ばれた。

正人は、たぶん自分の死期を知っていたに違いないとノリコは思った。

三日前、いつもと同じく自分の思い出話をし、疲れてひと寝入りし、目を覚ました直後、

「京極に行ってきた」

と、はっきりした口調で正人は言った。

ノリコはその言葉をそのまま飲み込み、

「そう……、みんな元気だった？」

と、受け止めた。意識が幻の中に行ってしまったのかと思ったが、それはこのときだけですぐに正常に戻った。意識が混濁してわけの解らない言動をとることはなかった。昏睡状態が長く続いて死に至ったということでもなかった。今まで点っていたランプの灯が、油が尽きてふうーと消えるような死であった。

ノリコは事務室の電話を借りて、京極の自宅に正人の死を知らせた。英二郎には明朝に電話連絡をすることにした。

今夜は今までどおりに病室に泊まらせてもらうことにし、病室に戻って後片付けをしていると、英二郎が駆け付けてくれた。兄貴から電話があったということだった。

英二郎は霊安室で正人の死顔に直面した。

瞑目合掌を済ませると、早速、これからの段取りなどの話になった。英二郎にしても、近いうちにこの日のあろうことは覚悟していたところだったのであろう。

遺体の処置は、兄貴とも話したが、函館で焼骨し、遺骨を京極に持ち帰って自宅で葬儀を行うことがいだろう、と英二郎が勧めてくれた。この叔父にお任せすることにした。

翌朝は、九時になるのを待って京極村役場の兵事係に死亡を報告すると、そちらに出向き、函館連隊区司令部などに軍関係の手続きを行うので、医師の死亡診断書を病院から取り寄せておいてもらいたいということだった。

診断書の死因は、「左肺門浸潤のため」とあった。

早速、英二郎が火葬認可証を取りに市役所に出向いた。

午後、葬儀屋の手を借りて湯灌を行った。経帷子は手許になかったので、家から持参していた浴

衣に替え、さんずの川を渡る際に必要という賽銭は手許の小銭を二枚、柩に入れた。

一段落を終えたところで、

「ともかく体を休めなさい。付添いの疲れを湯の川でいくらかでも癒やして京極に帰った方がいい」

と、英二郎が湯の川温泉に今日と明日の宿を手配してくれた。

自宅に来てもらってもいいが、かえって気を使うことになって、気持ちが悪まらないだろうと言う。

正直言って、今のノリコにとって、その方がありがたいことだった。

宿には英二郎が湯の川温泉行きの電車で送ってくれた。

二十八日午前、柩は葬儀屋の霊柩車で病院から梁川町の市営火葬場〈護法院〉に運ばれることになった。

霊柩車にノリコと英二郎が乗り込んだ。

英二郎が運転手に行啓通りを進むように指示した。英二郎の自宅がこの沿道にあったからだ。やがて、市電の五稜郭電停を過ぎたところで、英二郎が車を止めさせた。

「あの大衆堂古書店という看板が上がつているのが、自宅だ」

と、英二郎が指を差しながらノリコに言った。

長男の英介夫婦と同居しているが、昼間は自分が千代ヶ岱の支店の方で留守番をしているとの話であった。

そこから程近く、火葬場（護法院）があった。高い煙突が冬空に突き刺さるように立っていた。火葬場にして瀟洒な感じのする建物だった。

火葬炉の扉の前で、僧にお経を上げてもらった。

短い読経が終わって、柩が火葬炉に入れられ、扉が閉じられた。

骨拾いはノリコと英二郎の二人だけで済ませた。

骨つぼが白い骨で嵩張ってきたので、ノリコは骨つぼをカサカサとゆすると、腹の中ではピクン、ピクンと震えるものを感じ、思わず手が止まった。

ノリコは骨つぼを抱き、タクシーで湯の川の宿屋に向かった。

部屋では一人夕食を取った。昨夜よりも今夜の方がずっと寂しかった。

布団に入っても、これからどう生きるのかという思いが頭から離れず、いつまでも眠れなかった。

二十九日朝、英二郎が湯の川の宿にやって来た。京極に同行してくれるとのことだった。ノリコを一人で帰すのは見かねたからだ。

ノリコは正人の遺骨とともに函館を後にした。

やがて、列車が長万部を過ぎて内浦湾から山の中に入ると、窓外はたちまち雪に埋もれた風景となつて、後志の山奥に今また入つて行くという実感が迫つてきた。

ノリコの胸にふと旭川陸軍病院で再会したときのことが蘇つた。正人を一瞥したとき、胸に駆け上がつてきた予感とでもいうべきもの、先の見えた命という第一感がやっぱり間違ひではなかつたのだと思つた。ベッドに伏す正人からボツボツと断続的に聞かされた話をつなぎ合わせて考えれば、正人は決して幸せな人生だったとはお世辞にも言えない。その人生の中でわたしが正人と一緒にいた時間を数えてみた。旭川で祝言を挙げ、京極に来てから正人は小樽にパン修行に六カ月留守にし、しばらくして今度は召集となつた。帰宅してからも三カ月伊達紋別の療院に入った。これを差し引くと、正人と一緒に暮らした期間は、一年半にも満たなかつた。

倶知安駅には、昌彦が出迎えていた。

京極線の車中、ノリコが大きな腹をして疲れている様子を見た昌彦が、
「明日から産後の養生までは喜茂別で過ごせ、おれから姑に話してやる」
と、言葉を掛けてくれた。

函館から同行していた英二郎も、

「それがいい、それがいい」

と、同調してくれた。

ああ、カノおばあちゃんがいる、とそう思うだけでもノリコは心が休まった。

夕刻、ノリコは京極駅に遺骨を抱いて降り立った。寒風が身をなぶっていくままにさせながら、腹の中のこの子を凍えさせてなるものか、とノリコは自分の気が高ぶってくるのをじっと感じ取った。

家では一輔は気が動転しているのかただウロウロとし、キクは静かに座っているばかりだった。

この日の通夜は自宅でひっそりと執り行われた。

函館から同行してくれた英二郎、岩見沢から檜山基三郎、旭川の猛四郎とウメ、清人、恵子、古木カノと昌彦、それに愛別の高屋敷賢が来てくれた。近所からは八村産業の社長八村巖と丸通営業所長の和田夫妻がいた。

基三郎とは初対面であった。朴訥で実直な農家のおじさんを地で行くような人柄のようだ。へ石橋を叩いて渡る」という言葉が思い浮かんだ。その点で舅とも猛四郎とも好対照だ。こうして四人の兄弟がそろってみれば、性格がそれぞれ異なっているのが際立つ。舅と一番仲がいいのは英二郎であることもそれとなく分かった。

高德寺住職が読経と説教を終えて退去すると、仏壇のある座敷はにわかに寂しく、わびしい場となった。

恵子が家の中を一人はしゃぎ回っている。それを目の前にすると、なお哀れになった。

「恵子ちゃん、年はいくつ？」

ノリコが訊くと、恵子は手のひらをいっぱいに広げてノリコに突き出して見せた。

猛四郎がノリコに向かって、

「ノリコ、この家にいたらしい無理をすることになる。おまえはこの際、実家に戻って、里帰りというか、つまり喜茂別に行って古木ばあさんの世話になれ」

にわかに言い放った。

昌彦や英二郎も、機を見て言い出そうとしていたところであつたので、異口同音に賛同の言葉を即座に発した。キクの手前、先駆けて言い始めるのを控えていたカノも猛四郎のこの発言には、よくぞ言ってくれたものだとの内で感心していた。産後の休養までは喜茂別の古木家が世話を看ることに親族一同が決めてしまった。

続いて猛四郎はキクに向かって大声を上げた。

「ばあさん、酒でも出せ。酒でも飲まんとやりきれんぞ」
続けて、

「商売用にほまちしてあるものも出して皆に振る舞え」

と、促した。

この葬儀に中愛別から駆け付けてきていた高屋敷賢は身重のノリコを見て驚きを覚えていた。妻ウタからノリコは子どもの産めない身体だとかねて聞かされていたからだ。だが、目の前のノリコ

は二カ月後の出産であると知って、賢は何とも複雑な気持ちになっていた。ここにいる誰もが、ノリコ本人もそんな事情のあることも知らず、ノリコの妊娠をごくごく自然な成り行きとしている。

この事情は決して口外できることではない、無事に出産が終えるまで、いやいや生涯にわたってもだ。それに加え、自分はこの五年の間にノリコの花嫁姿を二度、その夫の死去に伴う喪服姿を二度じかに目にするようになった。そんな人間はこの世に自分一人だ、ここに集まっている親族にしてもこうした体験を有する者はいないと気付き、はからずも心が高揚した。賢にしては減多にないことだった。

「ノリコさんには、愛別が一番うまい米を腹一杯食べてもらわなきゃならん」
思わず口を衝いた。

「お兄さん、今は戦時体制で何もかも統制、統制という世の中ですから無理をしないでください」
「なあに、ノリコさんが食べる分なんぞは何とでもなる。そんな心配よりも早く自分の体の疲れを癒やして、次の大事な仕事に備えた方がいい」

「ええ……」

ノリコはうなずいた。産着もおしめもまだ何一つ手が付かないままである。

ノリコの脳裏に自分が小学一年であったときに内藤産婆さんを迎えに行ったときのことが蘇った。おっかさんの一大事と思い、まだ夜が明け前の堅雪が残る道を無我夢中で駆けて行った。今は自分がその一大事を抱えているのだとノリコは思った。

翌朝、告別式を終えると、集まった親族は京極線上りの列車で俱知安に向かった。俱知安からは田辺英二郎が函館本線上りで函館へ、下りでは檜山基三郎が岩見沢へ、田辺猛四郎一家が旭川へ、それに高屋敷賢が中愛別へとそれぞれに散って行く。

ノリコはこれらの親族を見送った後、午後一番発の胆振縦貫鉄道で喜茂別に向かうことにした。カノと昌彦に伴われて田辺の家を出て、京極駅の玄関口にまで来て、ノリコは思わず後ろを振り向いた。

自分の後ろには、中空にその頂を輝かせて高くそびえ立つ羊蹄山の姿があった。

この田辺家に来た三日目に、正人と一緒に屋根に登って雪下ろしをした際、きれいな山だと感じたことが思い出された。

今日もまた、そのときと同じように真っ白く、くっきりと八の字を描いている山裾にノリコはしばし目をやった。

十二

大正十四年四月からノリコに焦点をあてて綴ってきたこの書き物は、前章にて終える。テーマがこの時点で尽きるからである。年次的には昭和十八年一月までとなったが、なおも時は流れ、ここ

に登場した人々はその後もいめいの人生を歩み、それぞれの死を迎えている。これに一言ずつながら触れて筆をおくこととしたい。

・田辺英二郎（舅一輔の実弟）

英二郎には四人の息子がいた。次男以下三人は志願して海軍に入った。兄の英介が国に迷惑を掛けたので、みんなが嫌がる海軍に入ったのだという。英二郎はそのことをしばしば語った。本当の理由かどうかは判らない、あるいは、息子自慢だったのかもしれない。

正人の葬儀後の数カ月ほどして、「喉が詰まって物が食えんじやが、兄貴の打ったソバなら通ると思うての」と、函館からわざわざ京極までやって来たことがあった。それが兄弟死に別れになった。

北海道大学病院で診てもらうと、食道がん。すでに手遅れという診断だった。昭和十八年十二月、函館にて死亡。六十一歳。

また、海軍軍人の三人の息子は、この一年も経たない昭和十九年十月のレイテ沖海戦で三人そろってフィリピン海域の藻屑となっている。二十九歳、二十六歳、二十四歳だった。

・古木カノ（母方直系の祖母であり、舅一輔の実姉）

晩年は南京極の息子夫婦と同居し、京極駅前の田辺家にしばしば来て孫娘ノリコの手伝いをして

いたが、中風で寝込むことになった。身体が衰弱し、昭和二十五年二月に自宅で死を迎えた。七十一歳を目の前にしていた。

ノリコにとっては、母親に等しいおばあちゃんだった。カノの死は本当に深い悲しみであった。

・田辺一輔（舅）

風邪をこじらせ、肺炎になって京極の自宅で急死した。昭和二十六年十二月。七十歳。熱烈な門徒であった。

日頃、「姉はんには頭が上がらんじゃ」としばしば口にしていたので、田辺家の人々は「カノ姉の後を追った」とささやいた。このときの葬儀にも高屋敷賢がわざわざ愛別から駆け付けてくれている。

大騒動を引き起こした向洞爺の山林原野は戦後の食糧難時代に買い手が現れ、諦めていたお金を新円で取り戻すことができた。現金や貯金が戦後のインフレーションで紙くず同然となったことを思うと、けがの功名であったと言えるのかもしれない。

・田辺英介（英二郎の長男）

函館で古書店を営む一方、詩誌の発行などの文芸活動をしていたが、戦後はパン製造販売の会社を立ち上げて社長になったもののその死はショックなものであった。

経営破綻から本人行方不明。昭和二十七年九月の新聞に、「元共産党員が腐乱体で発見」という見出しで大々的に報ぜられた。実は、この年の七月、パン工場内において面倒を看たはずの元従業員に鉄製ロストルで撲殺（頭蓋骨折）されていた。三十九歳。

・田辺猛四郎（舅一輔の実弟）

旭川での古物商に見切りを付け、昭和十八年十二月、一家を挙げて故郷四国高松にかねての望みどおり錦を飾った。戦争の行く先を見越すとともに、恵子が小学校に入る前に移住することを決断したのであろう。

高松では昔の庄屋風の邸宅を建てた。恵子を養育しながら晩年の余生を送っていたが、二回目の脳卒中が命取りとなった。昭和三十二年九月。七十歳。

・高屋敷賢（勲の実兄）

愛知県から愛別村中愛別に入植した草分け開拓者の跡取り。愛別村農業協同組合理事などを務め、旭川で開催されていた農業関係の会議中に倒れた。死因は脳溢血だった。昭和三十八年十二月、五十九歳。誰からも惜しまれた突然の死であった。

ノリコにとっても悲しい知らせであった。正人の葬儀に参列して京極の家が火の氣に乏しいことを知り、コブシの樹で作った立派な火鉢を送ってくれるなど、高屋敷家を出てからもあれこれと気

配りをしてくれた人であった。

・田辺キク（姑）

晩年はリウマチを患い、体力が衰弱し、自宅で嫁ノリコに看取られて息を引き取った。昭和四十一年十一月、七十七歳。

葬儀に駆け付けた一色シズからノリコはこのほか丁重なねぎらいの言葉を受けた。

・田辺清人（正人の実弟で、猛四郎の養子）

養父猛四郎とともに高松に移住し、その後は猛四郎から独立して洋装店を開業した。昭和四十三年九月死亡。肝臓がん。五十二歳。

・平岡康次（継父）

香川県旧三豊郡から名寄高台に入植して農業を営んだ。娘時代のノリコにとって文字通り厳父であつたが、晩年は穏やかな物腰の好々爺となった。昭和四十九年十月、自宅で大往生を遂げた。八十五歳。

・古木昌彦（母方の叔父）

南京極駅長を最後に国鉄を退職。ノリコにとって、子どものときから何かと力添いをしてくれた、忘れてはならない叔父だった。

最晩年は向洞爺の介護施設に入所。ノリコは見舞いに訪れて面会したが、精彩を欠いた老齡者の姿を目にするばかりだった。かつての面差しを見いだすことはできなかった。

昭和五十五年四月死去、七十二歳。

・一色シズ（正人の義姉）

娘を産んだ後に田辺家を飛び出し、小樽で暮らした。田辺家の中では異色のクリスチャン。霊名はマリア・イマグラータ。

ノリコは出産後に乳腺炎にかかり、その手術を受けるため小樽に出向いた際にもシズの世話になっている。その後も往き来は続いていたが、キクの死後は交際がしだいに遠のいた。

後年、層雲峡で行われた詩吟大会に参加した折りにノリコは偶然にもヨボヨボと歩く夫の武雄と出会い、シズの死を知らされた。平成四年六月病死、七十九歳だったという。英語ペラペラの一人娘ひとみは日系アメリカ人の実業家と結婚し、ハワイで暮らしているとのこと。

・平岡康一郎（康次の長男で異父弟）

父親の跡を継いだ名寄高台の米作農家。

昭和二十年出征することになり、ノリコは幼い息子を抱いて名寄に出掛けて見送った。旭川での訓練中に終戦となって戦地に赴くことは免れた。

虚血性心不全により、平成四年十二月、名寄市立病院で死去。六十七歳。

・高屋敷登（義兄賢の長男）

もともとは水田農家だったが、後にキノコ栽培の経営を軌道に乗せることに成功した。平成二十七年七月死去。八十二歳の長命だった。

しかし、ノリコにしてみれば、高屋敷家を出たときは小学一年生の子どもだったという印象が強いのか、訃報に接し、「若いのに死んでしまつて寂しくなるね」と口にしている。

・田辺ノリコ

昭和四十四年五月、五十歳のときに京極駅前の店舗をたたみ、札幌に移り住んだ。

昭和四十六年の冬に高松を訪れ、恵子が昭和三十三年に新婚旅行で来道して以来の再会となった。恵子の案内で栗林公園や金比羅さんなどを見物している。

札幌ではストアのパートタイム勤務や遺族年金で生計を立てていたが、平成元年に二世代住宅を建て、息子夫婦と暮らし始めた。

八十歳を目の前に控えた平成十年八月、これが最後の別れと心に決め、電車で中愛別に赴いた。

駅に近づくとも車窓から石垣山が目に入り、勲の出征中に農業実行組合の人々と登山したときのこと
が鮮明に蘇った。高屋敷家裏山に眠る勲の「墓」（石碑）に登が同行し、「南無妙法蓮華經」のお
経を上げてくれた。

九十七歳頃から体力や知力がめっきり衰え、令和元年五月、自宅にて百歳ちよつきり六カ月の一
生を終えた。医師の死亡証明書は心不全となっているが、要するに老衰といえるものであろう。

〔参考文献〕

- ・「市立函館病院要覧」（昭和十年七月発行）市立函館病院
- ・阿部長之助編纂「京極村史」（昭和三十二年一月発行）虻田郡京極村教育委員会
- ・「豊浦町史」（昭和四十七年九月発行）虻田郡豊浦町
- ・「京極町史」（昭和五十二年三月発行）京極町史編纂委員会
- ・「俱知安町百年史 上巻」（平成五年三月発行）俱知安町史編集委員会
- ・武井時紀「脇方のこと」（平成十年三月発行「追補 京極町史」所収）
- ・武井静夫「胆振線略史」（平成十年三月発行「追補 京極町史」所収）



編集室の窓明り



◇各作品の原稿（400字詰）枚数

「蜘蛛の糸」

6枚

「ファミリー」

141枚

「西南西よりやや西」

90枚

「環を描く」

24枚

「いずこよりいずこへ（京極編）」

139枚

（完結総枚数）

503枚

◇ピンクさん

この一年は目まぐるしく過ぎた。

働き方を変えた影響で、自分の時間をコントロールできなかったこともある。新しい仕事への挑戦は、やる気でカバーできると高を括っていた。緊張感を保つことはなかなか難しく、いまだに慣れない。

悠希マイコ

原稿も追いつかずどうしたものかと抗っていた頃に、小説仲間から「東京の文フリに出よう」と誘いがあった。単純な私に火が付いた瞬間だった。

そして今日。

信号待ちで車を止めた私は、横断歩道を歩く人に目を奪われた。

ピンクさん。

椽二十三号で「サンデー」という作品を掲載させていただいたのだが、そのなかで登場した

ピンクさんが目の前を歩いてる。

力が湧いてきた。

「ありがとう。ピンクさん」と独り言。

なので、今年、東京の文フリに参加します。よろしくお願いいたします。

◇もみじマーク、あと何年？

今、乗っている車は今年で十四年目を迎える。

毎日の通勤や、家族や東京に住む兄夫婦と甥っ子の送迎で大活躍をしている。ここ数年、バッテリーあがりやエンジントラブルで、JAFのお世話になり、ディーラーや保険会社から代車を借りた。

最近の車は安全運転通知機能が付いており、交差点で前の車が発進した時は、警告音で知らせてくれる。ついつい考え事をしていたり、空

調やオーディオの操作をしていると、後続車からクラクションを鳴らされる時があり、便利な機能だとは思う。

雪でアスファルトに穴があき、それを避けるために、走行車線から少しずれた時も「はみ出しているよ」と注意される。羊ヶ丘アンダーパスの数メートルしかない橋の下を通るだけで、自動的にライトがつく。

私は来年還暦を迎える。車の買い替えも、次回が最後なのかもしれない。至れり尽くせりの安全運転通知機能だけでも、あまりにも過保護なシステムに多少辟易している。

それでも悲しいかな。年々、判断力や瞬発力、集中力もなくなってきた。自分や家族、周りの人間を守るためにも、自動運転やアシスト機能は必要なのかもしれない。

鮎村尚

◇「知床旅情」

私の日常にラジオは欠かせない。

「手仕事をしながらでも、気軽に音楽や情報早く得られて役に立つのがラジオ。音があると寂しくないし邪魔にもならないから」

口癖のように言っていた母の言葉を、日々過不足なく実感している。

日本で最初のラジオ放送は、一九二五年三月二二日。私が好んで周波数を合わせるNHKF M・NHK第一放送では、三月に入ってから多くの番組で『放送開始一〇〇年スペシャル』が企画されている。懐かしい曲や音源が、育った昭和時代の記憶をゆっくり起こしてくれる。

三月八日のFM『歌謡スクランブル』という番組も特集が組まれていた。ゲストは歌手の加藤登紀子。MCとのトークを挟みながら流れて

きたのは「知床旅情」と「琵琶湖周航の歌」だった。曲紹介で、洗い物をしていた私の手は止まり、イントロに続き歌声が耳に届いた瞬間、喉の奥が絞られた。二曲とも、亡き父がよくレコードをかけ口ずさんでいたからである。

狭い父の書斎の白い壁。本棚。木目の机。その上には建築士だった父の専用スケールなどが、眼裏に柔らかく映し出されてきた。粗末なステレオでは「琵琶湖周航の歌」を加藤登紀子が歌い、黒い椅子には、時々歌詞をごまかしながら作業をする若き父がいた。ほろ酔いの時は、きまって「知床旅情」を情感たっぷり歌いあげた。けっして上手ではなかったのに、父の楽しいな頬の緩みに、確かに私も幸せだったのだ。

その父が、膝から降ろすのを拒むほど可愛がっていた初孫、つまり私の長男が、この春、結婚することになった。二歳までしか成長を見届

けられなかった孫が、新しい家族を作ると知ったら、父はどんな言葉をかけたのだろうか。長男が成人し、一緒にお酒を酌み交わすことを心待ちにしていた父だから、ほろ酔いで無理矢理「知床旅情」と一緒に歌わせたかもしれない。独身最後に、琵琶湖へ二人旅を誘っていたかもしれない。

想像の手で窓を開けた。浅い春の光にまぎれ入り込んできた涅槃西風に、眼がじわり沁みた。

中村郁恵

◇富岡聖堂

目下の拙作を書き進めるうえで伯母の登場が必要となった。私の父の姉にあたるが、全く血縁関係はない。養女だったからだ。伯母は数奇な運命のもとに生まれている。

入学前の私の記憶にあるものとしては、どで

かい跨線橋を登ったこと、スパゲッティの御馳走を前にして伯母は手で胸に奇妙なおまじないをしたことだ。後日、クリスチャンと母から聞かされた。今、思えば伯母の家は小樽市富岡町にあったのであろう。

もう一つの思い出がある。「現代詩集」（昭和三十三年二月発行）という古めかしい本が今もって私の書棚にあるが、これは伯母から借りたものだ。筑摩書房「現代日本文学全集」の一巻で、ちなみに頒価四三〇円。河井醉茗、伊良子清白とはじまって七十五名の詩人の詩が載っている。だが、不思議にもこの借用したとき（多分、高校生か大学生か）のことが記憶から抜け落ちていく。伯母が天国に召され、「返しなさい」と言われなかったのをいいことに結果として私の手許に残ったわけだ。

伯母はどこの教会に通っていたのだろうか

思い、ウェブで探してみた結果、カトリック小樽協会富岡聖堂に行き着いた。確証はない。私が勝手にそう措定した。

そんな経緯から、ここを訪れることとなった。小樽駅からタクシーに乗った。年配の女性ドライバーが私も行ったことがないと言うので、二人して礼拝堂に入った。宗教施設にしては珍しく写真撮影は禁止されていなかった。入場料金もなかった。

ステンドグラスの窓が実に美しい。長崎の大浦天主堂を模して造られた所以であろう。ここに掲載した写真は廊下にあったもので、勿論、実物はカラー。

小樽といえば、名の知れた観光スポットは数々あるわけだが、この聖堂は隠れた、密やかな名所というものであろう。

津坂格

◇原稿の募集

次号に掲載する原稿を次のとおり募ります。

一 募集作品のジャンル

本誌は創作を主体に編集していますが、エッセイあるいは文芸評論などを含めて募集を行っています。原稿枚数には特段の制限はありません。

二 原稿の書式

原稿のページ設定（文書スタイル）は、A4横置き縦書き一段組で、一行を四十文字、行数を三十行程度にしてください（フォントサイズ 10pt ないし 11pt で設定可能です）。

三 提出方法

「エディタ（拡張子.txt）」を最優先としますが、この場合、改行付きテキストではなく、プレーンテキスト（いわゆるベタ書き）にしてください。「ワード」もしくは「一太郎」でもかまいません。

ません。電子メールまたはUSBメモリーで送信、送付してください。

四 原稿の提出期限

令和八年二月末日

五 原稿の提出先

0650030 札幌市東区北三十条東十二丁目

四番十七号 渡邊護

Mail:wata.m@spice.ocn.ne.jp

六 編集・発行及び配付等

本誌の編集・発行及び配付等の運営に関する事項は、別途決定します。

—— 誌名命名 寺田文恵 ——

晋の国のひと王珣は椽^{てん}すなわちたるき
のごとき大きな筆を授けられた夢をみ
てのち、みごとに文が書けるようにな
ったという。

「晋書王珣伝」より

椽 第二十七号

令和七年六月三十日

発行 椽の会

札幌市東区北三十条東十二丁目

四番十七号 渡邊護

編集

小野寺麻理

悠希マイコ

渡邊護

印刷 オリンピア印刷株式会社

大阪市西区江戸堀二―一―十三―六階